この手のひらで消える雪のように（彼の娘：続編）

大島　有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
この手のひらで消える雪のように（彼の娘：続編）

【Ｎコード】
Ｎ４５１２Ｖ

【作者名】
大島　有

【あらすじ】
「美しいとは儚いということ」
？彼が口にした言葉。そして、僕の心の中にずっと生き続けている彼女、扶美との思い出の言葉。？
突然の事故で亡くなった扶美の面影をずっと胸に、人を好きになることを避け続けていた隆博の前に現れたのは、同じ大学の２歳上の先輩、悟。
隆博への思いを押し殺したまま学生結婚をした悟と、扶美への思い

を引きずったまま里佳子と付き合い続ける隆博。
そんな状況の中、戸惑いながらも悟の思いを受け入れる隆博。しかし交わる時は短く、その雪のように一瞬にして消えていく。

1話

リズムに心を委ねる。五感のすべてをその音に委ねる。心が解き放たれる心地よい空間に誘われるこの感覚。誰にも邪魔されることのない自由な空間。時間も忘れ身体の感覚もなくなってしまうような忘我の極地。

そこは自分だけの楽園だ。その音にすべてを委ねる。

リズムに乗ってキイを叩く。子供のような彼。笑うとくしゃくしゃになる目元。音に身をまかせ、そのリズムと振動に心も魂も自由に泳がせて、その一瞬、一瞬を楽しんでいる彼を、今この時、僕の目に映る彼の姿を記憶しておこうと思った。もう2度と戻らない時間。全神経を集中させて、彼の姿を心の奥深くに記憶する。

それしか出来ない。でも、それでいい。

あれはサークルの日帰りの旅行だ。

日本海の沿岸のちいさな漁村を訪れた。目的は昼食においしい海鮮物を食べることだった。案内された小さな料理民宿。海水浴場の近くにあって、夏は大勢の海水浴客でにぎわう民宿だが、まだ海水浴シーズンには程遠い。訪れる人はまばらだ。

僕たちは案内された広間で向かい合わせに座り、食事を始めた。ビールや焼酎などのアルコールも出て、飲める人たちはそれなりに楽しんでいたが、僕は一滴も飲めない下戸だった。

窓の外からは海が見えた。食事もそこそこにして、早く海を見に行きたかった。新鮮な海の幸は確かにおいしかったが、生物を食べ続けたせいか胃の辺りがむかむかしてきた。それとも、先程まで揺られていたバスのせいだろうか。

（早く海が見たい。海岸沿いを散歩したら気分が良くなるんじゃないだろうか。）

そんなことを考えていると、

「熱いうちにお召し上がり下さいね。」
宿のおかみさんが僕の前に茶碗蒸しを置いた。それを合図のように僕は立ち上がった。そして、広間を横切り、玄関にならんでいる宿の下駄をつっかけて外に出た。

部屋の中のむっとした熱気に包まれていた僕には外の風が心地良かった。宿の隣には民家や民宿などの建物が密集していて、車がやっと1台通れるかどうかわからないほどの細い路地が連なっている。海の方からはぷうんと潮の香りがした。僕はその路地を海の方へ歩いていった。宿からほんの2、3分程歩くと海水浴場がある。僕はコンクリを積んで出来た防波堤を歩いた。目の前には日本海が広がり、ほんの目の先には景勝地として名高い神島が見えた。
いい眺めだなあと思った。山国で育った僕には海は珍しく、海を見ると胸がわくわくした。大人になった今でもだ。波が荒々しいイメージがある日本海だが、ここは内陸部に近いせいか波が穏やかだ。僕は防波堤のコンクリの上に座り、寄せては返す波の動きをぼんやり眺めていた。無心になって波が作り出す泡を見ているとだんだん気分がすっきりしてきた。でも本当はそんなに気分が悪いわけではなかった。
僕は待っていた。ぼんやりと、いや、はっきりと。
彼が来るのを。
席を立った僕が、数分立っても戻って来ないことに気づいて。気分が悪く、外へ出かけたのだろうと、そう思って。もしくは、皆の食事が終わりもうそろそろ出発だと呼びに来るのではないかと。
でも、彼は来なかった。時計を見ると下駄を突っかけて出てから、15分ほど経っていた。時間的にはとうに食事が終わり、次の目的地に出かける準備をしなければならないような時間になっていた。
何故、彼が来ると思ったのだろう。来るはずがない。
自分のばかな考えに苦笑しながら腰をあげた。
さて、気分も良くなったし、そろそろ戻らないと本当に置いてか

れそうだ。
路地を上がり、一つ目の角を曲がった所でいきなり彼に出くわした。
彼はこちらには目もくれず、僕に気づかないふりをして、
「ああ、やっぱり外は寒いなあ。」
聞こえるような大きな声でつぶやいた。
（なあんだ。気づいているんじゃん。）
そして僕の前を横切り、海岸線の方へどんどん歩いていった。
（僕を迎えに来てくれたんだろうか？それともただ単に風にあたりにきただけ？）
僕はちょっと迷った。もし、僕を迎えに来てくれたのじゃないなら追いかけていくのも変だし、さてどうしようかと一瞬躊躇したが、結局は早足で彼に追いつくことにした。
「先輩はそんな薄着してさ、風邪引いてるくせに。」
彼の背中に向かって少し大きな声を出して悪態をついた。昨日会った時、鼻をぐずぐずさせていたことを思い出したからだ。風邪を引いているくせに薄い長袖のシャツを一枚着ているだけだ。
「ちゃんと着ているさ。こんなん風邪のうちに入らんよ。」
後ろを振り向きもせず彼が言い返した。
僕は彼に追いつき、並んで歩いた。迎えに来てくれたのがどうか、聞こうと思ったが結局口をつぐんだ。
その瞬間、僕たちの真上を鳥が飛んでいった。沖の方へ飛んでいく鳥を指差して
「あれ、かもめ？ワシかな？」
「さあな。」
ぶっきらぼうに答えた彼の薄い唇に目がいった。
？美しいということは、儚いということだ。？
又あの時のことを思い出した。あれから何度か彼の言葉を思い出

す。
ワークショップでの出来事。ある小説の原文をそれぞれが思い思いに訳したものを、皆の前で発表しあった時の事だ。
小説のあらすじはこうだ。
薄幸の少女。病に侵され残り少ない命。彼女の元を度々訪れる青年。ふたりして窓の外を眺めていると、ふいに雪が降り始めた。綺麗だと、喜び勇んで外へ駆け出す少女。その手に雪を取ると、一瞬にして溶けて消える。手に消えた雪を名残惜しそうに眺め、小さく息を吐く少女。辺りの空気が小さく小刻みに振動し、彼女の杞憂が彼の胸にも痛いほど伝わってきた。程なく消えゆくであろう自分の命の灯と、掌に溶けた雪の儚さが同じものだと感じたであろう彼女の心境を思い、青年の胸によぎった思いの一節をそれぞれが訳した。
?いくら美しいものでも、形あるものはすべて消える。?
?どんなに美しくても、形あるものはその形を変えていき、いつまでも同じ姿を留めておくことは出来ない。?
といった訳が多かった。
その中で彼だけが、
?美しいということは、儚いということだ。?
そう訳した。簡潔にして心に響くフレーズ。
原文から離れすぎているという意見が出た。
確かに。訳手の意見や感情が入りすぎるのは良くない。いかに書き手の心を、その物語の意図とすることを率直に、解りやすく、そして真実を読み手に伝えるか。
だけど僕は彼の訳したそのフレーズに心を惹かれた。それは、僕にとって特別な忘れえぬ言葉だったからだ。そして何故かその彼の薄い唇や、彫りの深い横顔が記憶から離れず、何度も頭の中をよぎった。
「何だ。」
横顔に視線を感じたのか彼が尋ねた。

「いや、別に。」
視線を逸らし、僕は空と海を交互に眺めた。薄いブルーとグレーが入り混じったような空。沖を渡る風。風に乗ってときおり鼻をくすぐる潮の香り。眼前に見える岩を連ねた見事な景勝地。海岸線を縁取る松の木立。時間にしてわずか数分の出来事だったが、時が止まったような感じがした。もう少しこうやって海を見ていたい。そう思っていると、おもむろに彼がくるりと方向転換をし、
「これ以上行ってもなんもない。戻るぞ。」
早足でどんどん宿の方へ歩き出した。僕も慌てて彼の後を追いかけた。

2話

それから僕たちはマイクロバスに乗り込み次の目的地に向かった。僕はバスに揺られながらぼんやり一週間前のことを思い出していた。

一週間前の夜、僕たちの学部内で飲み会があった。駅前の繁華街の一軒の居酒屋。僕たちの学部で飲み会をする時はいつもそこだった。全国的に店舗を持つチェーン店。店内は僕たちのような学生のグループでいつも一杯だった。僕は用事があって少し遅れて店に入った。すると、奥の座敷のにぎやかな15、6人のグループから

「隆博、こっちだ！」

裕樹が顔を出した。

「ごめん。遅くなった。」

「いや、いま始まったばかりだ。」

「で、今日は何の集まりだ？」

裕樹の隣に腰を下ろしながら聞いてみた。

「あほか、お前は。そんなことも知らんと来たんか？」

「いや、ごめん。しっかり聞いてなかった。場所と時間だけチェックした。」

「相変わらず、マイペースだなあ。」

裕樹は呆れ顔で、肩をすくめた。

マイペースとは自分のことを形容する名詞として、僕の友人たちがよく使う言葉だ。

確かに自分でもマイペースだと思う。だけど、こういう人が集まる場所が苦手ではないし、来たら来たでそれなりに楽しむし、人とも会話する。自分は下戸で1滴も飲めないが、飲み会は嫌いじゃないし、この雰囲気は好きだ。もちろん酔っ払いともペースをあわせて盛り上がる。でも、自分の時間が一番大事だ。ずっと人と一緒だと疲れる。周りからは人当たりが良いと言われるが、それは自分の時

間があって、人と一緒の時間との区別をきちんとしているからだろう。その時間内では人に不愉快な思いをさせないよう、場を和ませようとするところがあるみたいだ。さしあたってどうでもよいことはあまりしっかり把握していないことが時々あるみたいで、今日の飲み会の趣旨も、幹事の健二から送られたメールからさっと時間と場所だけ見て飛んできたのだ。

店員が飲み物の注文を聞きに来た。

「ウーロン茶ちょうだい。」

店員が注文を取り下がっていくと、隣の裕樹に耳打ちをした。

「で、今日はなんの催し？」

「お前知ってるだろう？４年の水木先輩？」

「ああ。」

「できちゃった結婚なんだって！」

「えっ？」

僕は聞き返した。

４年の水木悟先輩。僕の学部は翻訳家や通訳を目指す学生の多い外国語大の英文学科だ。そうでなければ外資系の会社に就職する学生が多い。水木先輩は僕と同じ学部で、学部内の翻訳家をめざす学生で作るワークショップに籍を置いている先輩だ。そのワークショップでは何度か会っているが、女関係の噂など聞いたことがなかった。というか、僕があまり親しくしゃべったことがなかっただけで、裕樹の話によるとかなりもてる人らしい。ガールフレンドも何人かいたらしいけど、どうもそのうちのひとりが妊娠したらしい。それで、卒業前だけど年内に籍をいれることになって、今日は内々でそのお祝いらしい。

「へえ、そうなんだ。」

「で、当の本人さんは？」

「あれ、あの前の方に居るだろう。お前もお酌してこいよ。」

「ああ、そうだな。」

前方をみると水木先輩はだいぶ飲まされたみたいだ。顔を少し赤くして、数人に仲間に囲まれている。彼は身長がかなり高く、学生時代はずっとラクビーの選手だったらしい。細くて、顔立ちも彫が深く、女の子には確かにもてそうだ。僕もあまり親しくしているわけではないのでその人となりはよくわからないが、男気があって頼まれると嫌と言えないところがあって、後輩の面倒見などはかなりいいみたいだ。声が低くて特徴があり、女性のような細い指をしている。口が悪いことで有名だが、その手先を見ると神経質な所もあるのだろう。

僕は近くにあったビール瓶に中身が入っていることを確認して、それを持ち、先輩の席へ向かった。

「どうぞ。ビールでいいですか？」

ビール瓶を傾けると、

「おお、隆博か。」

「だいぶ飲まされたみたいですね。」

「うん。今日はかなりいい気分で酔っ払ったみたいだ。」

「・・・あの、おめでたいことだそうですね。僕何も知らなくて・・・」

そう遠慮がちに聞いてみた。すると先輩もちょっと罰の悪そうな顔をして、

「・・ああ、まあ、なんてゆうかな。俺も予想外のことでなあ。ちょっと、気持ちの整理が・・」

所在無げに頭に掻く。

「でも、おめでとうございます。」

そう言うと、先輩はふうっと鼻から大きな息を吐いて

「ま、俺も年貢の納め時だな。それにしても２２歳にして、後の人生はかみさんと子供を食べさせていくだけで、俺の人生は終わったも同然だな。」

「そんなことといって。おめでたいことなのに。」

「そうかな、でも隆博らがうらやましいよ。まだ２０歳だろ。これ

からもっといろんな経験が出来るだろ。遊びでも勉強でも。それに女のことにでもな。でも、俺はもう決まってしまった。一生懸命働いて子供とかみさんと家庭を作る。それはそれでいいんだが。まだ俺22だし、もっとこれからいろんな選択肢があったのかなあと思うと、なんだか他の連中らが自由で縛られるものがなくて、いいなあなんて思う時がある。」

先輩は言いながら、うつむいて目の前の突き出しの小鉢を箸でもてあそんでいる。

何だかそんなしぐさが子供っぽい。でも、無理もないか。先輩といっても2こしか違わないし、仮に僕が2年後に結婚して家族を持って養っていかないといけないなんてことになったら、考えただけでじたばたしちゃいそうだ。結婚なんて全く実感わかない。その責任に押しつぶされそうだ。

僕は話を変えてみた。

「先輩は就職先決まってるんですか？」

「うん、東京のT株式会社。」

「あ、そこ外資系の。超倍率高いとこじゃないですか。なかなか内定もらえないですよね。すごいじゃないですか？」

「うん、まあそれはありがたいんだけど。」

「お前は？」

「僕は翻訳をやりたいんです。まだしっかり決めてるわけじゃないけど。どっかの出版社にもぐりこんで、商業紙の翻訳でもやれたらいいなあって。」

「そうか。お前文才あるもんな。」

「文才ですか？」

人から文才があるなんて初めて言われた。

「いつぞやのワークショップでの課題でそう思ったのがあった。」

「えっ？いつのでしたっけ？」

「珊瑚礁の白化現象について」

「ああ、あれは環境保護についてがテーマでしたよね。」
「文章がうまく書けるってことは、まず、読解力があるってことなんだろうなって思うんだ。翻訳は原文の読解力が一番の基礎だけど、それだけじゃない。その原文をどこまで読み込めて、どこまで原作者の意思に沿うように表現できるか。大事なのは表現力だ。でも、でしゃばってはいけない。自分の言葉で表現すればいいわけじゃない。原作者の心を読むんだ。それに沿ってなおかつ自分のオリジナルティの翻訳が出来るかだ。その原書の言語を理解してればいいっていうことじゃないと思うんだ。なんかうまく言えんが・・・。だいぶ飲んだんでね。頭がまわってないんだ。」

でも、先輩の言うことはわかった。やはりこの人は頭のいい人だ。頭の回転が速いっていうのかな。人の言うことをすばやく理解して、無駄なく簡潔にそして、自分の言葉をうまく操る。先輩は早口でもあるし、しゃべりのテンポも速い。頭の悪い人としゃべってるときっといらいらするだろうな。
それにしても、先輩が僕の文章を読んでいたとは初耳だった。ちょっと、うれしかった。先輩は見目も良く、後輩の面倒見も良いので、後輩連中の中ではちょっとした有名人だ。男から見てもかっこいい男って言うのかな。変な言い方だが憧れてるやつらもいるんじゃないかな。

3話

そうすると、先輩は眠たそうに目をしょぼしょぼさせて、
「隆博。ちょっとウーロン茶、頼んでくれ。」
酔い覚ましかな。
店員を呼びに立ち上がったのと同時に、入れ替わりに他のやつらが酌をしに来た。それでそのまま自分の席に戻る。
自分の席に戻ると、裕樹と健二が陣取ってすでに、かなりべろべろに酔っていた。
「だいぶ飲んだな。」
「おう、隆博。水木先輩どうよ？」
「う～ん。結婚って人生の墓場っていうの、ほんとかな？」
「後悔してるんかな。」
「まあ、２２歳で人生決まってしまうとなあ。」
健二が口を開いた。
「だって、俺だったら、まんだ遊びたいもん。いろんな子とやりたいしな。」
と、にやにやした。
「俺も、俺も！」
と、裕樹が続く。
「やっぱりそれかよ。」
「なんだよ、隆博は。てめえだって似たようなもんだろ。」
「俺、おまんらみたいに盛んじゃねえしよ。」
「何言ってんだよ。」
健二が酒くさい息を吹きかけて肩に腕を回してきた。
健二はちょっと小太りで、見目がいいわけではないんだが、結構女の子にもてる。その秘密はかなりのまめ男で押しが強い。明るいし喋りがうまいし、ユーモアもある。コンパなんかに行くとかなりの確率で「お持ち帰り」ができる。電話もメールもまめだし、もち

ろん誕生日や記念日も忘れない。僕は時々感心してしまう。
「で、今日はどうすんの？」
聞き返すと、
「まあ、４丁目だな。この後は。」
「最近熱心だな。」
返すと
「まあな。」
酔っ払って目の据わった顔で健二が意味ありげに笑った。
「４丁目」というのは最近健二が気に入って、足しげく通う北欧クラブのことを指す暗号だ。なんでもスカンジナビアから来ている子に執心らしい。僕もよく誘われるけど外人の女の子には興味ない。健二も最近彼女と別れたばかりで寂しいらしい。もてるわりには長続きしないらしいがヤツのことだ。ま、あれこれと話はあるらしい。
いろんな話をしていると、あっという間に時間が経ってお開きの時間が近づいてきた。
「そろそろお開きだ。」
もうひとりの幹事が会費を集めに来た。千円札を5枚財布から出していると、その幹事の先輩が僕に
「隆博。お前な、悟送ってくれんか？」
と、もちかけた。
「え、水木先輩を？」
「うん。俺んら飲んでるしなあ。悟、かなり酔っててなあ。電車じゃ危ないし。」
「隆博、お前飲んでないだろ？」
「はい。」
僕は車で来ていて、この居酒屋の地下の駐車場に止めてあったし、送っていくのは構わないけど。と、水木先輩の方へ目を向けると大声でなんだかわめいている。かなり泥酔状態みたい。やばいな。
「じゃあ、頼むぞ。」
はあ、とうなずくと、健二と裕樹の顔をのぞいた。

「お前んらも一緒に送ってくわ。」
「あー。俺んらはあかん。［4丁目］へ行くんだ。」
「そんなこと言わんと、先輩を一緒に送っていこうぜ。」
「水木先輩はお前にまかした。」
「ええっ～。」
ちょっとブルーだった。あの泥酔状態をひとりで送ってくの？大丈夫かな？
健二も裕樹もふたりしてさっさと会費を払い、カウンターの所でタクシーなんか頼んでる。
仕方なしに水木先輩の側に行って
「僕、送ってきます。」
声をかけると
「うん、すまんな。」
とは答えたが後が続かない。戸惑って、周りの先輩らに目を向けると、
「とりあえず、お前の車まで乗せるわ。」
そう言って3、4人で先輩を担ぎ出した。
先輩がこんなに酔っ払った姿なんて初めて見た。何度か飲み会に同席することはあったけど、確かこんなに飲む人ではなかったように思う。
「寝てしまうで。大丈夫だから、悪いな。」
ひとりの先輩が僕に目配せした。
まったく正体なく酔った彼に、皆で靴をはかせ、上着を着せ、4人がかりでエレベーターに乗せ駐車場に運んだ。その間、彼はなんだかんだと意味不明なことをしゃべっていた。もちろん解読不能だ。健二と裕樹はいつの間にかタクシーに乗り込み、夜の街へ消えていった。
（ちぇっ、薄情なやつらめ）
心の中で舌打ちをした。
何とか僕の車の助手席に先輩を乗せ、運転席に座りエンジンをか

けると、
「隆博。悟の家わかるか？」
聞かれたので、だいたいはわかるけど行ったことがないので、誰か同行して欲しいような事を言ったのだが、他の先輩は皆、別方向だった。それでしかたなしにひとりで彼を送っていくことになった。
その間中、隣の先輩は意味不明なことを叫んでいた。

車を走らせると嘘のように彼は静かになり、すーすーと寝息を立て始めた。僕は内心ほっとした。運転中に暴れ出したり吐いたりしたらどうしようかと思ったが。こんな時飲めん人間は損だなあと思う。うちは親父もお袋も、それから兄貴もざるのように強いのに、僕だけだ。飲めないのは。妹はまだ未成年だからわからない。アルコールを分解する能力がないらしい。飲める家系で家に酒がないわけがなかった。ので、兄貴と一緒に未成年のうちからこっそり家で飲んだりしたことはあるが、ひとくちふたくちで顔が真っ赤になり、鼓動が早くなり頭がずきずき痛み出した。ビール、焼酎、ワイン、カクテル、日本酒。いろんな酒類を試したが、結果はどれも同じ。なんでお前だけアルコール分解しないんだろうなあと、兄貴は首をかしげた。その経験から自分は酒が飲めないんだと重々理解していたから、もちろん、入学したての歓迎コンパの時も辞退した。が、新入生の立場上、そうもいかなくて、先輩らに無理やり飲まされた。その翌日の苦しかったこと。病院に行ったら「急性アルコール中毒」ですね、なんて言われブドウ糖の点滴を受けた。2、3日は体の調子がさっぱりしず、やはり酒は飲むべきでないと硬く心に誓ったことがあった。ただ酒が飲めないと、こういった酔っ払いの送り迎えをさせられたり、飲んでることに乗じての悪ふざけも出来ないし、幹事にさせられて人の面倒をみることになるとか、デメリットも結構ある。
が、まあいいか。
先輩の寝顔を見ながら心の中でつぶやいた。

口が悪く、きついっていう印象が僕の中で強かったので、こんな無防備な顔で寝息をたてる先輩を見ているのが不思議な感じだ。

車を走らせる。駅前の繁華街を抜けて郊外へ１５分程走らせると、僕のアパートに着く。それを通り越して、隣町の先輩のアパートへ向かう。ふだんは車を使わず、電車やバスなどの交通機関で移動するので、アパートは駅の沿線上に探した。その分家賃は高くなるし、ひどく狭いけど。でも、ひとりだから別に不便はない。だいたい寝に帰るくらいだし。

信号待ちで止まる。先輩の顔を覗き込んでみるが起きる気配さえない。大丈夫かな。熟睡している。青になったのに気づかず、後ろからクラクションを鳴らされた。慌ててアクセルを踏む。そういえば、こうやってこの人と2人きりになったのって初めてだ。

僕が今のワークショップに参加したのは入学してすぐくらい。その時初めて先輩に会った。僕らのワークショップは会員が２０人ほどだが、だいたいいつも参加するのは１２、３人。メンバーは大体決まっている。月に2度。大学の講義室で集まって、その時決めたテーマに沿って、自分の興味ある翻訳物を探し翻訳する。それをメンバーに読んでもらって講釈を受ける。そんな活動が主だ。先輩を最初に見た時の印象がとても強く、背がひょろっと高く、声が低く特徴があった。それと、初対面の時のワークショップで、先輩が自分の受け持ったメンバーの作品に講釈をたれた時の口の悪かったこと。歯に衣をきせぬとはまさにこのこと。ずばずば自分の思ったことを言い、相手を批判する。もちろん批判だけでなく評価もするが、もうちょっとオブラートに包んだ言い方がないのかとびっくりした。僕の作品があの人に当たったらきっとぼろくそに言われるんだろうな、とびくびくした覚えがある。しかし、不思議に人から嫌われるわけではなく、後輩からは慕われるタイプだ。ま、言ってることは的を得てるし、反面、人の面倒見が良く、ときおり子供みたいに無邪気に笑ったり騒いだりするところが心安いのだろう。

ハンドルを握りながらそんなことを思い返していると、彼のアパートの近くの四つ辻まで来た。赤信号で車を止めた隙に、隣の先輩の肩を掴んで起す。

4話

「もうすぐ着きますよ。」
「・・・ん～。誰だ。」
眠たそうな声が返ってくる。
「堀江です。」
「・・・・隆博か。」
「そうですよ。」
「・・悪いな。送ってくれたんか？」
「もう、着きますよ。」
起きるのかと思ったら、またすぐ寝息が聞こえ始めた。
まあいい、まず目的地まで走ろう。

「先輩。」
アパートの駐車場の脇に車を止めて、体を揺さぶってみた。彼は“うん、うん”と生返事を返した目を覚ましてはいるみたいだが、半分はまだ夢の中だ。
困ったなあ。
これじゃあ部屋まで担いでいくしかないかと思い、
「部屋の鍵は？」
と聞くと、
「・・・うん、乃理子がいる。」
また眠そうな声をあげた。
（乃理子？・・ああ、奥さんか、もう一緒に住んでるのかな？）
「部屋まで送ってきますよ。ほら、シートベルトはずして・・・」
酔っている彼に手を貸すために、座席のシートベルトをはずそうとして彼に覆いかぶさるような形で運転席から手を伸ばした時だ。
半分眠っていると思っていた彼が、はっきり起きているかのような早い動きで、いきなり僕の右腕をつかんだ。そして、反対の手を背

中に回されるとあっ、と思う間もなく僕は彼に抱きしめられるような形になった。
（何？）
思ったのもつかの間、次の瞬間には彼の唇が僕の口をふさいでいた。
何が起こったのかよくわからず、僕はめまいのような感触を覚えた。だけど、むっとするタバコと酒の匂いが現実を認識させる。
（キス？）
キスしている。彼が僕に。
反射的に彼の胸に手をついて体を起こそうとすると、反対に物凄い力で抱きしめられ、体の自由を奪われる。それに抵抗しようと大きな声をあげた。
「先輩・・・」
一瞬、目が合った。彼は酔っ払っているんだろうか。
僕が見た先輩の目はしらふの時と同じに見えた。とても静かに何か思いつめたような、酔っているとは思えなかった。
（僕だとわかっているんだろうか？）
僕は混乱する頭で必死に冷静になろうと取り繕った。
「先輩。まだ部屋まで着いていませんよ。乃理子さんと間違えないでくださいよ。」
僕の声は少し震えていたかもしれない。彼はきっと、奥さんと僕をまちがえてキスしたに違いない
そうでないと、・・・困る。
先輩は僕の目をじっと見たが、次の瞬間、まったく正常さを取り戻したように、
「ああ、ひどく飲んだな。まだ頭ががんがんするよ。」
笑って自分でシートベルトをはずしにかかった。
僕が車を降りて助手席に回った時、外に人影が見えた。よく見ると若い女性が近づいてきて、

「あの・・」
声をかけられた。
助手席から降りた先輩が彼女に気づいて、
「乃理子。」
(ああ、この人が)
「今、車の音がしたので、送ってきて頂いたのかと思い下へ降りて来てみたの。」
「ああ、かなり飲んでな。隆博に送ってきてもらったんだ。」
僕の方へ目をくれた。が、まだ足元がふらふらしている。僕は慌てて、彼の脇へ手を回して身体を支えた。
「どうも、すみませんでした。ご迷惑をおかけしてしまって。」
彼女が頭を下げた。
暗いので、よくわからなかったが、水銀灯の下で見た彼女は先輩よりも大人びて見えた。年上なんだろうか・・・?
それよりも今の・・見られたんじゃ?
僕は努めて冷静に
「いえ、同じ方向ですから。」
「こいつは同じ学部の後輩で・・」
先輩がろれつの回らない口で僕を紹介しようとしたので、堀江です、と自分で自己紹介した。
「木島乃理子です。もうすぐ水木になりますが・・」
(ああ、やっぱりそうか)
「おめでとうございます。今日はそのお祝い会だったので、乃理子さんもご一緒すれば良かったのに。」
そう、声をかけると
「ええ、ご招待を頂いたのですが、悟さんが嫌がるので・・・」
(門外不出か。そんな感じだな、先輩って。)
そんな話をしているうちにも先輩の足取りがふらふらして、支えている肩がずっしり重くなってきたので、まず、部屋まで送り届けることにした。

部屋まで送り届けると、彼女は本当にすまなそうに頭を下げて
「ありがとうございました。迷惑かけてすみません。」
何度も繰り返した。
「気にしないで下さい。それより、先輩だいぶ飲んでますから早く介抱してやってください。」
そう言って、?休んでいって下さい?という彼女の誘いを丁重に断って車に乗り込んだ。彼女は駐車場の脇に止めてある僕の車の所まで来て見送ってくれた。

僕はひとりになってアクセルを踏み込むと、安心し、どっと疲れが出た。めまいのような感覚を覚えた。先ほどまで彼女の前では冷静さを装っていたが、内心どきどきだった。
彼女があれを見ていたのか。先輩は酔って、あんなことを?
でも、あの後僕を見つめた目は確かにしらふだった。僕を見た彼の目を思い出した。何を思って?ただの悪ふざけだったらいいんだけど。悪ふざけにしては過ぎる。舌までいれなくても。ディープキスだ。男と女がするような。彼はそういう趣味があるのかな?言われるまでもなく、僕はノンケだ。男とキスしたのなんて初めてだ。
あれこれ考えてみたが、ひとつ不思議なことに気づいた。彼はどうしてあんなことをしたんだろうと、あれこれ考えを巡らせることはしても、それに対して怒るでもなく、嫌悪感を持つわけでもなく、ただ客観的にその事実を見ている自分がいた。

何だろう?この感覚は?本当だったら嫌悪感を感じても不思議ではない事なのに。
ふいにあのワークショップでの彼の言葉を思い出した。
?美しいということは、儚いということ。?
そしてその言葉を口にしている彼の薄い唇。
心臓が引っ掴まれた。頬が赤くなる。あの唇で僕にキスを?
初めてキスをした中学生の頃のことを思い出した。こんなに胸が

波打っているのは、あの時と同じ？
いや、何馬鹿なことを考えている？

ふいに頭の中を扶美の姿がよぎった。肩まで伸ばしたストレートヘア。いつも控えめで、大人しく、透き通る声で静かに話した。
「綺麗ね。」
薄い透き通るような花びらを手に乗せて、僕の方を振り返った。

校庭の桜の木。満開の花の下。風に乗って散る花びらを名残惜しそうに拾い集め、扶美はそう言った。
ずっと好きだった。ずっと一緒にいたかった。
たぶん僕はあれから恋をしていない。恋をするときめきってどんな感じだったのか、もう遥か遠い昔のことのようでうまく思い出すことも出来ない。
そう、扶美のことが好きだった。いや、たぶん今でも。
僕はさっきのキスを忘れようとした。あの唇を扶美の柔らかな唇とすり替えようとした。そう思いながらハンドルを握る。うまく出来ない。
車の時計を見るともう夜中の２時を過ぎている。眠らない生き物のように、２４時間のコンビニの明かりが無遠慮に煌々と行過ぎる車を照らす。気づくと、さっき彼に掴まれた腕が、今になってずきずき疼くように痛み出した。

5話

1週間後。
学内の廊下でばったり水木先輩に会った。先輩は僕を見かけると軽く手を上げ、
「隆博！」
大きな声で僕を呼んだ。
「この間は悪かったな。まったくあんなに飲んだのは久しぶりだ。」
「乃理子に聞いたんだが、えらい迷惑かけたらしいな。」
子供のような顔をして笑った。
「いえ。」
先輩のそのくったくのない顔を見ると何故か胸がどきんとした。
それを悟られまいと、
「もう一緒に住んでるんですか？」
僕は彼女のことに話題を振ってみた。
「・・うん、まだ籍はこれからなんだ。だが、とりあえず乃理子が一緒に住みたいっていうもんだから、今の俺が住んでいる所へ呼んだんだ。」
（ふうん。なるほど。彼女は年上みたいでしっかりした感じにみえたけど、きっと先輩にべったりなんだろうな。なんだかそんな気がする。）
「へくっしょん。」
オーバーアクションで彼がくしゃみをしたので、
「風邪ですか？」
聞いてみると
「うん。まあ、たいしたことないけどな。」
「それより、明日サークル内の日帰りの旅行、行くんだろ？」
明日、北陸の方へ出かける予定だった。これは授業やワークショ

ップとは関係ない。まったくのお遊びだ。気のあったメンバーで、テニスやスノボーや旅行など。お遊びサークルだな。健二が入っていて誘われたから、たまに気が向くと参加している。女の子も多いから、出会いを求めて入ってくるやつが大半だが。健二らしい。僕はそんな軽いノリが嫌で、健二にしつこく誘われると、仕方なしにたまに参加するくらいだ。

「あれ、先輩も入ってるんですか？」

「まあ、ほとんど出ないけどな。」

と言って、僕も知っている同じ学年の先輩の名前を出して、その人に誘われるとたまに参加するようなことを話した。僕もたまにしか出ないので、水木先輩もそのサークルに籍をおいているとは知らなかった。

「明日、行くんですか。」

「うん、お前も行くんだろ。」

「ええ。」

「そっか。じゃ、また明日な。」

そういって先輩は手を振って去っていった。いつもと同じ先輩だ。あのことはやっぱり酔っ払っていたんだろう。

バスは海沿いの国道を走り続けていた。前の席に座っていた健二が座席越しに顔をのぞかせて

「隆博。大丈夫か？」

声をかけられてはっとして顔を上げた。

いろんなことをあれこれ考えていたものだから、目的地に着くまでずっとぼんやりしていた。次の目的地の大きなレクレーション施設の門が見えてきた。そこで皆でパターゴルフをすることになっていた。３８ホールはあるけっこう大きなパター場だ。

バスが止まった。僕が大丈夫だと答えると、彼は僕を誘い数人の女の子とバスを降りた。

彼女たちがパター場を一緒に回ろうと、僕の回りを囲んだ。それ

に答えながら、僕の目は水木先輩を追っていた。
何故だろう。先輩のことが気になった。あの夜のことを何か先輩が言うのではないかと思っていた。それは期待なのか、何なのか。確かめたかったのか。
何を？でも、そんなことなど何もなかったかのようにいつもと同じ彼だった。
さっきは風にあたりにきた僕を迎えに来たのかと思ったが、何も特別なことは言わなかったし、今も女の子たちに囲まれて、誰とコースを回るか雑談をしている。
「隆博くん。なんだか今日はぼんやりしてる。」
「ねえ。せっかく久しぶりに参加してくれたのに。」
彼女たちが口々に、僕がぼんやりして楽しんでいないことを責めた。
これはいかんなと僕も思い直し、
「よし、なにか賭けようか？一番になった人にはみんなで何かおごるとか？」
「やった。アイスクリームとか？」
「何でもいいよ。」
「でも、女性陣にはハンデつけてよ。」
「そりゃ、もちろんだ。」
健二が愛想よく笑い、僕たちは女の子2人と4人のグループになり、パターを借りに受付へ向かった。

誰だろう。気持ちよく寝ているのに。
誰かが、僕の首を手で触れる。その手を払いのけようとすると、執拗に僕の首に腕を巻きつけ、引き寄せて口づけしようとする。僕が顔を背けて逃れようとすると、ものすごい力で頭を押さえつけて唇を寄せてくる。息が出来ない苦しさにそれを跳ね除けようとすると、腕を掴まれ、そいつは執拗に僕の口をふさぐ。僕はひどく嫌がっているんだけど、どうにも出来ない。うっすら目を開けて、相手

を確かめようとする。そこで、はっとする。
（先輩！）
頭の側で目覚し代わりに置いてある携帯電話のアラームが鳴っている。その音で目が覚め、反射的に手を伸ばしてアラームを止める。
（・・・寝汗が気持ち悪い。）
べたべたした寝汗が首筋にまとわりついている。
僕は今見ていた夢を反復した。
（何故だろう。ひどい夢だ。）
（こないだのことがよほどショックだったらしい。）
先輩だった。
ひどい夢だ。

振り払おうと思えば思うほど、執拗にあの夜のことを思い出してしまう。
あれから北陸へ行ったときも、先輩のことが妙に気になってしまった。知らぬうちに目で彼を追ってしまっていた。
先輩はどうもあれから僕のことを微妙に避けているみたいだ。あの時もあまり話らしい話もしなかったし、目が合うとふっと、目をそらした。
僕の気のせいだろうか？というか何故僕があの人に執心しなければならないんだ。ばかばかしい。確かに憧れてる先輩だと思うが、あれくらいのことで、動揺して・・・・
これ以上ベッドの上でじっとしていると、変な妄想に捕らえられそうで怖くなり、布団をはねのけてシャワーを浴びることにした。
時計を見ると１０：３０を回っている。カレンダーを見る。土曜日だ。

やばいな。急がないと間に合わないかも。
というか、すっぽかそうか。気乗りしない約束に出かける気力が失せる。しかも、寝過ごした。今から準備して出かけてもぎりぎり

だ。
　さて、どうするかと思案し、とりあえずこの気持悪い寝汗を何とかしないと、そう思い浴室に飛び込む。コックを捻り熱い湯を浴びているうちに気分がすっきりしてきた。シャワーを浴びながら、どうやって断るか思案し始めた。
（ごめん。風邪引いたみたいで起き上がれないんだ。）
　それとも、
（母親から急に呼び出されて、実家へ行かないといけないんだ。）
　とか。
　すると、部屋の向こうからシャワーの水音に混じって、電話の呼び出し音が聞こえた。
（やばい。健二だ。）
　タオルで身体を拭きながら浴室を出て、携帯を手に取る。
「ごめん。健二。どうも風邪ひい・・・」
　言い終えるのを待たずして、彼が大声を上げた。
「いかんぞ。隆博。もうおまんのアパートの下まで来てるぞ。」
「えっ。」
　絶句した。バスタオルで腰を巻いたまま、部屋の窓を開けると、
「お～い。」
　バイクにまたがった健二が手を振っていた。
「何だよ。」
　声を上げると、
「おまん、今日もすっぽかすつもりだっただろ。こうやって俺が迎えにこれば行かんわけにはいくまい。」
　はあ。ため息をついた。仕方ない。行くか。
　窓をぴしゃんと力任せに閉めると、しぶしぶクローゼットからシャツを取り出した。

6話

「だからさ、断ってって言ってんだろ。」
「はああ。何？」
健二め。聞こえんふりだな。
メットを思いっきりくっつけて、大声を上げる。
「だからさ、そんな気ないんだって言ってるだろ。」
健二のバイクの後ろにまたがって、僕はまた大声を張り上げる。
キキィ。
「痛て。」
急停止したバイクの反動で、メット同士ががつんと音を立てた。
「急に停まんなよ。」
「赤だよ。」
前方の信号を彼が指差す。

「俺さあ、おまんのこと心配してんだよ。里佳子ちゃんいい子だからさ。1回ふたりでどっか行ってみろよ。きっと気に入るよ。」
里佳子ちゃん。ああ、そんな名前だったっけな。こないだのサークルの日帰り旅行。北陸へ行って魚を食べて、パターゴルフした。あの時、健二と女の子ふたりとグループになってパター場を回った。あの時、一緒だった女の子のふたりのうち、髪の毛の長い目がくりっとした活発そうな子。あの子。
「う～ん。でも。」
「でもじゃねえよ。男から断るなよ。普通。」
そうだけど。僕は健二に気づかれないように小さくため息をついた。
だってまた同じでしょ。どの子と付き合っても一緒だよ。言いたかったけど、口をつぐんだ。健二が心配してくれてるのよくわかっていたから。

あのパター場で、里佳子ちゃんが僕を気に入ってくれたらしい。健二を通じて連絡があり、今日はその里佳子ちゃんとデート。どこへ行けばいいんだか。考えるのも何だか億劫で。

健二の予定では、駅前で彼女と待ち合わせ。3人でちょっとお茶して、その後は彼女を連れてどっか行って来いってやつ。こないだから言われてたんだけど、気乗りがしなくて、ずるずるすっぽかしていたら、いい加減業を煮やした健二に無理やり拉致されて連行されているってわけ。

どうして、僕が気乗りしないのかっていうと。

「おい。何とか間に合ったぞ。」

嬉々として健二が声を上げ、駅前のロータリーにバイクを滑らせた。

駅前のロータリーの駐輪場にバイクを止めて、待ち合わせの大きな時計台の下に目を向けると、もう彼女が来ていた。僕の姿を目に留め、はにかんだように笑顔を向けた。僕もぎこちなく笑顔を返し、手を振った。確かに可愛い子だけど。

「お待たせ。こいつがぐずぐずしてるもんだから、出かけるのが遅くなってすまんね。」

健二が僕のシャツの袖を引っ張った。何がすまんねだ。濡れた髪にろくすっぽドライヤーもかけさせてもらえず、本当に風邪を引きそうだ。

「大丈夫。今来たところだから。」

彼女は、来ているニットの袖を直して、バックを肩に掛けなおした。何となく緊張している感じが伝わってきて、余計に僕も緊張しそうだ。

「そこのプレシュウズでいい？」

健二が駅前に面したガラス張りのこじんまりしたカフェを指差した。

「ええ。」

彼女が頷き、3人で店に向かって歩き出した。
「あの店、オープンテラスもあるね。いいね。外でお茶飲むのも。」
健二が愛想よく笑った。
だからさ、寒いんだって。髪の毛乾いてないから。
僕は乾いてない髪の毛が気になって、頭に手を伸ばす。彼女がそれに気づいて、
「堀江くん。こないだと何だか髪型違う？」
「ああ、変？シャワー浴びてきたもんだから。」
彼女は首を振って、小さく笑った。

あれからカフェで健二と別れて、僕は里佳子ちゃんを連れて近くのイタリアンレストランへ行った。そこでスパゲティとピザを頼み軽く食事をした後、地下鉄を乗り継ぎ、港の近くの水族館まで行った。
彼女は、僕らの学校の割と近くにあるS女子大の2年生。あのサークルにはちょくちょく来ているらしかったが、僕は本当にたまにしか参加しないから、どんな女の子がいるのがあまり知らなかった。だけど、里佳子ちゃんは僕を知っていたらしく、こないだのパターで一緒に過ごせて嬉しかったと言った。　食事をした時、真正面からじっくり彼女を見るたら、確かに可愛い子だなと思った。こないだは気がつかなかったけど、笑うと小さなえくぼが出来て、くりっとした目元が愛らしい。だけど、何故僕なんだろう。健二の方がいい男だと思うけど。
水族館で、ペンギンが飛ぶように泳ぐのが面白く、じっとその場に座り込んだようにして動かず見ている彼女の脇で、僕もじっとペンギンの姿を目で追っていた。
「今日は嬉しかった。」
目を水槽に向けたまま、彼女が言った。
「うん。」
僕はこのデートを2回すっぽかしていたから気まずく、曖昧に返

事を返した。
「堀江君ともっとゆっくり話してみたかったの。だから思い切って杉原君に頼んでみたの。」
「うん。」
僕は返す言葉がない。
「また、会ってくれる？」
黙っていると、
「駄目かな。」
彼女の声が震えていた。
「僕なんかつまんないよ。」
「そんなことないよ。」
？男から断んなよ。？
健二の怖い顔が浮かんできた。
「そうだね。今度はアシカのショー、見に来る？」
ついそう答えてしまった。
どの子と付き合っても長続きしない。どうしてなのか、理由はわかっている。
僕がその恋に執心してないと、女の子の方が先に感づいて僕の元を去っていく。大体はそのパターンだ。熱が入らない。悪いとわかっていても、その子のことを本当に好きになれない。恋人の振りはいくらでも出来るけど。

食事してドライブして、ベッドに入るだけ。
形のない愛だけを信じていたあなたは、本気で愛すること恐れてるだけ。

あれは兄貴の好きな浜田省吾の歌の歌詞だったけ。兄貴がいつも風呂場で歌っていた。
そう、僕は何に怯えているのだろう。
結局、メルアドと携帯の番号を交換した。

そのうちアシカのショーを観にいかないといけないだろう。

ちょくちょく彼女がくれるメールに返事を返す。短く返信し、送信ボタンを押した後、携帯をカウンターの下に置き、グラス磨きの続きに取り掛かる。

あれからあっというまに月日が経ち、店の奥のカレンダーに目をやると、来週の水曜日、定例のワークショップの日が間近に迫っていることに気がついた。

僕はこれで3回休んでる。何だかあれ以来水木先輩と顔を合わすことに気が進まない。あの夜のことが尾を引いていた。僕はそういう趣味はない。むろん先輩にもないだろうし。彼は酔っ払っていてそんなことは覚えていないかもしれない。でも、僕は覚えている。だからなんとなく気まずい。そんなことを考えながらグラスを磨いていると、オーナーがバックヤードから叫んだ。

「隆博。レモンがきれてた。買ってくるから店番頼むぞ。」

「オーナー。僕が行きますよ。」

「いや、いいんだ。自分の用事もあるから、ちょっといいか？」

「ええ。どうぞ、ごゆっくり。」

ここは僕のバイト先。親父の知人がここのオーナーで、ちょっとしたパブをやっている。いつも店は薄暗く、オーナーの好きなオールドジャズがいつもかかっている。客層もかなり上だな。男性客が多い。しっとりとした感じの大人のカップルとかね。親父の知人ということでかなり融通が利く。ありがたい。僕はグラスを磨いたり、掃除をしたり、客の相手、ちょっとしたおつまみを作ったり、いろいろ。

手が空くと、オーナーが好きなジャズのレコードを聞かせくれる。ベイブ・ブルーバック。ジョーン・コールドウェル。物悲しいような哀愁を漂わせるトランペットの音色。親父たちが若かりし頃良く聞いたアーティストたち。その音楽を聞いたこともない、アーティ

ストの名前すら知らなかったが、その音色は古さを感じさせない。心地よい振動が僕の脳の中に入り込んでくる。プレーヤーにかけると、所々音が飛ぶレコードをなだめるようにして、オーナーは大事そうに何度もレコードをかける。まるで自分の青春の思い出を大事に懐で温めるようにして。

僕は薄暗い店内を歩き回り、テーブルを拭き、ごみなどが落ちていないかチェックをし、冷蔵庫を覗き込んだ。氷は充分にあるし、飲み物の在庫もチェックした。どのジャズをかけるか店のＣＤラックをぐるぐる回しながら選んでいると、ドアベルの音がして店のドアが開く音がした。

オープンにはまだ少し早いしどうしようかと迷ったが、開店灯のスイッチを押し、「いらっしゃいませ」とドアの方へ声をかけた。

7話

「おう、隆博。」
（先輩・・・）
水木先輩だった。
「まだ、店開いてないか。早いかな。」
「ああ、いいんですよ。どうぞ。」
僕はカウンターを勧めた。彼が店に来たのは初めてだし、むろん僕がバイトしてるなんて知らないはずだ。
「あの。何飲みます？」
メニューをさしだすと、
「トムコリンズ。」
（えーと、ジンベースだったけ？）
変わった物を注文されて一瞬躊躇した。
「ジンだよ。」
僕の考えていることを見透かすように先輩が言った。
「メニューにないな。だめか？」
メニューにトムコリンズが載っていないことを彼は指摘した。
「いや、いいですよ。作りますよ。」
うろ覚えだが、シェーカーに材料を入れ始めると、
「お前、けっこうしゃれたところでバイトしてんな。」
彼が話し始めた。
「で、先輩どうしたんですか？僕がここでバイトしてること知ってたんですか？」
「いや、健二に聞いた。」
（なるほど、で、何の用事？）
「お前さあ、なんでワークショップ、最近来ないの？」
（ああ、そのことか。まさかあなたに顔を合わしにくいからなんて、言えないよな。）

僕はシェーカーを振りながら
「最近、ずっと忙しかったんです。」
言葉を濁した。
「そうか。」
「でも、勉強だからな、来た方がいいぞ。」
「ええ、わかっています。」
僕はなんとなく先輩の顔を見るのが気恥ずかしく、カウンターの中でいろんな雑用をしながら、彼と言葉を交わした。
先輩はそれからグラスを2、3杯おかわりして、たわいもない話をして出ていった。
そして、次のワークショップの課題を置いていった。
僕は目を通して、はっとした。

『レイモンド・カーヴァーもしくはリチャード・アダムスの著書の一節』
組み合わせは先輩とだった。課題に沿う文献を選んで、規定のページ数だけ訳しお互い交換する。それに目を通し、お互いの訳にたいしてのうんちくを述べる。
さて、はっとしたのは『リチャード・アダムス』という作家の名前だ。僕の原点。
「…芙美。」
その名前をつぶやくと、胸が苦しくなる。せつなくて、今でも心を離れない。
芙美は高校の同級生。英語が好きな女の子で、いつも原書でいろんな本を読んでいた。僕も英語が好きな科目で、読書も好きだった。だから、芙美が図書館でいつも本を読んでいるのを見ていた。何とはなしに声をかけてみたのがきっかけで、僕らは図書館で会うといろんな話をした。読んだ本についてとか、クラスのことや、学校の行事や先生のことや。そして、この本は良かったとか、あの作家のこんな本を読んでみたらって、勧めあったり・・・。

リチャード・アダムスは彼女の好きな作家のひとりだった。彼女が僕に残してくれた本。リチャード・アダムスの「ウォーターシップダウンのうさぎたち」。原書だった。僕は芙美が残してくれた本が読みたくて一生懸命勉強した。その上・下巻の本を辞書をめくり、わからない所は先生に聞いたりして、読み終わったのには3ヶ月がかかった。それほど僕は英語が好きなくせに全くだめだったんだ。

芙美のことを思い返していると、オーナーが帰ってきた。

「大丈夫だった？店？」

「ええ、とりたてて何もなく。」

「客は？」

「ひとりです。」

先輩のことだ。

「でも、隆博はある程度カクテルも作れるし、客あしらいもうまい。俺が留守にしていても大丈夫だから、安心だ。」

「それほどでもないですよ。」

そう言って、トムコリンズを注文されてレシピに迷ったことを話した。オーナーは、ああ、メニューにないからなあと言って、どこかにレシピ集があったと探してくれた。そして2人でそれを見ながらカクテルを作る練習をしていたら、客がどんどん入ってきたので中断した。

その2、3日後に僕はT市にある洋書の専門店に向かった。目的はワークショップの課題を探すためだ。地下鉄に乗り、その専門店がある駅に降りると、そのホームで見覚えのある女性を見かけた。

（あ、おばさん。）

芙美の母親だった。細面の優しい雰囲気の女性だ。あまり変わっていない。向こうも気がついたらしく、

「隆博くん。」

と、声をかけてきた。

「おばさん、ひさしぶりです。」
頭を下げると、
「ちょっと見ない間に大人びたわね。」
彼女は笑顔を見せた。
おばさんはこの駅の近くにあるデパートに買い物に来たらしい。
僕が学校の勉強で使う洋書を探しに来たのだと言うと、勉強熱心なのね、と褒めてくれた。そして、少し立ち話をした後別れ際に、たまには芙美に会いに来てやってね、と言って人混みの中に消えていった。

ああ、そうなんだ。何年だろう。あれから何年経ったんだろう。最後に芙美に会いに行ったのはいつだったんだろう。僕はいてもたってもいられず、芙美に会いに行こうと思った。
今からでも。すぐに。
そう思ったけど、思っただけだった。僕は駅のホームのベンチに座ったまま、じっと電車が行き交うのを見ていた。見ていただけだった。心とは裏腹に体が動かなかった。
まだ、芙美に会えない。僕は自分の気持ちをまだ整理していなかった。

僕はリチャード・アダムスの短編を何冊か買って家に帰り、読み始めた。洋書を読んだのはこの人のが初めてだ。そして、何故かそれがきっかけで僕は翻訳の仕事がしたいと思い始めた。その言葉の裏にあるものが知りたい。訳し方によっていろんな解釈がある。読み手にどんなふうに原作者の思いが伝えられるだろう。僕の中で言葉は魔法だ。言霊という言葉がある。言葉には魂がある。どんな思いをどんな言葉にしたら、真実のことが伝えられるだろう。僕が今思っていること。言葉にしたら壊れそうだ。でも、僕は自分の心の中で何度も、何度も復唱する。その言葉を。それは誰にも知られたくない。

8話

それから、店に何度か先輩が来た。むろん、ワークショップの課題の交換のこともあったし、彼は店の雰囲気が気に入ったらしい。僕が店にいるか携帯へ電話がかかってくる。僕が店にいると、彼はやってきた。友人が来ることはあまりなかった。なんでって？ここは大人の店だ。『４丁目』へ足しげく通っているようなやつらがくるような店ではない。じゃあ、先輩も大人かっていうと、どうかな？と、最近は思うことがある。僕の中ではかなり大人っぽい人だと思っていたけど、店へやって来ていろんな話をするうちに意外と子供っぽいところがある人だということに気がついた。年よりも大人っぽく見えるくせに、意外と意固地だったり、子供のように愚痴を言ったりする。まあ、お酒が入っているからね。そんなもんかも。

先輩はあの夜のことなんて忘れたかのように、僕を避けていたような時期があったのも嘘のように、先輩面をして僕を小突きまわし、冗談を言った。僕も何だかそんなことを意識していたのが変だったなと思うようになり、先輩が店に来る日を楽しみにした。僕らは時々店が引けた後、ラーメンを食べに行ったり、居酒屋に飲みなおしに行ったりした。

そんな日が数ヶ月続いていた。あっという間に季節は過ぎ冬になった。最近はちらほら雪が舞う日もあった。里佳子ちゃんからはちょくちょく連絡が入る。僕らは駅前で待ち合わせして、映画を観たり、夕食を一緒にしたりしていた。だけど、まだアシカのショーは観にいっていない。

今日は金曜日。バイトの日。

「寒いですね。」

「おう、もう冬だな。」

オーナーはグラスを磨きながらつぶやいた。

窓の外には、またちらほらと、雪が降り始めた。店は週末にしては人が少なく、暇だから早めに閉めようかとオーナーが言った。
「隆博。最近、彼氏来ないね。」
「彼氏？」
「悟くん。」
「そうですね。忙しいんでしょ。」
「ふーん。春に卒業なんだろ。」
そういえば、確かにここ最近、ずっと先輩は店に顔を出さなかった。どうしてかなとは思ってはいたが、わざわざ連絡するまでもないしと思い、でも内心すごく気になっていた。学部内でも最近は顔を見ない。客が入ってくるたびに彼ではないかと、気になってドアの方ばかり見ていた。
（ばかみたいだな。）
ふっとおかしくなった。
（女の子みたいだ。）
女の子が好きな人を待っているみたいだと、思った。駅前に行くと必ず先に来て、僕を待っている里佳子ちゃんのことを思った。
（好きな人？）
まあ、確かに好きな先輩ではあるが・・・

店がひけてから帰り道。やっぱり気になりだすと気になって仕様がない。電話をかけてみようと携帯を取り出した。夜１１時を過ぎていたから、まずいかなと思いながらダイヤルしてみる。
（寒いな。）
フリースのファスナーを首のところまで引き上げる。そんなに寒くはないとたかをくくって、シャツの上に薄いフリースを一枚着てきただけだから、帰り道はさすがに寒かった。僕は駅まで続く道沿いにあるコンビニで、暖かい缶コーヒーを買って、それで手を温めながらコール音を聞いていた。
（出ないな。）

7回コール音を聞いて切ろうとしたら
「もしもし」
彼が出た。
「隆博？」
「夜分、遅くすみません。」
僕は遅い時間に電話をしたことを詫びた。
「いや、いいんだよ。」
何となく元気がないようだ。
最近顔を見ないのでどうしたのかと聞くと、ちょっといろいろあってと答えたがそれ以上詳しいことは話してくれなかった。あまり話していてもいけないのかなという雰囲気だったので、切ろうとすると、どこにいるんだと彼が問うた。バイトの帰りでこれから地下鉄の駅へ向かうところだと言うと、雪が降っているなと彼が言った。僕がええ、と答えると、ちょっと間をおいて彼が囁いた。
「気をつけて帰れよ。」
その声があまりに優しくて、まるで恋人に語りかけるように、甘い声で、僕はとても切ない気持ちになった。ちらほら舞っていた雪が大きなボタン雪に変わって、ポコポコと音をたてるように降りだした。そして、その雪を見つめていると、その景色がしだいにじんわりとにじんできた。
「また、電話するわ。」
そう言って電話が切れた。僕の目に涙がにじんでいた。何故だろう。彼に会いたかった。今日はもう終わるけど。明日になったら。それとも明後日になったら。
自分の思いもよらない変な感情に戸惑いながら、切れた携帯を手にじっと雪を眺めた。大きな粒となって落ちてくる雪を見ていたら、ふいにあの時の情景が記憶に浮かんだ。
白い雪が白い花びらと重なって見えた。触れてしまえば溶けて消えるかのような薄い乳白色の桜の花びら。手にした花びらを口元に

寄せて、ふっと息を吐き、風に乗って舞う花びらが落ちる様を目にして、扶美は言った。
「美しいって儚いっていうことなのね。」
僕は黙って桜の木を見上げた。そうしている間も、休むことなく風に桜の花は舞い、地面に落ちた。
「悲しいの？」
そう彼女に問うと、
「そう、悲しいのかな。寂しいのかな。変な気持。どうして美しいものはその美しさを永遠にとどめておくことが出来ないのかな。」
「扶美は女の子だな。ロマンチストだ。」
「隆博君は何か感じない？」
風に舞う桜の花を見て、何も感じないのかと彼女は聞いた。少し口を尖らせてね。その表情が可愛くて、僕は桜より扶美の表情に気を取られていた。
「桜が散ってしまうのは悲しいけど、でも来年又咲くよ。儚いって扶美が言うのはわかるけど、でも自然のものは回りまわってまた目にすることが出来るよ。」
「だから消えてなくなってしまうわけじゃない。扶美はこの一瞬、一瞬の美しさを儚い、儚いからこそ美しく、心に残るっていうことが言いたいのかな。」
扶美は笑みを浮かべて、
「隆博君にみんな私が思ったこと言われちゃった。」
とおどけてみせた。

?扶美！?
僕はその場にうずくまった。胸に熱いものが押し寄せて立っていられなかった。血が逆流するように胸の鼓動が早くなり、目じりに涙が浮かんだ。
記憶の中で扶美が笑っていた。あの時と同じ、あの頃のまま。
雪が肩に落ちてじんわりと服を濡らした。髪に手に雪が落ちる冷

たさを感じながらも、僕はその場から立ち上がれなかった。悲しくて、そして愛おしくて。帰らない時間を思って。

（美しいということは、儚いということ。）

彼が言った言葉。扶美が言った言葉。僕の中で決して忘れえぬ特別な言葉。

雪の中で扶美が笑っていた。雪の粒が薄い花びらに変わった。そして先輩が優しく僕の耳元で囁いていた。恋人のように。

9話

「隆博。お前最近元気ないな。」
「そんなことないよ。」
「おー？里佳子ちゃんと喧嘩でもしたんか？」
「してないよ。だまれよ。講義中だぞ。」
４時限目の授業に出ていると、後ろの席に健二が来て僕の背中をペンで小突いた。
「なー？俺んらとも最近つき合い悪いなあ。」
「うるさいぞ。」
僕が少し声を荒げたせいか、前の席にいた2、３人の生徒が振り返った。慌てて頭を下げる。
「あとにしよ。昼飯おごるわ。」
「やった。」
講義が終わった後、健二と連れ立って学食に向かった。
「や、あれから里佳子ちゃんとうまくいってるのか気になってな。」
歩きながら健二が話しだした。
「まめに連絡くれるよ。メールとか。」
「あの子からか？」
「そう。」
「おまんからもデートとかちゃんと誘っとるのか」
健二が責めるように言った。
「時々会ってるよ。今夜も食事する約束だし。」
「そうか。」
少しほっとしたような表情をこちらに向けて、健二が笑った。
わかってる。健二が気にかけてくれてること。心配してること。
健二とは高校生からの付き合いだ。クラスで後ろの席にあいつが来たのがきっかけで仲良くなった。いつも居眠りしてるやつだった。

それでも不思議と授業の内容は頭に入っているみたいで、試験ではそこそこちゃんと点を取っていた。あいつが背の高い僕の背中を隠れ蓑にして、いつも居眠りしてるのを知ってた。あいつは？いつもすまんな。おまんの後ろでラッキーだよ。？って頭をかいてた。
どちらかというと淡白で奥手な僕の女関係を心配してくれてるのは、長い付き合いだから、彼の面倒見の良い性格のせいか、いや、でも本当はもっと違う理由で僕のことを心配してるのだとわかっていた。お互いそのことを口にすることはないけど。

「それで多少付き合いは進展したんか。もうやったか。」
「あほか。」
僕はちょっとむっとした。これ以上彼女の話題を振られると困る。だって、進展も何も健二に報告することなんて何もないんだし。
すると、行く途中でばったり裕樹にも会った。胸を撫で下ろした。
「お、お前ラッキーだぞ。隆博が飯おごってくれるって。」
健二がそう言って、裕樹まで昼飯に誘ったので、
「あほか。裕樹の分までなんか知らんぞ。」
反論した。
「なんよ。今日は隆博のおごりなんか。」
にこにこと裕樹までおごってもらうつもりで後ろをついて来る。
「あほ、自分で払えよ。」
とは言ったが、結局面倒くさくなって3枚まとめて食券を買った。
カウンター越しに
「おばちゃん、大盛り、大盛り！」
「お姉さんといいな。誰がおばちゃんや。」
健二が食堂のおばちゃんと軽口をたたいているのを見て、（あいつはいつも気楽そうで、いいなあ。）などと、思ってしまった。
テーブルに3人で座り、僕のおごりのカツ定食を食べ始めると、あっという間に食べてしまった健二が
「俺、ラーメンも食べるわ。」

勢いよく、食券を買いに席を立った。
「相変わらず、あの食欲には負けるわ。」
裕樹も呆れ顔だ。
「しかし、だいぶ顔見なんだな。」
「うん、授業は出てたんだけどな。」
「忙しいか。」
「バイトが結構入ってて。」
「そうか。」
そこへラーメンをトレイに乗せた健二が戻ってきて、
「ほうよ、俺が誘っても合コンにも来んわ。つまらん男よ。」
「悪かったね。俺が行かんほうが、お前んらに女の子が回ってくる率が高くなるだろう。」
そう言うと、
「まあ、野郎は少なくて女の子の数が多いのはいいけどな。」
裕樹も笑った。

それで僕らは、食堂に備え付けてある自動お茶汲み機の生温くて薄い煎茶を啜りながら、たわいもない話をしていた。そうすると思い出したように裕樹が
「そういえば水木先輩んとこ。大変だったらしいぞ。」
戸惑った僕の表情を見て、裕樹が続けた。
「ああ、お前知らなんだか。彼女、流産しかかったらしくて。」
「そうなんだ。それで？」
「うん、ずっと入院していたんだけど、持ち直したらしくて今は実家に帰って安静にしているらしい。」
「そりゃ、大変だ。」
「ずっと、付き添って病院に行ったり、いろいろで大変だったみたいだけど、だいぶ落ち着いたらしいな。」
聞くと、先輩が店にぱったり顔を出さなくなった辺からの話で、僕は合点した。

（そうか。別に言ってくれればいいのに。）
水臭いなと思った。結構行き来してたのに。そういうことは話さないんだから。
こないだ電話した時にでも言ってくれればよいのにと思った。
「さてと、次の講義が始まるからそろそろ行こうか。」
裕樹がトレイに食べた食器やら灰皿を乗せ始めた。僕も席を立とうとすると、メールの着信音がなった。
（里佳子ちゃんか。）
携帯を見るとやはり彼女からだった。
『今日大丈夫？６時に時計台のところで待ってるね。』確認メールだ。
『大丈夫だよ。後でね。』すばやく返事をし、携帯のフラップを閉じる。

それで僕は夕方までの授業をこなし、約束の時間に駅にすっ飛んでいった。
ぎりぎりだ。いつも彼女は先に来て待っている。だからこそ少しでも遅れることが気がかりだ。腕時計に目をやると６時ジャスト。遅れなくて良かった。
時計台の下で待っている彼女を目に留め、手を振る。薄いベージュのニットポンチョにスキニーのデニムに黒いブーツを履いた彼女が同じように手を振る。スポーツが好きな彼女は、毎週プールに通っている。そのせいか、程よく筋肉質で長くて形の良い足をしている。綺麗な子だ。
駅前から東南に伸びた繁華街を僕らは並んで歩く。僕の左側を歩く彼女の手が手持ち無沙汰のようにポンチョの裾から出ている。
手を繋ぐべきかな。ふと思う。
だけど、僕はコートのポケットから手を出すことをしなかった。
「ここのデミグラソース絶品ね。」

美味しそうに口を動かす彼女に、
「どのハンバーグもうまいね。」
僕も返す。
彼女とこの店に来るのは2回目だ。クリームコロッケやハンバーグが美味い可愛らしい洋食店はいつもカップルや女の子のグループで一杯だ。
「パンのお代わりはいかがですか？」
店員が籠に焼きたてのパンを持ってテーブルを回っている。
「パンも美味しいからたくさん食べたいんだけど、もう私このハンバーグでお腹一杯だわ。」
「食べれるよ。僕はお代わりしよう。里佳子ちゃんももう少し食べたら。何とかは別腹って言うじゃん。」
「それを言うなら、甘いものは別腹でしょ。」
「デザートもどうぞ。」
僕はおどけて笑った。
彼女と会うのはこれで何回目だろう。数えるくらいしかまだ会っていないけど、僕らは昔からの友達のように気安くいろんな話をした。確かに彼女といるのは楽しいと思った。明るく気さくな子だ。変な気を使わなくてもいい。でも、恋人として付き合っているのかどうなのか、僕の気持の中ではまだはっきりしていなかった。
お互いの学校の話、友達や遊びの話、いろんな話をしてるうちに時間が過ぎた。ころあいを見て店を出、賑わう繁華街の町並みを見ながら僕らは歩いた。
「どうしようか。」
これからの行動を問うと、
「そうね。」
ポンチョの袖から手を出し、彼女は僕の手に触れた。反射的にそっとその手を握ると、もう戻れないような気がした。
「もう少し隆博君といたいな。」
そう甘えたように彼女はつぶやいた。

１０話

？おまん、まだやってないんか。？
昼間の健二の声が蘇った。
僕は頭の中で、財布の中の札の数を数え、３つ先の駅近くのホテル街の地理を頭に思い浮かべた。
可愛いし、いい子だし、僕のことを好いてくれてるし。理由は揃っている。だけど、何故か踏み出せない。今、抱いていいのか。この子とそういう関係になっていいのか、僕は戸惑っている。何に。又同じことの繰り返しになるんじゃないのか。僕も彼女も擦り切れた雑巾のように疲れ果ててしまう。今までのように。
立ち止まって彼女が僕を見た。その目は恋している目だ。少し潤んだように見える。
その瞳をじっと見る。
あ、決めなきゃ。
その時、ふいに携帯の着信音が聞こえた。
「あれ、私？」
バッグの中をかき回すようにして携帯を探す彼女に、
「ごめん、ごめん。僕だよ。」
コートの内ポケットから携帯を取り出して見せた。
ちょっと、ごめん。そう言って液晶画面に視線を落とすと、
（あ、先輩。）
先輩だ。慌てて着信ボタンを押す、
「ごめん、今いいか？」
彼が電話するわ、と言ってから１０日ほど経っていた。
少し先で待っていてくれている里佳子ちゃんを目の端で見て、
「あ、ええ。」
そう返すと、
「すまんな。電話するわって言ってからだいぶ経ってしまって。」

「いや、いいんです。それより大変だったらしいですね。」
乃理子さんのことをほのめかすと、
「事情を話せばよかったんだけど、まあ、こんなこと言うのもなんかなと思って。」
「プライベートなことですからね。」
とは言ったもんのの、水臭いなあと思う気持ちは払拭できなかった。
「それより、今から会わんか？」
急に誘われて僕はとまどい、時計と里佳子ちゃんの顔を交互に見た。すまないと思う気持と共にどこかほっとした思いが過ぎった。
ごめん。里佳子ちゃん。まだ無理かも。

彼女はさすがにちょっとむっとしていた。無理もない。
？とにかく断れない怖～い先輩なんだ。どうしても行かないと行けなくて。断ると後でどうなるかわかんないし。？
僕は先輩の誘いにかこつけて、デートを中断した。申し訳ないので彼女を家までちゃんと送り届け、それから慌てて先輩との待ち合わせの店にすっ飛んで行った。
彼が指定した炉辺焼きの店に着くと、すでにカウンターで先輩は一杯やり始めていた。
「おまたせしました。」
彼の隣に腰を下ろすと、
「急で悪かったな。」
「デート中だったか？」
「どうしてわかるんです？」
「別に。当てずっぽうだ。」
「邪魔したかな？」
「いいんです。ちょうど送っていったところでしたから。」
本当は違うんだけど。
「いいなあ。デートかあ。」

彼がうらやましそうな顔をするので、
「先輩たちも行けばいいじゃないですか？」
「うん、でも、これだからな。」
お腹が出ていることを手振りで示した。
「当分は大変ですよね。」

彼女の具合を尋ねると、食事の支度をしている時に、床が濡れていたことに気づかず転んでしまったことが原因で流産しかかり、でも、処置が早かったのでなんとか持ちこたえたこと。今は実家に帰って療養していることなど話してくれた。
「だいぶ、店に来なかったから、どうしたのかと心配していたんです。マスターも最近、来ないねって。別にそうならこないだ言ってくれればよかったのに。」
「うん、まあ、なんか気恥ずかしいんだよな。そういう家の事情みたいなこと話すの。俺ってすごい所帯じみてる感じがするんだよな。最近。」
「まあ、もう所帯持ちですからねえ。でも、奥さんよかったですね。」
話してても、もうすぐに彼が子持ちになることなんて実感として沸くわけがない。目の前にいるのは、まだ２つしか違わない大学生だもん。
「そうなんだけど。ああ、羽伸ばしたいなあ。」
子供じみたことを言う。
「旅行とか？」
以前、当てもなくふらふらと旅をするのが好きだという話を聞いた。
「いいね。いろんなとこへ行ったな。」
過去の旅を思い出すようにして、
「地図を見るのが好きなんだ。日本地図広げてさ。自分が行った所に赤丸をつける。丸が一杯になるとなんだか嬉しくて。今度はどこ

へ行こうかってわくわくするんだ。」
嬉しそうに話すので、おかしくて小さく笑うと、
「子供っぽいなあと思ってんだろ？」
肩をこづかれる。
「わかりました？だって、こういう話をしてる時の先輩って、僕より年下なのかと思ってしまう。」
面倒見がよく大人っぽく見える彼が、こういう子供っぽいところを持っていて、それを見てるのが何だか楽しい。誰にでもこういう側面を見せるのだろうか？それとも？

「お代わりはどうだい？」
カウンター越しに大将が声をかけた。
「じゃあ、もう一杯。同じのを。」
先輩は焼酎のお湯わりをオーダーする。
「隆博も飲めば？」
そう言って、ウーロン茶をすすっている僕に勧めるので
「僕が飲めないの知ってるでしょ。」
「でも、少しくらい飲めるって聞いたぞ。」
「ワインなら少しくらい。」
「大将、ワインあるか？」
そうすると、大将はおかしそうに
「こんな店にそんなしゃれたもん、置いてあるかっ。」
そりゃそうだ。炉辺焼屋にそんなもん置いてあるはずがない。先輩が肩をすくめるので、
「いいですよ。どうせ先輩を送ってかなきゃいけないだろうし。飲むと頭が痛くなるし。」
「面目ないね。こないだみたいに迷惑かけん程度に飲むわ。」
彼が苦笑した。
「しかしな、人生飲めたほうが楽しいぞ。少し練習したらどうだ。」
「そんなもんですかね。」

「隆博はいつもクールだなあ。」
「クールですか？」
「そうだよ。いつもすましててそつがなくて。今まで大きな失敗も挫折もしたことないって顔してるよ。可愛げないヤツだよ。」
もちろん、目は笑っている。批判してるわけじゃないのはわかってる。この人はいつもこんな調子で口が悪いのだ。

「じゃあ、飲んでみようかな。」
「お、それはいい。焼酎を薄くしてお湯かウーロン茶で割ろう。焼酎はあとが残らないから、頭が痛くならないかも知れんぞ。」
そう彼が言うので、大将が
「そうこなくっちゃ。俺も飲み屋でウーロン茶ばっか飲まれると気が滅入るからな。」
早速焼酎のウーロン茶わりを作ってくれた。少し飲んでみると、アルコールの匂いがした、が、さっぱりしてるので飲みやすい。
「どうだ。」
「飲みやすいですね。これならいけるかも。」
「初めて？」
「ええ。」
「まあ、心配するな。酔っ払ったら俺が送ってやるから。」
すでにアルコールが回って潤んだ目をして彼が言った。
「その方が心配ですよ。そんなに飲んで。」
並んだ空のグラスを指差した。
「ああ、違いないな。」

11話

先輩は酔ってきたせいもあるか元気になってきた。
彼はそれからいろんな旅について話をした。バイクをフェリーに積んで北海道へ渡ったこと。函館から北上して、洞爺湖、登別、札幌を経由して富良野のラベンダー畑、見渡す限りの大地に波打つ丘が伸びやかに広がる美瑛。旭川そして稚内、最北端、サハリンの島影が望める宗谷岬まで。それから、伊豆半島。ヒッチハイクをして伊東、熱川から南下して下田へ。海辺から一転して、中伊豆の山の中を河津七滝から天城峠を越えて土肥へ抜ける。恋人岬、堂ヶ島を経由して下田へ戻るコース。
途中、お金がなくてお寺の境内の軒下にもぐって寝ていたら、朝になっていて、行き倒れかと人だかりが出来ていて恥ずかしかったこと。
富山・雨晴海岸海に浮かぶ立山連峰が見たくて、海岸でテントを張って立山連峰が見えるまでねばったこと。沖縄。浅瀬でおこぜに射されて病院に運ばれたこと。カヌーで矢久島を回ったこと。
楽しそうに話をする彼を見ていて、僕は思ったんだ。この人は若いせいもあるけど、一ヶ所で落ち着いて生活をするようなタイプの人ではないんだろうな。いろんな所へ行って、いろんな経験をして。狩猟民族のような。その土地に根付いて土地を耕し、子孫を増やしていくような農耕民族ではないんだろうな。
僕はどっちだろう。たぶん、農耕民族ではない。獲物を狩り積極的に生きていく狩猟民族タイプでもない。遊牧民族かなあ。雲と共にあちこちへ流れていくような。
と、ぼんやり考えていると、
「お前もいろんなとこ、行っとけよ。自由が利くうちにな。」
寂しそうに彼が言うので、
「人生終わったような顔しないでくださいよ。落ち着いた生活は生

活で、幸せな部分もあると思いますよ。」
精一杯慰めてみた。彼は首を傾げて考えこんだので、つい言ってしまった。
「…後悔してるんですか？」

すると彼は、ふっとカウンターの端に目を背けて、
「…こんなこと言うと、女々しいんだが…いまだに気持ちの整理がつかんのだ。お前が望んでるみたいに、翻訳で食べていけるようにもっと勉強もしたかったし、自分が決めた道へ進みたかった。でも、今は嫁さんと、産まれて来る子供を食べさせていくことが先決だ。だからT社に入社した。安定している企業だし、給料もいい。でも、自分がやりたかったこととは違う。どこまで自分が出来るか、理想を追い求めたかったんだ。ばかみたいだろ。自分で蒔いた種なんだ。でも潔くないんだな。本当は違う人生があったのかなあなんて、あれこれ考えてしまうんだ。こないだ嫁さんが流産しかかった時も、俺はおろおろするだけで、どうしていいかわからなかったんだ。向こうの母親とか来て、てきぱき入院の手続きをして、身の回りの物を持って来て。俺は動転していて、あいつの母親に言われることをするだけで。こんなんで父親になれるんかなあって、自信なくなってきたんだ。だからお前に会えなかった。落ち込んでたからね。こんな俺を見られたくなかったんだ。」
そう言った後、
「でも、会ってこんな愚痴を聞かせているんじゃ話にならないよな。」
がっくりきている彼が急に弱々しく見えた。
「いろんなことが急にありすぎたんですよ。誰だって戸惑います。急に人生の方向先を変えられたみたいに思って。僕だって、今、彼女が妊娠したらどうするかわかんないですよ。」
「避妊は？」
「もちろん、していますよ。」

とは言ったものの、セックスどころかまだキスすらしてない相手だけど。里佳子ちゃんは。
「だよな。俺が悪いんだ。気をつけていたつもりだったんだけど。つもりじゃいかんよな。本当に人を好きになるっていうのがよくわからないんだ。いろんな女の子とつきあった。たぶん、お前も耳に入っているかもしれんが、複数の女の子とつきあっていた。乃理子はそのうちのひとりだ。でも、俺を一度も責めん。一度も責めたことがない。自分以外の女と同時につき合っていたことを気づいても。いつも控えめで、しっかりしていて優しい。子供が出来たって聞いてうろたえたけど、男として責任を取るのが当たり前だって思って。それで幸せだと思った。あいつは可愛い。だけど、今更になって本当は自信がない。あいつを本当に愛してるのかわからない。ちゃんとやっていけるのが、自信がないんだ。」

この人でもこんな怯えたような自信のない表情をするんだ。それよりも何故僕にこんな弱い所を見せるんだ。
「僕はまだ人生なんてわかっていないし、子供だし。うまいこと言えないけど、先輩がしんどいなあと思ってることを僕に話すことで、少しでもそのしんどさを和らげたり、悩みが解決出来そうになったりするなら、僕はいつでも聞きたいと思います。そのくらいしか言えないけど。」
「でも、自分で蒔いた種だから、自分の問題は自分自身で解決するしかないんだ。わかってる。」
「何かの小説に書いてありました。自分で解決出来ないなら我慢するしかないって。」
「うん。でも我慢する人生はつらいな。」
「そうですよね。」
「今までいろんな悩みや問題があったけど、解決できる方法はあるって信じていた。し、そして解決してきた。大概のことは。でも、解決の方法が無い問題っていうのがあるんかなと、最近は思うよ。」

「先輩にしては弱気ですね。でも、今はそう思っても、例えば時間が経ったり、周りの状況が変わったり、自分の気持ちの持ち方が変わったりとか変化があると、その問題に対しても何か変化があるんじゃないかなあ。そして、ある日当然ふっと解決の糸口が発見出来たりとか。」
「やっぱ、お前クールだわ。」
「えっ。何で。」
「だって客観的で理論的、冷静だもん。」
「僕だって取り乱す時くらいありますよ。たぶん、自分のことでないから客観的に見てるだけですよ。僕もあなたの立場だったら、悩むかも。」
「そうかなあ。」
「ま、元気出してくださいよ。」
彼を元気付けるようにわざと大きな声で、大将にお代わりをオーダーした。
「すまんなあ。後輩のお前にこんな愚痴言ってさ。」
「別に。僕でよかったら、何時でも。」
そして、思い切って言ってみた。
「僕、嬉しいですよ。そういう心の内を話してくれるの。信用されてるのかなって。」
本音だった。彼が心の内を話してくれることが素直に嬉しいと思った。
すると、彼はちょっと恥ずかしそうに
「何だかなあ。よくわからんがお前には素直にいろんなことを話せるような気がするんだ。」

それから僕たちはいろんな話しをしながら、かなり飲んだ。焼酎は飲みやすくてこれならいくらでも飲めそうな気がした。頭も痛くならないし、気分も悪くならなかった。先輩もかなり飲んでいた。元々飲める人なので、どのくらい飲んでも大丈夫なのかわからなか

った。彼も自分の限界がまだ先だと思って、次々にお代わりをした。そうこうするうちに時計の針も１２時を回ったし、それに、僕よりも彼の方がかなり泥酔してたので、自分がしっかりしているうちに送って行こうと思い店を後にした。

店を出ると、又雪がちらほらしてきたので、電車で帰るのは止めることにした。

本当のことを言うと僕もこんなに飲んだのは初めてで、足元がふらついているのが自分でわかっていたから。無論、先輩は僕より酔っていた。お前に迷惑かけん程度に飲むとは言ったくせに、結局この間送っていった時より酔っているように見えた。

仕方ない。先輩に肩を貸しながらタクシーを拾い、彼のアパートの場所を告げた。

タクシーに乗り込むと、

「隆博。俺のとこでもうちょっと飲み直さないか？」

呂律の回らない声で言うので、

「まだ飲むんですか？」

僕も途切れ途切れに意識が飛ぶのを意識していたので、これ以上飲んだらまずいなと思っていた。

「いいじゃないか。乃理子は実家へ帰っているし、誰も居ないから。」

座席に身を沈めながら、拗ねた子供のような口調で、僕の顔色を伺う彼。

「しょうがないですね。」

それで、僕は彼のアパートでタクシーを一緒に降り、少し休んだら帰るつもりで部屋へあがった。

12話

彼の部屋はこぢんまりと片付いていて、ベージュを基本にしたインテリアでまとめてあった。部屋の隅の方に彼女が使っているらしいちょっとしたドレッサーがあって、ああ、女性と一緒に住んでいるんだなあと、実感した。

「いい部屋ですね。きちんと片付いてるし。」

「そうか。」

「ひとりでは広いでしょ。」

「そうだなあ、2人で住んでも大丈夫なくらいだよな。」

聞いた話では彼の父親はある商社の重役で、その会社の名前は聞けば皆が知っているような有名な会社だ。家も裕福らしい。彼の父親が借りたのだろう。いいとこの坊ちゃんだな、と思っていると、

「まあ、どのみち春までだけどな。就職したら引っ越す。又住む家を探さないと。」

「東京でしたよね。」

「うん。」

そうなんだ。春になったら東京へ行ってしまうんだ。もうあと僅かか。この人と会えるのも。ちょっとしんみりした気分になったけど、そんなこと考えても仕方ない。

気を取り直して、僕らはソファの上にあぐらをかき、冷蔵庫から取り出したビールを飲んだ。しゃべりながらも時折ふっと、意識が飛ぶ。眠くて意識が朦朧とする。自分が何をしゃべっているのかよくわからない。彼の声がずっと遠くで聞こえるような気がする。

これはまずいな。

帰れなくなると思い、

「もうそろそろ帰ります。」

ソファから立ち上がった。

「泊まっていけば？」

「いえ、まだタクシーも拾えるだろうし。」
そう答えたが、自分の声が水の底から発せられた音のようにくぐもって聞こえた。同時に部屋の隅にあるダウンライトの仄暗い明かりが揺らめいて、形を失くした。

自分の近くに誰かの寝息を感じた。
（誰だろう？）
薄っすらと目を開けて周りを見ると、見覚えのないベージュがかかったようなモスグリーンの色が目に入った。それが彼の家のソファの色だとわかるまでに、少しの間が必要だった。
（あ、そうか。寝ちゃったんだ。）
ふたりでいい気になって浴びるように酒を飲んだ。酔っ払ってしまい、気づかないうちにふたりして眠り込んでしまったらしい。
頭を起すと、ジーッと耳鳴りがしたが、それでもソファの上に起き上がると、だんだん意識がはっきりしてきた。
居間のライトは全部消してあり、小さな足元のダウンライトがひとつだけポツンと点いていた。隣接する対面式のダイニングキッチンの明かりは点いていたから、その明かりで先輩の姿を確認することが出来た。ソファの下の床でうつ伏せになって眠っている。横向きに顔をこちらに向けて。

彼の側に行き、声をかけてみる。
「先輩。」
返事がない。
何とはなしに、彼の顔に目を向けてみる。薄暗い明かりの中で、長く伸ばした前髪が崩れて目の上にかかっているのが見えた。彫の深いはっきりとした目鼻立ち。薄い唇。ふと、綺麗な人だなどと思ってしまう。そう、彫刻みたいだ。こうやって動かずにいると。
だけど、じっと彼の顔を見ていても仕方ない。ソファの上に置いてあった毛布を彼の肩に掛けた。どこかでタクシーでも捕まえて帰

るか。
彼の耳元に口を寄せて、
「先輩。僕帰りますね。玄関の鍵、かけて。」
「うん。」
返事が聞こえた。なんだ、起きているのか。大丈夫だな。
そう思い、彼の側から立ち上がろうとしたら、ふいに床についていた手首を握られた。
「隆博。」
眠ったまま、いや、目を閉じたまま、左手で僕の右手首を掴み僕の名前を呼んだ。
「ごめん、このまま聞いてくれ。」
（何だろう。）
握られた手首が熱かった。彼の手の体温だ。
先輩の声はもう酔ってなんかいなかった。

「好きなんだ。」
僕は耳を疑った。
今、何て？
彼は僕の手首を掴んだまま、目を開けずにもう一度繰り返した。
「お前のことが好きなんだ。」
咄嗟にその言葉の持つ意味がわからず、彼が寝転んでいるカーペットの幾何学模様を凝視した。息もせず。
「あの時、乃理子と間違えたんじゃない。お前だとわかっていた。」
その言葉で瞬時に僕はすべてを理解した。
「まさか、だって。」
僕の声に反応するかのように起き上がった彼と目が合った。
ダウンライトのぼんやりとした明かりに照らされた彼の顔は、僕の知っている先輩の顔ではなかった。
そう、弱々しく、力を出し切ってゴールに倒れこんだようなランナーのように、そんなすべて自分をさらけ出し、疲れ切ったような。

ずっとこのことを彼は考えながら、僕と接していたんだろうか。気がつかなかった。いつも見ている、強気で快活とした自信に満ちた彼の表情はすべて消えていた。

僕が何か言葉を発するのを待っている。だけど、何も言葉が出てこない。どうしよう。

彼の目を見ていられなくて、カーペットに目を落とした。それを合図にするかのように、彼が僕の肩をつかみ、ゆっくりと顔を近づけてきた。僕は拒めなかった。動悸が激しくなる。耳のすぐ側に心臓が位置しているように思えた。そのくらい自分の心臓が音を立てて波打つのがわかった。柔らかい唇の感触がした。彼の前髪が自分の額に触れるのを感じた。僕は動けなかった。

だって、あんな目を初めて見た。真っ直ぐな視線。冗談とかそんなんじゃない。自分の心の動きに怯えながら、それでもそれを隠そうとせず、僕に真っ直ぐにぶつけてきた。それがわかったから。だから。

どのくらいの時間だったんだろう。とても長い時間に思えた。こんな悲しいせつないようなキスを受けたのは初めてだ。でも、何か言わないと。混乱した頭で必死に考えた。何て言ったらいいのか。確かに憧れていた先輩だし、彼と一緒にいるのはとても楽しい。だけど。

「でも・・先輩にはもうすぐ・・」

乃理子さんがいるんだ。もうすぐ赤ちゃんだって生まれる。そんな状況で、どうして僕のことが好きだなんて。きっと混乱してるんだ。背負わなければならない責任に怯えているんだ。僕は咄嗟にそう思った。彼の表情が暗くてよく見えなかった。だけど、それがかえって僕をほっとさせた。

彼の返事を待たずに部屋を飛びだした。その場にいるのがいたたまれなくて。

真夜中の3時を過ぎていた。
真夜中の国道は閑散としていて、時折、荷物を運ぶ長距離トラックが僕の脇をすり抜けていった。タクシーなど一台も通っていなかった。だけど、タクシーに乗ることを考えてなぞいなかった。
こうやって歩いて帰ろう。混乱した頭を整理したかった。歩きながら、僕は彼の言ったことを何回も復唱した。僕はそれにどう答えたらいいのだろう。答えるべきなんだろうか。
「好きなんだ。」
そう言った彼の表情を思い出そうとした。薄暗い明かりの下の薄い形の良い唇を思い浮かべた。

あの雪が降った夜。携帯から彼に電話した。会いたいと思ったあの気持。
あれは何だったんだろう。自分の不可思議な説明のつかない彼への気持と、今聞いた告白を線上に並べてみた。
でも彼の僕への好きという気持と、僕が彼を先輩として慕う気持は違う。そう思った。
だけど、聞いてしまった後はもう元へは戻れない。
あの一言で、僕と彼の間には大きな川の流れが出来た。対岸同士に僕らはそれぞれひとりずつポツンと佇む。今までは同じ川のほとりを歩いていた。それも彼が東京へ行くまでの間の短い時間だとしても。
だけど、あの一言を僕は聞いてしまった。もう戻れない。あの川を越えるのか、もうこのまま対岸に位置したまま、僕らは離れていくんだろうか。
寂しいと思った。だけど、僕はあの川を渡れない。直感的に渡ってはいけないと思った。胸に鉛の塊を落とし込まれたように気が重かった。胸の辺りに息苦しさを感じた。
見上げると、冬の月が青く冴え冴えと光っていた。

13話

それから数日。その晩の事が頭から離れず、ぼんやりとした毎日を送っていた。学校には通っていたが、前のように集中して講義を聞くことも出来ず、気がつくと教授の話は頭の上を通り過ぎていくだけで、僕の心は違うことに支配されていた。

里佳子ちゃんからメールが入っていた。彼女に会う気になれなかった。あの日、デートも中断したままで、悪いとは思いながら曖昧な返事を返すしか出来なかった。

数日後、目が覚めた時にふと思い浮かんだことがあった。

京都へ行ってみようか。何故、京都なのかよくわからないが、とにかく日常から逃れたかった。静かな場所へ行きたかった。

それで、地下鉄に乗り、バスを乗り継いで、新幹線が停まる駅まで向かった。緑の窓口で切符を買い、発車まで時間があるのを確認すると、駅のロータリーの真前にあるスタバでコーヒーを買い、発車までの時間を潰すことにした。ガラス窓越しに行きかう人々を眺めながら時間を過ごしていると、発車の時間が近づいてきたので、ホームに立ち、京都行きの新幹線が到着するのを待った。平日なので、人は少ない。出張らしきサラリーマンの姿、定年でリタイアした感じの夫婦連れや、数人の中年女性のグループ。ホームの真ん中に陣取ってはしゃぐおばさんたちの群れは観光旅行のようだ。楽しそうにどこを見て回るか、あれこれしゃべってはしゃいでいる。僕はそんな人たちをぼんやり見ていた。

僕はどこへ行くんだろう。京都か。ひさしぶりだな。里佳子ちゃんが京都で舞妓に変身してみたいと言ってたことを思い出した。でも、今の僕には、彼女に会うことがひどく現実味から離れたことのように思えた。

ホームに新幹線が到着する。僕は自分の席番を確認し、腰を下ろ

した。新幹線が動き出し、景色がゆっくりと流れていく。そして、時速を上げ始めた新幹線のスピードに伴い、町並みが、そして町並みを過ぎると、延々と続く田んぼや山の景色がものすごい速さで後方へ飛び去った。僕は窓からその景色を眺めていたが、そのうち心地よい眠気に襲われた。

「次は京都です。」

アナウンスが入るまでよだれを垂らさんばかりに眠りこけていた。

京都へ着いた。いつ来た以来だろう。京都駅はかなり変わっていた。広く近代的に変貌を遂げ、駅には何件もの土産物屋が入り、ポルタやアバンティなどのデパートが駅ビルに居を構え、何連にも連なるエスカレーターが観光客を運んでいた。僕はホテルグランヴィア京都の脇を通り過ぎ、エスカレーターが上がりきった所にある観光案内所へ飛び込んだ。

さて、どこへ行こう。中でパンフレットや観光マップを何枚か選び取っていると、ふっと頭に浮かんだことがあった。

芙美のことだ。芙美と京都へ来たことがある。

高校1年生の春休み。芙美と、芙美と仲の良い加奈子に美晴。それから僕と、同じクラスで仲の良かった聡に健二。6人で京都へ出かけたことがあった。きっかけは何だったんだろう。よく思い出せないが、仲の良い僕たちは、春休みどっか遊びに行こう、遠出してなんていう話をしていたんだろう。

あの時、僕たちはどこを回ったんだっけ。あの時はまず、清水寺へ。それから、産寧坂から高台寺へと続く道を土産物屋などを見て歩き、円山公園、八坂神社にお参りした。そして、嵐山、嵯峨野。渡月橋を行き交う人たちを見ながら、桂川沿いのベンチに座り話をした。芙美と。何を話していたのだったか。いや、よく覚えている。芙美が言ったことを。

あの時の芙美と過ごした時間がまるで昨日のように思い出され、僕は急にどうしようもなくあの渡月橋が見えるあの場所に行きたくてたまらなくなった。

すぐに観光案内所を出て、嵯峨野線の電車に乗り込んだ。バスを使わなかったのは市内の渋滞に巻き込まれるのが嫌だったからだ。電車なら渋滞に巻き込まれることもなく、３０分ほど後には、僕をあの場所に連れて行ってくれるだろう。

嵐山の駅を降りると、平日だというのに、通りは観光客でいっぱいだった。蟻のようにうごめく観光客に紛れながら渡月橋の方へと歩いていく。桂川沿いに土産物屋や食べ物屋などがびっしりと軒を連ねている中を、大勢の観光客がひしめいていた。カメラを片手に記念撮影をする人、路上でアイスクリームや団子などを食べて雑談をしている若者、団体旅行で観光バスに乗ってきたと思われる中年の団体やら。大堰川の上にかかる渡月橋の上では記念撮影する人たちで一杯だった。シャッターを切る前を邪魔しないように橋を渡ると、対岸へ降りてみた。

その辺り一帯が中ノ島公園だ。出店が出ており、平日とはいえ結構な人が出て賑わっている。そして、川沿いにベンチが並び休憩できるようなスペースが取ってある。ペットボトルのお茶を買い、そのひとつに座り橋を眺めると、ここが一番の撮影スポットに思えた。

嵯峨野の方へ観光に行くこともちらりと頭に浮かんだが、別に観光目的で来たのではない。日常から離れたかった。非日常の空間に自分の身を置きたかった。周りにはカップルや家族連れの観光客や、ひとり旅と思われる人たちもいた。渡月橋の方へ向かってキャンバスを広げ、絵を描いている人もいる。その人たちを何の気なしに眺めていると、頭の中が空白になっていくのを感じる。

誰も僕を知らない。この街では僕は異邦人だ。誰も僕を見ない。誰も僕に気を止めない。それがひどく心地良かった。何人もの観光

客が僕の後ろを通っていった。川の流れを見つめた。こまごまとした雑念が一緒に流れていけばいいと思った。誰も僕の心の中に入って欲しくなかった。

又、芙美のことを思った。あの時、ここのベンチに座り、やはり休憩した。芙美は僕の隣に座り、今日は楽しかったね。と言った。もう、日は傾きかけ、僕らは帰り支度をしなければならない時間になっていた。

そうだね、楽しかったね。と、僕は返した。芙美はあれこれと今日回った観光地のことなどを話していたが、思い切ったように聞いて欲しいことがあるのだと、僕に言った。

「何？」

隣に座った彼女の顔を除くと、扶美は言いにくそうに少し黙った。間があって、その間隣で、今みたいにペットボトルのお茶かジュースを飲みながら彼女が口を開くのを待っていた。

「隆博くん。あの、聡くんのことどう思う？」

何故、芙美が聡のことを聞くのか疑問に思った。それでも、

「いいやつだよ。明るいしリーダーシップもあるし、スポーツも出来るし。」と、答えた。

「何で？」

そう返すと、彼女は思い切ったように一気にしゃべり始めた。内容はやつにつき合って欲しいと言われて、どうしようかと迷っているということだった。

僕はその時、胃の奥がぎゅっと痛くなるような感触に襲われた。確かに動揺していた。冷静に返さなければと思うのだが、言葉がすぐに出ない。やっとの思いで口を開いたが、自分の声がうわずっているのを感じた。

「それで、返事は？」

「聡くんは答えが出るまで待っていると。」

（まだか。まだ返事していないんだ。）

その時の彼女の表情を忘れることが出来ない。目を見開いて僕をじっと見た。答えを探るように。助けを求める溺れかけた人のように、彼女は僕に必死で語りかけた。何も言わず、その視線だけで。

一瞬の間があった。僕は芙美が好きだった。他のやつになんか。でも、ついて出た言葉は。

「いいんじゃないか。」

何故そんなことを言ったのかわからなかった。自分でも驚いた。本当は違う。芙美を他のヤツに渡すのは嫌だった。今がチャンスだったのに。自分も告白して、芙美につき合おうって言えるチャンスだったのに。でも、もう発した言葉は戻らない。その時の芙美は一瞬泣きそうな顔をしたかに見えたが、すぐににこりと笑って

「そうね。いい人よね。」と、言った。

それから芙美はそのことについては触れず、僕らは帰路についた。

それから、1ヶ月ほど経って、2人がつき合いだしたことを皆が噂しているのを耳にした。

１４話

それから何年か経って、今思い起こすと、僕は波風を立てることを避けたのだ。６人は仲の良い友人同士だったし、聡も健二も一番の友達だった。芙美とは中学校も一緒で、仲良くしだしたのは高校へ入ってからだったけど、僕は中学の頃から芙美がずっと気になっていた。図書館で頻繁に会うようになって、仲良く話すようになり、本当は何度か告白しようと思ったけど、その関係を壊すことが怖かった。　もし、断られたら友達でもいられなくなる。そのうち同じクラスで６人が自然に仲の良いグループになるのは、そんなに時間がかかることではなかった。６人で楽しい日々を過ごした。聡が芙美を好きになってもそれは自然な流れだった。

でも、僕は何かを犠牲にしてまでも本当に欲しいものを欲しいと言えなかったのだ。後悔をしたけど遅かった。あの時はいろんなことがはっきり自分の心の中で整理が出来なかったけど、今になってひとつだけ言えることは、僕は自分の心に嘘をついたんだ。それだけは真実だ。そして、自分に勇気がなかったせいで、僕は取り返しのつかない大きなものを失くしてしまった。

何故、あの時あんな言葉が口をついて出たんだろう。どうして自分の心を隠したのだろう。

そんなことを思い出しながら、いろんなことを考えた。自分が目を背けようとしたもの。そして、背けようとしているもの。いろんなことをそつなくこなそうとしているのは自分が臆病だからだ。失敗した時に、それによって失うものを考えてしまうんだ。そして、自分の心に嘘をついて、後で後悔する。

もう、時間は戻ってこない。今、あの時と同じように、この嵯峨野に来て、芙美と座ったベンチに座り、あの時と同じように桂川の流れを眺め、渡月橋をバックにそびえる岩田山を眺めている。でも、

芙美はもういない。もう2度とあの時は戻ってこない。

どのくらい、そこでぼんやりしていたのだろう。冬の日は短い。夕闇が押し寄せ、観光客たちが帰途に着き始めた。風が冷たい。

そろそろ帰ろう。そう思った時に、先輩の顔が浮かんだ。

そのことを考えまいと、あの人のことを考えまいと、自分の頭から追い出そうとすればするほど、その問題が自分の心の中にインクの染みのように広がっていった。

「好きだ」って言われた。僕にどうしろというんだ。

試験前に勉強を見てくれたのも、飲みに連れて行ってくれたのも、僕に特別な感情を持っていたからなのか。何故だろう。彼女と籍を入れるばっかりなのに。

いつから？ずっと前から？それとも。

彼の眼差し、彼の行動、仕草、いろんなものを思い浮かべた。特別なそぶりはなかったと思う。僕は何も気がつかなかった。だけど、思い返しても、あのキスを思い出しても、不思議に僕は嫌悪感を感じることがなかった。それはどうしてだろう。

あの帰り道、衝動的に彼に会いたいと思った。あの感情は何なんだろう。同時に脳裏に浮かんだ扶美のこととどう繋がるんだろう。いくら考えてもわからなかった。

いや、答えはもうどこかで出ているのかもしれないけど。

僕がまだ気がつかないだけで。

ただあの夜の、彼の行き場をなくした子供のような寂しげな表情が忘れられない。

夕暮れの風に追い立てられるようにベンチから立ち上がり、桂川沿いを歩いていると、ふと目に入ったものがあった。

（あ、あれ。）

土産物屋の軒先に並んでいた京紅だった。

あの時芙美が欲しがっていた物。

清水寺周辺で、土産物屋を覗いてぶらぶらしていた時、ある一軒の店で、芙美が貝殻に入った紅、京紅を欲しそうに見ていた。僕が「何、それ。」と聞くと、紅、ようは口紅なのだと説明した。

あの頃、高校生でも化粧している子はたくさんいて、マスカラを塗り、アイシャドウや口紅を塗っていた。学校では校則が厳しかったので、あまり学校内ではする子はいなかったが、放課後や休みの日には化粧をして出かける子が多かった。加奈子もあの日は化粧をしているみたいで、唇がピンク色に光っていたっけ。芙美は化粧などしたことがないらしく、素朴で他の同級生から見たら地味な方だろう。だから、芙美が紅を欲しいなどと言うのが、なんだか意外だった。

「買ったら」と言うと、こういうものは買って欲しいのだと言って僕を見た。僕は「買ってやる」と、喉本まで言葉が出かかったが、何故か気恥ずかしくて、「ふうん。そんなもんなの。」と言ったきりだった。すぐに近くにいた聡たちが来たので、その話はそこで終わってしまったが。

僕は京紅の店に入った。店内には漆黒に塗られた貝殻に詰められた京紅が並んでいた。貝殻には桔梗や藤の花などの絵柄が描かれており、その多様さに目を奪われた。

何故かわからないが、その可憐な花の形が気に入り、撫子の花が描かれた京紅を手に取った。お店の人に「これ、下さい。」と言うと、「彼女にお土産ですか。」愛想の良い笑顔を向けられ、包装しかけたので、簡単でいいと手を振った。

僕はその小さな箱を持って京都を後にした。

携帯の着信を見る。その後、メールをチェックする。受信トレイには里佳子ちゃんからのメッセージがいくつか残っていた。

（何もないか。）

僕が気にしているのは、先輩からの連絡なのだと頭のどこかでわかっていた。あれから彼からの連絡はぱったり止んだままだった。

しようがないか。僕から連絡するわけにもいかない。彼の言ったことの意味をまだ自分の中で反復している毎日だからだ。何故か気がつくとあの晩の事ばかりを考えている。里佳子ちゃんのメールに返事もしないなんて僕はどうかしている。

電車がいつものホームに滑り込む。ああ、ぎりぎりだ。走らないと最初の授業に間に合わない。気は乗らないが、単位を落とすわけには行かない。無理やりにでも足を学内に運ぶ。

構内へ入ると、賑やかに談笑している同級生たちが目に入った。皆が楽しそうに見えた。何の悩みもないように屈託がない。数人の同級生が姿を見て、声をかけてくれた。適当に話を合わせながらも、何とはなくみんなの輪には入りづらいような気がした。

講義室に入ると裕樹と健二が僕を見かけて、おう、久しぶり。授業の後飲みに行こうと誘われた。あまり断って自分の殻に閉じこもるのもよくないと気がついていたから、素直に2人の誘いに応じた。

授業が終わって、よく行く居酒屋へ行ってしこたま飲んだ。僕が少々は飲めるようになったことを2人は驚き、喜んだ。これから飲みに行くのが楽しくなるなと、2人ははしゃぎ、僕に酒をどんどん勧めた。僕は気が紛れた。2人がいてくれたことに感謝した。彼らと楽しくはしゃぎ、それでも、どこか自分は2人とは違うんだという思いが胸の中に染みのようにはりついているような気がした。

それは彼の告白を聞いてしまったからなのかもしれない。

「おおきに。また飲もうな。」

健二と裕樹が駅の改札に消えていく姿に手を振った。

二日酔いだな。まだ頭が痛む。

あれから僕のアパートで、3人して飲んだ。あいつらに付き合っていると、際限がない。もう帰れよ、と言って追い返すと、何言っ

てんだ。今夜は呑むぞと、人んちの冷蔵庫からビールを出すわ出すわ。あいつらいったい何なんだ。
でも、僕が元気ないのをあいつらは感じ取っている。だから無理にでも飲ませて気を紛らわせようとしてくれてるのだとわかっていた。
結局明け方近くまで飲んで、昼近くまで寝て、良いが醒めたところであいつらを車で駅まで送っていった。

さて、帰るか。
駅前に横付けにした車に乗り込むと、足に何かが当たる感触があった。屈んで足元を覗き込むと、ブレーキパットの下に小さな箱が落ちていた。
（何だろう？）
拾って手にとってみると、京都へ行った時に買い求めた京紅の小さな箱だった。
（あ、こんなところに。）
あの時着ていったジャケットのポケットに入れて帰った。部屋に戻ってポケットを探っても箱がないので、どこかで落としたのかと諦めていた。きっとポケットから転げ落ちたままで、気がつかないでいたのだ。
（そうだ。これ渡さなきゃ。）
ふいに思いついて、そのまま車を走らせる。
目的地は、芙美の住んでいた町だ。
さっき、京紅の箱を見て思ったんだ。今日こそ、芙美に会いに行こうって。

１５話

国道を２０分ほど北上する。大きなドライブスルーの看板が目立つマクドナルドの交差点を県道へ折れると、すぐに駅前のターミナルが見えてくる。改札の前にはタクシーやバスが入ってくる円形のターミナルがあって、大きな噴水がある。この駅のもっとも目立つ目印だ。その噴水を左に折れて、商店街を抜けると１０分もせずにすぐにその場所へたどり着いた。街中にあり車が良く通る街道なのに、一歩中に入るとその喧騒が嘘のように静かだ。その境内には誰もいない。お堂があり、右手には住職の住まいがあり、左手に入っていくと墓地がある。

そう、僕は芙美の墓に参りに来たのだ。

久しぶりに来たけど、墓の場所はしっかり覚えている。僕はあの頃、何度ここへ来ただろう。芙美の墓にはいつも綺麗な花が手向けられ、きちんと掃除が行き届いている。おばさんは毎日お参りに来ているのだろう。芙美の家はここから歩いて5分ほどの所にある。僕はその小林家先祖代々の墓と刻まれた墓の前にしゃがみ、持ってきた京紅の箱を置いた。

「芙美、今頃ごめんな。あの時買ってやればよかったのに。」

そう、話しかけてみる。頭をなでるように墓石をなでてみる。墓石の側面に刻まれた文字を手でなぞってみる。

（俗名　小林芙美　享年１７歳）

墓石は冷たく、その刻まれた文字は何の感触も示さない。でも、僕はここに触れずにはいられない。来たときはいつもそうする。あの頃のことを思い出してみる。彼女がこの世を去って間もない頃。ここへ来て、どのくらいの時間ぼんやりしていただろう。あの時のことを思い出すと、何ともいえない気持ちになる。背中から冷水を浴びせられるような、ぞくぞくとした寒気にも似た感触に全身を包

まれていた。いつも感じた心もとない不安。何ともいえない気持ちだ。今でもはっきり覚えている。

あの日、僕は塾が遅くなり、家にたどり着いて夕飯を食べると自室で眠り込んでしまった。母親から電話だと起こされ、時計を見ると１０時を過ぎていた。

（こんな時間に誰だろう。）

いぶかしげに受話器を取ると加奈子だった。

「隆博くん。」

言ったきり、泣き出してしまい後が続かない。何かあったのかと、問い続けてもしゃくりあげるだけでらちがあかない。何かあったには違いないけど、それは予想もしないことだった。

「落ち着いて聞いて。」

「落ち着いてるよ。何があった？」

「ホントに落ち着いて聞いてね。」

「ああ。」

「……」

「何？」

加奈子の声が震えていた。

「芙美が…」

「芙美に何かあったのか？」

「芙美が亡くなったわ。」

その瞬間、頭の思考回路がストップした。何かショックなことがあった時、人はよく頭が真っ白になるというが、あれがそうだったのか。真っ白だった。何も考えられなかった。どこか遠いところで自分の声がした。

「死んだ？」

「そう。」

急に感情が復活した。腹の底から感情が沸きあがって来た。

「嘘だ！」

「嘘なんかじゃないわ！」
受話器の向こうで加奈子が金切り声を上げ、号泣した。僕はそれをぼんやり聞いていた。その後のことはあまり覚えていない。何故か、次の記憶は芙美の葬式だった。芙美の家に行くと、クラスの皆が来ていて、あちこちで泣いている声がしていた。

今でも覚えている。こんなことを。
焼香をし、花を彼女の棺に入れた。僕はその花を芙美の左の脇腹の辺に置いたことを覚えている。きれいな顔だった。眠っているような。でも、その血の気のない蝋人形のような青白い顔はまさしく死人の顔だった。白い菊やカーネーションなどが顔の周りを縁取り、僕は彼女の顔を見た。どっちの頬だっただろう。少し青いあざが出来ていて、それが事故死なのだという事実を物語っていた。
その葬儀の席にほうけたように聡が座っていた。むちうちの人がするおおきなカラーを首に巻き、頬にガーゼを当て、目の上が青く腫れていた。僕は聡を見ることが出来なかった。目をそらし、その場を離れた。
出棺の時、僕は祈った。何を。芙美、もし僕が死ぬ時、僕を覚えていてくれたら、迎えに来て欲しい。そう、祈った。これで、最後なんて思いたくなかった。もう一度会いたかった。この世ではもう会えないなら、せめてあの世で。自分が死ぬとき、芙美にもう一度会いたかった。自分がおじいさんになっていたら芙美は僕だとわかるだろうか。きっと、わかるよな。

出棺の後、事故現場へ花を手向けようと、クラスの何人かで事故現場へ向かおうとした。加奈子と美晴が泣き崩れて動けないのを、クラスの女の子たち2、3人が抱えようとしていたので、僕は加奈子を、健二は美晴をそれぞれ抱き上げた。
「つらいけど、もっとつらいのはお母さんやお父さんたちだ。しっかりしろ。泣くんならお母さんたちの見えないところで泣こう。」

彼女たちは僕を見て、健気に首を大きく何度も縦に振った。
その時、聡が僕たちに近づいてきた。そして、僕たちの前で立ち止まると、頭を下げた。膝まで届くくらい体を折り曲げて。僕らはそれを見たけど、その場には加奈子と美晴、健二、それに他の芙美の友達やら１０人くらいの人がいたけど、誰ひとり、もちろん僕も、誰も聡に声をかけてやれなかった。いたたまれなかった。どうすることも出来なかった。口を開こうと思ったけど、声が出なかった。その場に僕らは立ち尽くした。

その後、花を買って、加奈子と美晴、健二の４人で、その現場へ行った。堤防沿いの道で、結構見通しも良く走りやすい道だった。その場所は、市内へ向かう道と、川を渡る橋が交差する交差点で信号がついている。
話によると、あの日。聡はバイクの後ろに芙美を乗せ、市内へ向かっていた。そんなにスピードが出ていたわけでもなかったらしい。その信号は点滅信号で、聡たちが走っていた道が優先だった。黄色の点滅の信号を確認し、交差点に差し掛かる。それを川向こうから橋を渡ってきた車が信号を無視して突っ込んできたのだ。おばさんが病院へ走っていった時には、すでにもう芙美の意識はなかった。即死だったらしい。
聡は奇跡的に軽症ですんだ。しかし、芙美はもう戻らない。
夏の日は傾きかけていた。うだるような暑さも川を渡る風に冷やされ、心地良い風が吹いていた。僕らはその場所に花を手向けると、手を合わせた。

それから僕たち４人は、そう、あの噴水の前で待ち合わせて、週命日になると彼女の家に行った。仏前に参り、芙美が好きだったシュークリームやチーズケーキを買っていって供えた。仏壇には大きな芙美の遺影が飾られ笑っていた。
いつ頃の写真だろう。高校の制服を着ている。おばさんの話によ

ればあまりにも急なことだったので、遺影に使う写真を選ぶ余裕がなく、高校の入学式に撮った写真を引き伸ばしたそうだ。僕はその写真を見るたび、（おばさんたちもきつい冗談だよな。まるで死んだ人みたいじゃないか。）そう、思うのだが、その次の瞬間、ああ、本当のことなんだ。芙美は死んでしまったんだ。と、確認するのだ。次の瞬間、うっかり涙が出そうになるのをぐっとこらえる。

そして、おばさんはお茶やお菓子を出してくれ、彼女が生きていたときの話、家ではこんな子だったとか、こんなものを集めていたとか、兄弟とはこんなふうに遊んだりしていたとか、そんな話をしてくれる。その時の僕らにはそれ以上の慰めがあっただろうか。芙美とどこか面影が似ているおばさんと彼女の話をする。それは悲しいことだけど、どこか優しい時間だった。

彼女には下に、弟と妹と兄弟が４人いて、そのすぐ下の妹が年子で彼女にそっくりだった。家に行くとその妹が顔を出す。その子を見るとなんて似ているのかと感心し、でも、芙美ではないのだと思うと、砂を噛むようなむなしい思いになる。

16話

お参りに彼女の家に行っても、聡の話は出なかった。誰もが彼の名前を口にすることはなかった。聡のつらい気持ちは僕らも容易に想像出来たが、僕は彼を慰めることは出来なかった。芙美の葬式が済んで、だいぶ経ってから彼は学校に出て来たが、事故の後の傷が痛々しく、僕は差しさわりのない話しか出来なかった。事故のこと、芙美のことはいっさい触れなかった。

でも、事実、このことで僕たちの間には埋めようとしても埋めることの出来ない溝が出来たのは避けようのないことだった。実際、芙美は死んでしまった。彼女は永久に僕らの前から姿を消したのだ。その事実は拭い去ろうとしても拭い去ることは出来ない。聡は一緒に事故に遭って芙美だけが死んでしまったことを、ひどく後悔していた。

自分がバイクに乗せていたから。あの日、あの道を通らなければよかったとか、いろんなことを考えていたのに違いないけど、彼だって被害者なのだ。つらいのは彼だ。僕より、誰より、後悔と、罪の意識にさいなまれて一生それを背負っていくのだ。だから、誰が彼を責められよう。どうしてお前だけ生き残ったのだと、誰がなじることが出来よう。

だけど、僕の心の奥底にはきっと醜い部分があったに違いない。

聡、何故お前だけ生きているんだ。芙美はどうして死んでしまわなければならなかったんだ、ってね。

自分の醜い部分を見たくなかった。それでだろうか。何となく聡とは距離が出来てしまった。以前のように腹を割ってしゃべることもなく、毎日のように遊んでいたのに、遊ばなくなった。聡は聡で、僕は僕で、健二や違う友達と毎日を過ごしていた。もう以前のよう

にはなれなかった。でも、それは仕方のないことと、僕は割り切っていた。それよりも芙美が死んだことで僕はその後、たぶん半年から1年くらい、そう高校を卒業するくらいまでの間は、どこかおかしかったに違いない。夢遊病者のように、意識が朦朧として、その辺りのことを今から思い出すと、少し記憶が飛んでいるところがある。受験生だったのに、どこをどうして勉強していたのか。よく、あれで大学が受かったものだと、われながら感心する。

確かにあの頃の僕はおかしかった。時々、学校の帰りに無性に芙美に会いたくなる。そして自転車で４０分もかけて、あの事故現場まで行くのだ。芙美が後ろに乗っているような気がするのが嬉しくて、自転車を走らせた。そこへ行ったからといって何もないのに。馬鹿みたいだと、夕暮れの堤防を何度、泣きながら走っただろう。毎日、普通に学校へ行って、受験勉強をして、塾へ行って、母親に文句を言いながら飯を食べて。

でも、ときおり風呂に入っている時や、自分の部屋でヘッドホンをつけ音楽を聴いているときなどに訳もなく涙が溢れてきて、止まらなくなることがあった。いつまでこんな日が続くのだろうと、途方にくれた。

そして、ひとつの罪の意識に苛まれ続けた。

あの日、バイクを貸したのは僕だった。聡から扶美と約束しているのに、自分のバイクの調子が急に悪くなって動かないからと。

まさか、こんなことになるなら貸さなければ良かった。

バイクを貸したから、扶美があのバイクの後ろに乗ったから。だから。

それはどうしようもない事故なのに。もうひとつ言えばこちらには過失などなかったのに。赤の点滅信号で突っ込んできた車に責任があるのに。

だけど、僕はバイクを貸したことをずっと悔やんでいた。

健二が、
「おまん、いい加減にせい。ずっと引きずったままでおるんか。」
ある日、話があるからと呼び出された。
健二は知っていたんだ。彼に扶美のことを話したことはなかった。だけど、いつも一緒にいる彼は僕のことをよくわかっていた。
「だけど、バイクを貸したのは僕だし、扶美に気持を言えないままこんなことになってしまって、どうしていいのかわからないんだ。」
堰を切ったように彼に胸の内を打ち明けた。
「俺もようわからん。」
そう俯いた後、天を仰ぐように空を見上げ、
「どっかに扶美、おるよ。おまんがいつまでもそんな顔して、うじうじしとったら扶美だって辛気臭うてかなわんわ。」

わかってる。自分でもいつまでもこんな思いを抱えて生きてるの嫌だ。
「俺が考えるには、毎日、普通に同じ時間に起きて、食事をし、学校へ行く。何も考えず、規則正しくいつもと同じように過ごす。そんでいいんやないか。だっておまんも俺んらもそうするしか仕方ないやんか。それ以外、俺んらに出来ることなんてあらへんぞ。」
そして、週命日のお参りを４９日を境に止めた。きりがよかったし、こうして引きずることが僕らにはつらいことだと、その時はそう思ったのだ。早く、気持ちの整理をつけて、次の段階へ行かなければならなかった。そして、そちらを選んだのだ。無論、それが正解なのだと思った。辛過ぎたのだ。その事実にいつまでも向き合っていることが。
それから二度と僕はバイクに乗らなかった。

どのくらい彼女の墓の前で僕は惚けていただろう。気がつくと日はすっかり傾き、夕暮れの闇が迫っていた。僕は身震いをした。薄いジャケット１枚で、ずっと冷たい墓石の前に座っていたのだから。

季節はもう１２月で、雪が舞う日も多い。雪の多いこの地方は、１１月の末頃にはちらほら雪が舞い、１２月には道に雪が積もり真っ白になる日も多い。僕はすっかり冷えた体を引きずってアパートへ戻った。

バスタブに湯を張っている間、毛布に包まってウィスキーの薄いのをちびちびやっていると、体に体温が戻ってくるのを感じる。下戸だった自分が嘘のように、アルコールと相性が良くなったらしい。自分の体質が変わってしまったようだ。でも、飲めるのはいい。嫌なこと、思い出したくないことを忘れることができるからだ。一時でも。どうも、芙美の墓の前で呆けていたら、あの頃のことをあれこれと思い出してしまった。自分の胸の中に思い出さないように封印していた思いを。

僕は本棚から芙美の遺品を取り出した。「ウォーターシップダウンのうさぎたち」リチャード・アダムスだ。彼女の家にお参りに行っているときに、おばさんがもらって欲しいと出してきたものだ。

僕たちが仏前にお参りした後、いつものようにおばさんがお茶とお菓子を出してくれて、

「隆博くん。ちょっと待っていてね。」

そう言い残して、部屋から出て行き、数分経って戻ってくるとおばさんの手には1冊の本が握られていた。そして、それを僕の前に出すと、

「これね。芙美が隆博くんに渡そうと思っていたものらしいのよ。」

「僕に？」

手に取り、ペラペラと中をめくると、ページの最後の空白の部分に、僕に宛てたメッセージが書かれていた。

『隆博くんへ。私が最初に読んだ洋書です。この本を読んで、私が感じたことをあなたも感じて欲しい。』

「おばさん、これ本当にもらっていいんですか。」

「もらっていいも何も。芙美があなたに残した物なのよ。」
僕はその本を手に取ると、涙が滲んでくるのを感じた。こんな所で泣くなんて。皆もおばさんもいるのに。でも、恥ずかしいけど本当にその時、嬉しかったんだ。そして、ひどくひどく後悔した。芙美の気持ちを思った。大事な本を僕に残した彼女の本当の気持ちをその時初めて理解した。そして、自分の気持ちを。そして、何よりすべて遅すぎたことを知った。

何をしてももう芙美はいない。それでもその本を僕にと、残してくれた芙美の気持ちを少しでもわかりたくて、一生懸命訳して何ヶ月もかかってやっとその上下巻2冊もある洋書を読みきったんだ。だから、一番思い出のある作品だ。
その頃のことを思い出しながら、本をめくっていると、何か紙切れがひらりと落ちた。その紙切れを手にとって、僕ははっとした。
（ああ、こんなところに挟んでおいたのか。）
それは、ワークショップで水木先輩と組み合わせになった時の、僕の訳したものに対する彼の評が書かれたものだった。それには彼には似つかわない上品な言葉で、賛辞の言葉が書いてあった。それを読んで僕には彼が僕のことを、僕の才能と言ったら大げさかもしれないけど、僕のことを理解してくれているのだと感じ、ひどく嬉しく思ったのだ。だから、この大事な本の間に挟んでおいたのだ。

彼の書いた文字、彼の筆跡を見、ひどく彼に会いたいと思った。今すぐにでも会いたい。でも、僕は頭を振った。その思いを振り払うように。
会いたいと思う自分の気持にまだ振り回されている。どうして彼に会いたいと思うのだろう。この気持は恋なのか。好きな人に会いたいという、あの思いなのか。まだよくわからない。だからもう、会わない。会えないのだ。僕らの関係は変わってしまったのだ。あの夜を境に。彼はもう僕にとって過去の人でしかないのだ。そう思

った瞬間、胸ぐらを凍った手で掴まれたかのように急に息苦しくなった。目の奥が痛んだ。
それでも、次の瞬間、僕は違うことを考えようと無理にそのことから意識をはぐらかそうとした。無理やり傷口から瘡蓋を引き剥がすように。
（ああ、いけない。風呂の湯が一杯になってしまう。）
僕は、その紙切れを今までと同じようにページの間に挟み、本棚に大事にしまった。そして、グラスに残ったウィスキーを一気に喉に流しこみ、浴槽へと向かった。バスタブに体を沈めると、細胞のひとつひとつが一気に弛緩し、気が緩んだ。暖かくて気持ち良かった。

どうしてだろう。ふっと、涙があふれてきた。
泣くなんて。男のくせに。何を泣くんだ。芙美のことか？思い出したら悲しくなったのか？それとも、本当に胸を占めていることは何なんだろう。わかっていたはずだ。だけど僕はそれに目を向けたくなかった。
ばかばかしい。泣くなんて。でも、よく考えたら、僕ひとりだ。ここにいるのは。自分の部屋だし、泣いたって喚いたっていいじゃないか。誰もいないんだ。誰に聞かれることもない。その方が、気持ちが楽になるのかもしれない。
僕は泣くことによって自分で自分を癒したかった。気持ちの奥に、何かが枯渇していた。それは何だろう。乾いていた。
僕はバスタブにジャブジャブとお湯を流しっぱなしにしながらいつまでも泣いていた。誰に聞かれるのでもないのに、何故かお湯を流しっぱなしにすれば泣き声が聞こえないだろうと思ったのだ。

17話

その日、僕は学内にある生協のコピー機で、市川に借りたレポートをコピーしていた。何せここ最近ろくすっぽ授業に出てなくて、単位が危うい。

コピー機の前でぼんやりコピーが終わるのを待っていると、横から無遠慮に誰かの手が出て来て、コピーした用紙を取り上げた。

「あ、それ。」

僕のだと言おうとして、そいつの顔を振り返って見たら、裕樹だった。

「なんや、おまえ。真っ白じゃん。」

裕樹の手から用紙をひったくると、確かに真っ白だった。

「あれ。」

よく確かめてみると、元のコピーしたい方を裏返しにしていたので、裏面がコピーされていただけで、どれも真っ白だった。

「あほじゃな。」

ばかにしたように裕樹が言うのに腹が立って、コピーしようとセットしておいたレポートを乱暴にひったくると、生協を後にした。

「待てよ。」

裕樹が追っかけてきて、僕の腕を掴んだ。

「なんや。調子悪そうだな。」

ふん、と僕は鼻で息をした。

「別に。最近授業に出てなくて、市川にレポートコピーさせてもらおうと思って。」

「そうか。」

「俺に言えばいいのに。取ってる授業大体一緒だろ。」

そうは思ったが、抱えている悩みを健二や裕樹に知られるのが嫌だった。

「まあ、いいわ。コーヒーでも飲も。」

ふたりして学食へ行って、コーヒーを買うと窓際の席に座った。

「最近、おまえおかしいわ。こないだも具合が悪いって、だいぶ出てこんくて、ちょっと出て来たと思ったら、また見ないもんな。ええかげんにせんと単位落とすで。来年3年だろ。就職活動も始めないかんしな。」

裕樹は真面目なヤツだ。家が和菓子屋の老舗で、学校を卒業したら、家業を継ぐらしい。何で、この学部に来ているのだと聞くと、ただの趣味だといった。まあ、それはいいが、老舗の跡取りのせいか、責任感が強く、真面目であまり冗談も言わない。が、人の気持ちのわかるやつで、こいつにはいつまでも隠せないなとは思っていたが、虚をつかれた。

「わかってるよ。」

「ほんとに胃の調子が悪いんだ。」

「だったら、検査受けろよ。」

「うん。」

とは、言ったがもちろん胃が悪いなんて嘘だ。

「嘘だろ。」

「何が。」

裕樹に表情を読み取られないようコーヒーカップに視線を落としながら答えた。

「だからさ、なんか悩みとかあるんだろ。何やらかした?」

「いや。」

「何もないよ。」

「俺に嘘つくなよ。」

「うん。」

自分自身も何を悩んでいるのか、いつもの調子の自分に戻れないことが苛立たしかった。だからと言って、彼に言ってみろと言われても何を言えばいいのか。まさか、何が言える。あるきっかけで、昔の死んだ彼女のことを思い出して、悲しくなっているとでも?そ

れとも、男に告白されて悩んでると？もひとつ上をいってその相手のことが何故か気になってしようがないとでも告白しろと？
「まあ、悩んでるといったらそうなんだけど。裕樹の気持ちは嬉しいけど、とにかく、少し自分でいろいろ考えていたいんだ。人に話して解決するような問題でない。」
そう、溜息をつくと、
「まあ、お前は何かあると、健二みたい明け透けに悩みを打ち明けて解決するタイプじゃないしな。それはわかってるんだけど。健二も心配してたぞ。あ、あと、例の彼女。大丈夫なんか。お前から連絡がないって、健二に泣きついていったらしいぞ。」
「え。」

里佳子ちゃん。気にはなっていたが、とても連絡を取って会う気分じゃなかった。
「健二がそのことでも心配しとったぞ。今度はうまくいきそうやなって喜んどったんやけど。」
健二が女関係で僕のことを心配してくれてるのは前からのことだ。
扶美の事があるから。
あれから扶美を失くしたショックで、他の女の子と付き合うことなんて考えられなかった。でもここ最近になってやっと、前向きに考えられるようになった。それで紹介やコンパなどで知り合った女の子とデートしていたんだけど、どうも長続きしなくて。それは僕の執着心のなさなのだとわかっていた。　原因は僕にあるんだ。
コーヒーの薄いカップに目を落としたまま、黙り込んでいると、
裕樹に肩を揺さぶられ、
「でも、俺でよければいつでも言え。友達がいるのを忘れるな。」
「裕樹。僕が何をやらかしても友達でいてくれるか？」
思い切って聞いてみた。
彼は即答した。
「たとえ、お前が泥棒をしても、殺人をしてもだ。俺がお前を嫌い

になることはない。そうすることには何かしら理由があるだろうし、俺はお前を知っているつもりだ。」
心強かった。裕樹が男らしく見えた。
「ありがとう。」
そう言うのが精一杯だった。
急に裕樹は照れたように、時計を見て、
「ああ、いかん、次の授業は出ないかん。お前はゆっくりしていけ。」
そう言って立ち上がり、
「良ければいつでも俺の下宿へ来い。いつでもだ。」
「ああ。」
裕樹は去り際、背中を向けたまま、じゃあなと手を振って出て行った。
何だかほっとした。ひとりじゃないということはなんて心強いのだろう。裕樹があれ以上何も聞かずにいてくれたことが嬉しかった。
いつまでもこうしていてはいけない。とりあえず、やることはやらなければ。僕も次の授業に出るために立ち上がった。

いつものような日々が過ぎていった。だいぶ授業を休んでいたので、次のテストは苦しかった。が、何とかこなし、ぎりぎりだったが何とか単位もクリアできたし、ちょっとほっとした。裕樹に会った時、何とか単位もクリアし、テストもやっつけたことを報告すると、彼もほっとした顔をした。
このまま、普通に日々が過ぎればいいと思った。あの晩の事は忘れ、先輩も東京へと発ち、いつもと同じ日常が戻ってこれば。自分が自分に戻れるのもあと少しだ。
でも、ひとりになると、藻が絡みつくように頭の中を支配することがある。振り払おうとすればするほど、心をそこに近づけまいとすればするほど、その影は心の中にどんどん大きくなっていた。そして、そのことを僕は嫌悪した。嫌悪しているのに、その嫌悪感と

は反対の位置で心が魅かれてどうにもならないことを感じる。
２人の自分がいた。その答えをいつかは出さないといけないのだろうか。このまま、あいまいに日々を過ごしていけばいつか忘れ、解決していくことなのだろうか。その答えは出ない。誰も答えてくれない。
時々、夜、自分の部屋で何もせずにぼんやりしていると、無性に彼のことを考えることがある。彼の笑った顔や、眼差し、ふっとしたしぐさや、話した事柄についてや、そんないろんなとめどもないことだ。
僕はあれから彼に会っていなかった。当然なのだろうけど。連絡もしない、連絡も来ない。彼の問いに僕は答えなかった。それで良かったのだろうか。いや、それで良かったのだ。その問答の繰り返しだ。

ある日、講義を終えて学校の門を出ると、ばったり里佳子ちゃんに会った。
突然で声も出ず、立ち尽くしていると、
「隆博君。今いい？」
彼女から声を掛けてきた。
頷き、無理やり笑顔を繕う。
ずっと連絡をしなかった僕をなじるわけでも、不機嫌な顔を見せるわけでもなくいつもどおりの明るい笑顔を見せて、
「久しぶり。急にごめんね。」
そう言って僕の腕を取った。
ずっとあの門のところで待っていたのだろうか。
聞きたくて、喉元まで言葉が出かかったのを飲み込んで、
「こっちこそごめん。連絡もせずに。」
彼女は慌てて首を振る。
「いいのよ。」

18話

門を出てすぐの場所に位置するカフェに入る。
窓越しに、雪を被ったポプラ並木を見ながら、
「隆博君の気持を聞かせて欲しいの。」
「僕の？」
「そう。」
何度かデートして、付き合っているのだと自分は思っていたのだけれど、このところ連絡をしても返事がないし、付き合っているのかどうかも自信がなくなってきた。それとも他に好きな子が出来たのか。もう、自分とは付き合う気がないのか。はっきり聞かせて欲しい。
そう里佳子ちゃんは言った。
僕は気持を決めかね、何と返事をして言いのかわからず口をつぐんだ。
黙ってカップを口に運んで様子を伺っていた彼女が焦れて、
「私のこと嫌い？」
「いや、嫌いだなんて。楽しいよ。君といると。ほんとに。」
思わずそう答えた。彼女といるのは楽しい。それは本当だった。
「どうして連絡くれなかったの。」
答えようすもなく、また黙り込んでいると、
「杉原君から聞いたんだけど。」
健二に泣きついたって言ってたっけ。裕樹が。
「隆博君にはまだ忘れられない人がいるって。本当？」
扶美のこと。健二が言ったのか。
怒りに似た感情が湧き上がってきた。
「あいつが言ったのか。」
押し殺したような暗い自分の声に、驚いた。
もっと驚いたのは彼女の方だったみたいだ。

「ごめんなさい。聞いてはいけないことだったのかしら。どうしても隆博君のことが諦められなくて、無理に私は聞きだしたの。何か原因があるのかと思って。」
慌てて小さな声で彼女が弁解した。
怒ってみても仕方がない。彼女のすまなそうに身を縮める様子を見て、一気に暗い感情が払拭される。だって何も知らない彼女に連絡も取らず、返事を返さなかった自分が悪いのだから。
「いいんだ。」
沈黙が続いた。
「それで、里佳子ちゃんはそれを聞いてどう思った？」

どうするつもりなのか。彼女任せにしている自分が嫌なやつだと思った。これ以上いろんなことを考えると頭がパンクしそうだ。また執着心がないと健二に怒られそうだが。半分投げやりな気持で、苛立っている自分がいた。
「ずっと考えていたんだけど、隆博君がもし嫌でなかったら、もう少し付き合って欲しいの。その忘れられない人がいてもいい。いつか私に振り向いてくれる日が来るのを待ってみたい。」
健気な彼女の返事に、罪悪感で胸が一杯になった。
「僕は、里佳子ちゃんが思っているような人間じゃないよ。待ってもらうだけの価値があるのかどうか自信がない。」
本音だった。いつまでもうじうじと、扶美のことが忘れられず、いろんな女の子を傷つけているだけの自分。それだけならまだしも、あろうことか好きな男がいるなんて。
好きな男？
自分で自分の胸の内の声に驚愕する。水木先輩のこと。無意識にそう思った。好きなのか？まさか。

扶美が亡くなってから、女の子と付き合った。何人かの子と。殆どは心配した健二から紹介された子だった。思い出しても自分から

好きになって付き合った子はいなかった。胸の内にはいつもどこかで扶美がいたんだとおもう。
意識的に彼女を思い出すことはなかった。封印していたのだと思う。彼女の存在を。
もうこの世にはいない人なのだから。新しく自分の道を進んでいかなければならないことなんて、充分わかりすぎるくらいわかっていた。
頭でわかっていても、身体がうまく動かないことって結構ある。それと同じように頭ではわかっていても心がうまく動かなかった。ギクシャクと耳障りな音を立てながら動いているぜんまい仕掛けの人形のように、僕は女の子に接していた。たぶん。
そんな違和感を気づくと、彼女たちは自分から去っていった。何も聞かずにね。
こんなふうに僕の中に割って入ってきたのは里佳子ちゃんが初めてだった。ナイフで胸を抉られて気絶する寸前のように、眩暈がした。脆い。自分は。
彼女たちとうまくいかなかったのは扶美のことが忘れられないからなのだと、思っていた。だけど、今自分の中に湧き上がる感情の中にもうひとつの理由があるのかもしれないと疑いだしていた。
水木先輩のこと。男が好きなのか。僕は？それも原因なのか。扶美のことじゃないのか。
急に視界が明白になって、素のままの裸で往来に放り出されたようで、怖くなった。自分に対してだ。

「大丈夫？」
どのくらい時間が経ったのだろう。凄く長い時間、自分はここにいなかったような気がした。
「大丈夫だよ。」
彼女がテーブルの向こうから僕の顔を覗き込んでいる。心配そうに。

僕の顔は青ざめているのだろうか。頬に手を当ててみた。ひんやりした頬の感触が気持悪かった。
里佳子ちゃんは明るく、半ば一方的に、
「待ってる。隆博君が私の方を向いてくれるまで。私、結構気が長いのよね。」
笑顔を向けて、僕の頬に触れた。
暖かい。柔らかい手の感触が気持ち良かった。

レジでコーヒー代を払い、外に出る。
冷たい風が身を切るようだ。
肩先で揺れる彼女の栗色の髪を見て、不意に並んで歩く彼女の肩を自分の胸に寄せる。
驚いた彼女が僕の顔を見上げる。
そのまま彼女の背に手を回し、顔を近づけた。
甘い髪の匂いがして、柔らかい唇の感触がした。唇を離しかけて、何を思ったのか僕は又そのまま唇を寄せた。彼女の口を夢中で吸った。小さく吐息を漏らしながら、彼女は僕の背中に腕を回して力を込めた。

１９話

それから数日後のこと。
バイト先の店の窓から外をぼんやり眺めていると、不意にオーナーが口を開いた。
「そろそろ店閉めようか。」
「もう閉めるんですか？」
反射的に壁の時計を見た。１１時か。
オーナーは問いには答えず看板を仕舞い始めた。
「まあ、今日は寒いし、お客は来ないし、こんな日は早く家に帰って自分が一杯やりたいよ。」
寒そうに、オーナーは身震いした。客が来ないかと待ってはみたが、どうやら今日は閑古鳥になりそうだった。
「珍しいですよね。こんな日も。」
「まあ、客商売には波があるしね。給料日前の週末で財布が硬い時だからねえ。」
ああそうか、自分みたいな学生にはぴんとこないが、世は給料日前か。いつもは１２時過ぎまでは店を開けているのだが、こんな日は客が来ないだろうと、オーナーは早々に空気を読んだみたいだ。
「隆博、もういいぞ。」
「ええ。」
店仕舞いを手伝っていると、オーナーが帰れというように手を振った。
「オーナーは？」
「ちょっと、店の事務処理があるから。少しやってから帰るわ。」
「じゃあ、お席に失礼します。」
遠慮がちに言い、帰り支度して店の裏口から外へ出た
外へ出ると雪が降っていた。

「あれ、雪だ。」
傘が置いてなかったかと、裏口から出て、店の荷物置き場をがさごそと物色していると、後ろに人の気配を感じた。
オーナーかな。
「オーナー、帰るんですか。雪降ってますよ。」
その気配に背を向けたまま、声を掛けると、
「隆博。」
名前を呼ばれた。オーナーじゃない。
「あ。」
不意を突かれてびっくりして振り向くと、水木先輩が立っていた。
「先輩。」
努めて、平静を装った。
「帰りか。」
「ええ。」
「早いな。」
「客がいないから。」
僕はぶっきらぼうに答えた。言葉が続かない。
僕らはだまって突っ立っていた。雪の降りが強くなってきたようで寒い。
彼が口を開いた。
「こないだのこと謝ろうかと思って。」
「謝らなくても。謝るとかそういうことじゃないし。」
僕の声は上擦っていただろう。何と答えよう。答えようすがない。
「もう、済んだことだし。」
自分の声色が気になった。先輩は苦しそうな顔をした。

いつから彼はここにいたのだろう。
よく見るとダウンジャケットの肩が濡れていた。
前髪に雪がついているのが気になった。その雪を見て次の瞬間、何を思ったのか反射的に手を伸ばして彼の髪の雪を振り払おうとし

た。自分で自分のしようとしたことが意外で、びっくりした。
僕は急いで手を引っ込めた。動悸が激しくなる。彼はそれ以上何も言わず泣きそうな表情になった。　ふたりとも言葉を発することなく、立ち尽くした。
どのくらいそこに立っていたのだろう。たぶん、時間にしたらほんの数分の出来事だったに違いないが、とても長い時間に思えた。
「すまない。このまま曖昧な気持ちのままで、東京へ行くのも嫌だったし、行く前にもう一度お前の顔が見たくて。」
そう思い切ったように言うと、彼はきびすを返した。
（お前の顔が見たくて）
その言葉を聞いて、何かが自分の中で一瞬弾けて飛んだような気がした。今ここで呼び止めなかったら一生彼を見失ってしまう。そう思った瞬間、心が凍りついた。
「待ってくれ！」
振り返った彼の表情が見えた気がした。暗い街灯の下だったのに、その時何故かはっきり彼の顔が見えた。驚いたように目を見開き、戸惑いが少し開いた口元にみえた。でもそれは決して何かを拒絶した表情ではなかった。
僕は彼に恋をしている。その時、はっきり意識した。里佳子ちゃんのことも、相手が男だということも、すべてその瞬間吹っ飛んで消えた。

振り返った彼が僕の方へ歩み寄る。僕は彼の顔がまともに見ることが出来ずうな垂れる。
芙美が僕の中で何度も振り返りる。花びらを手にして。
舞い落ちる雪が、扶美の掌の中で薄い桜の花びらに変わった。
少し俯き加減に肩を落とし、
？美しいものって儚いんだね。？
扶美の声が響く。

「隆博。」
雪の中、彼の薄い唇が僕の名前を呼ぶ。
?美しいって儚いことだ。?
違う。僕はその時はっきりと理解した。
扶美が言った言葉。大事にしていた扶美との思い出。その言葉を彼も口にした。
だから扶美に重ねて、僕は彼を意識していたのかとずっと思っていた。
だけど、違う。違うんだ。僕が好きなのは扶美の思い出と重ねた彼の言葉じゃない。彼自身だ。ずっと会いたいと思っていたのは、失くしたくないと思っていたのは彼だったんだ。だけど。
近づいてきた彼が僕の腕を取る。
「隆博。もう一度言ってもいいか。お前のことが好きだ。」
彼が僕の顔を覗き込む。僕は表情を読み取られないように、顔を背けて、
「ずっと会いたいと思っていた。本当だ。だけど、怖いんだ。」
やっとそう言葉を発した。
「俺が男だから?」

そうかもしれない。いや、でもそれ以上に怖いことがある。
人を本気で好きになることだ。本気で好きになった相手がまた消えてしまったらどうしよう。僕はずっとそのトラウマに囚われたままだった。だから、どの子も好きにならなかった。相手の心の中に踏み込むことが怖かった。どこまで相手の中に入っていいのか、距離を恐る恐る測っていた。飛び込むことなんて出来なかった。
ゆっくり首を振った。
彼が、その大きな手で僕の頬に触れ、顔を包んだ。
暖かい手の感触に、鼓動が激しくなる。小刻みに身体が震えるのがわかる。降り続く雪が背中を濡らしていくのがわかるのに、もう熱いのか冷たいのか身体が感じる感触すらわからない。

「顔を上げてくれ。」
ゆっくりと視線を彼の顔に移動した。優しい目をしていた。僕が好きだと思ったのは彼の目だ。笑うと目尻に細かい皺が寄る。顔を近づけるほどの至近距離でなければわからない、この皺が好きだと思ったんだ。
「消えないか？」
僕は聞いた。
「俺が？」
「僕の前から。」
怖いと思っていても、もう僕は彼のすぐ側まで来てしまった。今、手を伸ばせば彼の手に触れる。そして、もう戻れなくなる。本気で人を好きになることを避け続けていても、もう彼に触れてしまったら、僕は落ちていくだろう。この恋に。
「消えるわけない。消えろと言われても、お前の側から離れたくない。」
落ち着いたしっかりした声で、彼はそう答えた。

ベージュがかかったモスグリーンの色が目に入った。その色が彼の家のソファの色だと、もう今ははっきり意識出来る。
？俺の部屋に来るか。？
雪の中で濡れた僕の背に手を回して、先輩が言った。黙って頷いた。

ソファを背にキスを受けながら、僕の身体は強張っていた。彼が好きなのは本当だけど、身体がうまく反応しない。女の子としか経験がないからどうしていいかわからない。
最初は恐る恐る僕の反応を確かめるように、小鳥のように小さく口を啄ばんでいた彼が、そのうち激しく唇を重ねてきて、熱い舌を滑らせてきた。ゆっくりと僕の口腔を探るように舌を這わせた後、舌を絡ませてきた。

息が上がる。心臓がすぐ側で音を立てていた。
彼の口が耳朶を食み、首筋へ降りてくると同時に、僕のジーンズのファスナーに手がかかる。
一瞬、身体が硬直する。が、次の瞬間には彼のもたらす快感に、身体全体の筋肉が弛緩する。ゆっくりと僕の中心を包み込むように彼の手が動くのがわかる。背後から僕を抱くようにして、手の動きを早める。思わず声を上げそうになるのを彼の口が塞ぐ。全神経がそこに集中するのを止めようすもなく、されるがままになっていると、腰の辺りに彼の屹立したものが当たっていることに気がついた。
急に怖くなった。これからこの身に起こることを予想して、身が竦んだ。だけど、後戻りは出来ない。僕らは手に手を取ってこの恋を選んだのだから。
「痛いから、息を止めるな。」
?息をしろ。?
耳元で彼が囁いた。低い声で優しく。
これは自分が望んだものなのだと思った。この痛みも、この肌の熱も。

20話

今まで、自分をごまかし続けてきた。間違いなんてあってはならない。それは恥ずべきことなんだと。でも、心の奥底でずっと欲していたものがあったんだ。

あの時、扶美を欲しいと言えたら、欲しいものを欲しいと言える自分であったら、、こんな苦しい思いを引きずることなんてなかったんだ。周りのこと、そうすることで引き起こるいろんなことを考えて、何も行動が出来なかった。そして、後悔の念がずっとつきまとい、苦しむ。もう、そんな日々を過ごすのは嫌だった。

悟が欲しい、そう言って後悔するのと、言わずに後悔するのとどちらを選ぶか。そうやって自分の内面を探るのはもう嫌だった。

そのことで、後で後悔してもいい。今、自分が欲しいものはそれだったのだ。

僕を抱きしめている彼の手が少し震えているのがわかった。彼も自分の意思に戸惑い、迷い、嫌悪したのだろう。僕と同じように。それでも、欲しいものをどうしても手に入れたかったんだ。お互い。

何故だろう。不思議だ。終わった後に、彼が自分の身体を僕の背に押し付けるように抱きかかえて言った。

「女の子としか寝たことはなかったけど、肌の温かみはどちらも同じだ。」

そう、僕も同じことを思っていた。男だから、女だから？何が違うのだろう。相手のことを愛しいと思うのはどちらも同じだ。

異性間の恋は生殖と種の保存がつきまとう。女の子とつき合うとき、結婚を意識する。意識しないやつもいるだろうけど、きっと恋の延長線上には結婚がある。結婚という共通のゴール、もしくはスタート地点に立つのを目的として、人は恋をするのだと思う。そして、結婚すると恋は形を変える。家族愛とか人間愛とかそういうの

に。
だから、真の恋というのは同性間でしか成り立たないものなのかもしれない。僕はいままで女の子としか恋をしたことがなかったから、この感情に振り回され、戸惑い、それを恐れてきた。そして、そういう自分に嫌悪したんだ。
でも、こうして同じベッドで、肌の温かみを感じているとそういうことがどうでもいいことのように思えてきた。翌朝になったら、僕は自分のしたことに嫌悪するかもしれない。それは彼も同じかもしれない。でも、今この時の僕は後悔しない。

目が覚めた。カーテン越しに薄暗い光がみえる。まだ、夜は明けていない。遠くの方でときおり車が走る音が聞こえる。部屋の中がぼんやりと夜明け前の光にさらされている。
ベッドに横たわったまま、部屋の中を見渡す。ベッドの脇のサイドテーブル。積み上げられた雑誌や、本棚に並んだいろんな書籍。部屋の脇のスタンドに無造作に引っ掛けられたジャケットやシャツ。
そんな物が薄暗闇の中でをぼんやり盛り上がって見える。

夢を見ていた。どんな夢だった？すぐほんの脇で彼の規則正しい寝息が聞こえる。
夢を思い出す。それは芙美と最後にあった時の夢。夢の中で僕は彼女の手を軽く握っていた。テーブルの上に置かれた2人の手。いつものようにじゃれて手を握った。その握った手をテーブルの上に置いたまま話をしていた。僕が言った。
「2人で会うのは良くないよ。」
「何故？」
「何故って芙美はつき合っている人がいるんだから。誤解されちゃうよ。もうこんなふうに会わない方がいい。」
それが僕の本心だっただろうか？いや、違う。
芙美はちょっと考えてから、言葉を選ぶように話しだした。

「だって、私たち友達でしょ。隆博くんは私のつき合っている人の友達ではなくて、私たちは独立した関係でしょ。」
「会わないなんて言わないで。」
僕は芙美の心情を量りかねていた。その時急に気恥ずかしくなって、自分から手を離してしまった。
その時、自分の気持ちを言えばよかった。どんな結果になったとしても、自分が芙美を好きなことを。芙美の気持ちをはっきり聞けばよかった。聡に対してもし、友情が壊れたとしても。自分の気持ちを素直に表せばよかった。でも、僕はそうしなかった。いつもどおり、友達面をして別れた。
あの時、彼女が食べていたのはミートスパゲティだった。サラダについていたパイナップルをじっと考え込んでフォークでつついていたことまで覚えているのに。
僕はその後、彼女を駅まで送った。
駅の改札口を通る時、彼女は僕を振り返り言った。
「隆博くん、電話してきてね。」
彼女は僕からの連絡を欲しがった。
「うん。」
そう短く答えた。彼女はいつもとは違う様子で名残惜しそうにもう一度振り返り、ホームへ消えていった。
それが最後だ。
その後、何度後悔しただろう。あの時、あの手を離さなければ良かった。僕らはじゃれて手を握ったりすることが何度かあったけど、芙美の手はいつもひんやりと冷たかった。なのにあの日に限って、火がついたように彼女の手が熱く火照っていたことを後になって思い出した。
すでに時は僕の後悔をあざ笑うように過ぎ去り、もう2度と取り返しがつかないことを、何度も脳に反復させるように眠れない日々が続いた。
だけど、僕はもう後悔しなくていい。そうだよね、芙美。

それからは楽しい日々が続いた。彼は４年生だからもうほとんど授業はなく、わりあい自由だった。就職のことや引越しのことなどの手続きで東京に行く以外はこちらにいた。乃理子さんは実家に出産のため帰ったきりだった。

それで僕らは都合のつくかぎり会っていた。前みたいに、くったくなくいろんな話をしたり、飲んだり、笑ったりした。前と違うのはお互い秘密を抱えてしまったことと、僕が彼を名前で呼ぶようになったことだった。

その日も授業が終わり、バイトのない日だったので、夕方電話を入れた。これから行ってもいいかって。そうすると、家にいるようだったが2、3時間後にしてくれと言う。

何？って聞き返すと、急な仕事が入って、と言ったきり一方的に電話を切られてしまった。訝しげに思って、仕事ってなんだろう？と思ったが、彼がいったとおり3時間程して彼のアパートに向かった。

21話

ドアをノックすると
「あいてるよ。」
返事がする。
部屋へ入ると、彼は机に向かって何か作業をしている途中だった。ネイビーブルーのコットンのセーターを着て袖を肘までたくし上げて、銀のフレームの薄い眼鏡をかけていた。
眼鏡をかけた姿なんて初めて見た。彫りの深い横顔に薄いフレームがよく似合って何だか知らない人みたいでちょっとどきっとした。
「ごめん。今、ＦＡＸ流したら終わりだから。」
「何？仕事って。」
「うん、これ。急に８時までにやってくれって電話が入って。」
その用紙を手にとって見ると翻訳の原稿だった。
「使用書？」
「そう。」
パソコンの付属品、ケーブルやＵＳＢの取り扱い説明書の訳したものだった。
「悟、こんなことしてたの。知らなかった。」
「２年くらい前からかな。ちょくちょく頼まれて。何もないときはないんだけど、急に原稿をあげてくれって言われる時がある。今日みたいにね。」
言いながら、ＦＡＸに原稿を流し込む。
「なんとか、間に合ったな。」
そういいながら携帯を手に取る。
取引先の相手みたいだ。仕上がって今ＦＡＸしたことを報告している。
「あと、郵送して終わり。」
「おまたせ。」

「うん。」
「どうした？」
「いや、すごいなあって。」
「これ？」
悟は原稿をひらひらさせた。

「だって、もうそういう仕事してるなんて。」
「アルバイトだよ。」
「実務翻訳は数が多いからね。２年ほど前に翻訳会社に登録しておいたら、ぼちぼち仕事をくれるようになって。製品の使用書やら説明書などのマニュアルが多いけど。」
「専門知識がないとむずかしいでしょ。」
「そうだな。金融とかコンピュータ関係、税や法律関係など専門があるやつは強いよな。」
「悟はパソコンやネット関係、詳しいからいいじゃん。」
「まあ、そういう関係のものが多いけど、前は何でも来てたよ。お菓子のパッケージからおむつカバーの取り扱い説明書まで。」
それを聞いて思わず僕は吹き出してしまった。おむつカバーだって。
「でも、これからおむつカバーなんてお世話になるじゃない。」
生まれてくる赤ん坊のことを指摘して、笑うと
悟はむっとしたように
「所帯じみるような話題はやめてくれ。」

ごめん。なんとなく気まずい雰囲気が２人の間に流れた。何となくタブーにしたい話題だ。これからのことを考えるとちょっと憂鬱な気分になる。ほっておいても赤ん坊は成長し産まれてくるのだから。こうしていられるのも期間限定か。それはわかっていて飛び込んだつもりでも本当は現実を見たくなかった。時間がくれば悟は東京へ行ってしまうのだ。家庭が待っている。

気を取り直したように悟が何か飲むかと聞いてきたので、ビールをもらうことにした。ビールを飲みながらその翻訳のアルバイトのことについていろいろ聞いた。

彼は僕と同じで出版翻訳をしたかったらしいんだけど、この世界では２０代なんて箸にも棒にも引っかからない。３０、４０代でやっと駆け出し、５０代になってやっとこさ一人前。それでも出来る人はほんのわずか一握りだ。本の表紙に『訳・誰それ』なんて自分の名前が載るなんて夢のような話だ。

それに比べて実務翻訳は門戸が広い。医薬品から金融、パソコン関係など商品全般の説明書や取扱書、いろんなマニュアル、会計、税理関係の書類の訳やいろんな仕事がある。

専門的な知識がないと専門用語を訳すだけではアウトだ。彼はコンピュータ関係に明るい。ソフトの使い方はもちろん、ハード関係にも通じ、ネット、インフラ、情報工学すべてに通ずる。どこでそんな専門知識を得たのだろう。この文系の学校で。不思議な人だ。

それでぼちぼちその方面の仕事をもらえるらしいけど、そうでないと登録している人なんてごまんといるけど、アルバイトのようなちょっとしたものでも実際仕事をしている人なんてほんのわずかだ。

それだけに専門知識もあり、迅速に仕事が出来る人に集中する。難しいのはわかっていたから彼はすごいなあと感心したんだ。学生なのに。

「それでも出版翻訳に比べたら仕事も多いし、門戸も広い。やろうと思えばやれんことはないよ。何事も勉強だからね。いろんなことしておかないと思って。」

でも、コース外れちゃったからねと、彼はため息をついた。生活の為に外資系の会社に就職したことをいっているのだ。どの部に配属されるかわかんないから営業やってたりして、なんて笑った。

ふっきれたのだろうか？なかなかふっきれるものではないよな。

「隆博。お前やってみんか。」
缶ビールを一気に飲み干した後、急に悟が言い出した。
「え？」
驚いて聞き返すと、もう来年には卒業して東京へ行ってしまうので、辞めることを担当のコーディネーターに話すと、代わりに誰か出来る子がいないか聞かれたという。
「えー。自信ないよ。」
「まず、やってみたら。」
「でも、悟みたいに専門知識ないし。」
「よく言うよ。お前だってコンピュータ関係強いんだろ。」
確かに好きでパソコンは良く使うけど。でも、と考えていると
「とにかく、また考えてみろよ。俺も教えてやるからさ。」
「うん。」
「しかし、集中してやると目が疲れるな。」
眼鏡をはずし目の周りをマッサージし始めた彼を見て、
「悟が目が悪いなんて知らなかった。」
「お前の前で眼鏡かけてたことなかったけ？」
「うん。」
「車を運転する時と、夜だけな。昼は見えるんだけどな。俺、鳥目かな。夜なんか作業する時にな。よく見えん。」
ああ、車を運転したところを見たこともなかったし、夜も飲み屋さんでしか会わなかったから。
「何乗ってるの。」
車種を聞こうとしたら、何か思いついたような顔をして
「乗せてやる。ドライブしよう。」
と言う。
「え、今から？」
「鳥目でしょ。見えるの？」
「うるさい。」
大丈夫かなあ、心配する僕を尻目に、やはり先輩面してさっさと

身支度を済ませ、キーを手にする。

22話

階下にある駐車場へ下りていくと悟が車を出してきた。
白のレガシーツーリングワゴン。３００はするよなと思いながら助手席に座る。
「いい車だね。」
「親父のお古さ。」
彼の父親は社名を聞けば誰でも知っているような大会社の重役だ。
やはり金持ちの坊ちゃんだな、僕も兄貴のお古だけどだいぶ前の型のレビンだ。この車とは大違いだ。
「学生にしてはたいそうなのに乗ってると思ってるだろ？」
「わかった？」
ちょっと意地悪く言うと、
「ふん。親父には金を使わせておけばいいんだ。そのくらいしか子供にしてやることがないと思ってるみたいだからな。」
苦々しく言い放ったので、彼は父親とうまくいっていないのかなと思ったが、人には家庭の事情がいろいろあるだろうしと聞き流しておいた。

「それでどこに行く？」
「江島は？」
「高速？」
「そうだな。宮尾のＩＣから乗るわ。」
そういって彼はすぐ近くのＩＣから高速に乗った。ＥＴＣのレーンを通り過ぎる。夜８時をまわっているから車は少なかった。それに今日は平日だし。そう思っていると、夜間を徹して荷物を運ぶトラックが多く走っていた。
「鳥目大丈夫なの？」
「まんだ言ってる。」

「大丈夫だ。見えてるよ。」
「心配なら替わるか？」
「いや、いいよ。まかせる。」
「そう。」
馴れてる。しかも鳥目といいながら夜間の高速を１４０ｋｍは出してる。
「ＣＤ好きなのかけて。ダッシュボードの中。」
そう言われてダッシュボードを空けてＣＤを物色する。ジャズ、映画のサントラ、洋楽、ＪＰＯＰ…。
「雑聴だね。」
「何それ？」
「ジャンル多すぎ。なんでもあるよ、演歌以外。」
あはは、と笑って彼は自分の物以外もあるから、乃理子がいろんなジャンルの音楽が好きだからと言った。
ああ、そうか彼女の趣味もあるんだ。僕はその中からＭｏｎｋｙＭａｇｉｃを選んだ。
これは？と聞くとそれは俺の趣味と答えた。
「でも、何で今から江島？」
「夜の海、いいでしょ。」
「はあ、意味ないよ、今から行ったって。真っ暗だし。」
「だから、時々そういう意味のないことをするのがいいの。ストレス解消。」
「そうかなぁ。」
「隆博はな、そういう意味のないことはしないっていうのね、なんだっけ合理的主義か。意味のないことにすごい意味があるかもしれないし、その時はわかんないけどな。無駄な時間も必要だよ。お前固いからな。もっと人生楽しめ。」
ま、確かにそうだな。自分の内面をぐさりとやられても、悟が言うとそうかなあ、なんて素直に思ってしまう。他人に自分のことを言われるのは嫌なんだけど、彼にはそうは思わない。ただ、時々も

う少し口が悪いのを何とかならないのかと思うだけだ。
「そういう悟も突拍子もないことをするとこが子供っぽいんだから。」
そう言うと、違いないって笑い出した。
彼とこういうやりとりをするのは好きだ。心が通じる、気心が知れるってこういう感じ？なんだか嬉しくなってしまう。

宮尾のＩＣから江島までは高速で２時間半。でも悟の運転だとたぶん２時間くらいで行っちゃうだろう。僕らの街からいちばん近い海岸線。里佳子ちゃんとも一度ドライブに出かけた。
里佳子ちゃん…。あの日以来会ってないな、と最後に会った時のことをふっと思い浮かべた。
扶美のことを言われた。忘れられない子がいるんだねって。でも彼女は健気にもその子のことを忘れるまで待っていると言った。だけどその時、僕は扶美とは別の自分の本当の気持ちに気づいてしまったんだ。
ハンドルを握る彼の横顔をちらりと覗き見する。そして、視線をすぐに前方の車のテールランプに戻す。
でも僕はその気持ちに気づきたくなくて、反射的に彼女を抱きしめ、キスをした。曖昧な自分。この状態をどうやって彼女に説明しようか。僕は逃げていた。あれから彼女の誘いを曖昧に断っているばかりだ。あんな行動に出た僕の気持ちを量りかねているに違いない。どこかでちゃんと話をしなければ。それ以前に自分の気持ちをちゃんと整理しておかなければ。
やらなければならないことはわかっていた。このままでは駄目だ。だけど悟といる時間が楽しくて、その時その時を楽しむことに夢中で、面倒なことを先延ばしにしている自分がいた。
「何考えてる？」
物思いにふけっている僕に気付いて悟が聞いた。

「別に。」
ごめん。僕の悪い癖だ。人と一緒にいる時につい他のことを考えてしまう時がある。健二にも言われた。その時を楽しんでいないって。熱中してないってね。
「何でもないよ。」
里佳子ちゃんには悪いと思いながら、僕の気持ちはすぐに彼と一緒にいられる時間を楽しむことに切り替えられた。
あれこれいろんな話をし、ＣＤを取替え、好きな音楽の話をした。
途中で彼が怖い話をしよう、などと言い出し、高速道路を走っている時にルームミラーに血まみれの女の顔が移る話などをし始めたので、僕は嫌がった。なのに、僕が嫌がると妙に嬉しがってどんどん話し続けるのだ。彼は怖い話が大好きで、夜遅い時間に会っていると必ず、ひとつふたつは話し始めるんだ。この癖だけはどうもいただけない。
あっという間に車は江島のＩＣに着き、彼が途中で買い物をしようというので、ＩＣを降りてすぐに目に留まったコンビニに入った。
何を買うんだろうと思っていると、コーヒーやタバコ以外にウィスキーのビンやチーズやらオイルサーディンの缶詰やら買いだした。
「何？暗い浜辺で宴会でもするつもり？」
「よくわかったな。」
と嬉しそう。
まじ？このくそ寒いのに。海まで走ったらその辺の２４時間営業のファミレスで軽い物でも食べて帰るかな、なんて思っていたらそんなこと言い出すんだもん。
僕の思惑を無視し、ハンドルを握った彼がそのまま江島の海水浴場まで走って行き、砂浜に車を乗り上げた。
それを見て僕は
（ああ、せっかくのレガシーが砂まみれ。なんてもったいない車の使い方するんだよ。）

心の中で悪態をついたが、彼は全く意に関しない。そして車のエンジンをかけたまま、車のライトを頼りに、その明かりの中で何やらその辺にある流木を集め始めた。
人気のない砂浜。時間はとうに12時を過ぎている。警察でも回ってきたら不審者で取り調べられそう。あっけにとられて突っ立てると、
「何やってんだ。隆博。火を焚くんだよ。」
はあ、よくわからんなあこの人。
しぶしぶ流木を集めるのを手伝い、集めた流木を積み上げると、車のトランクから何やら取り出した。見ると、着火材と小型のガスバーナー。キャンプやバーベキューなんかで使うヤツだ。
「なんでそんなの持ってんの？」
「ああ、いつも積んでる。」
そういえばこの人、放浪する人だった。前、聞いたっけ。日本全国、端から端まで旅した話。ルンペンさんに間違えられたり、不審者で取調べを受けたことなどおもしろおかしくしゃべるのを聞いた覚えがある。
「いいだろ。椎名誠の小説にこういう道具を積んで放浪する話があってな。鍋やら釜やらを積んで北へ北へと走るんだよ。あれ、おもしろくてやってみたくてな。」
「で、今日は何？」
「あ、呆れてる？」
「別に。」
「別に、別にか。おまえほんと可愛げないな。つきあえよ。」
まるで小学生だ。不審火を起こして掴まらなきゃいいけど。
悟はそんな僕に構わず、器用にガスバーナーを使い、あっというまに流木に火を起こした。焚き火がぱちぱちと燃え出す。
「大丈夫かな？」
「何が？」
「不審火を起こしてるって警察とか来ないかな？」

「もう、夜中だ。寝てるだろ。」
そういう問題か。
「民家からは離れているし、シーズンオフだ。問題ないだろ。」
確かに。この海水浴場は江島のいくつかある海水浴場の中ではあまりその名前を聞いたこともない小さな海水浴場で、メインの海水浴場からはちょっと離れている。周りに民家や店もなく、まるでちょっとした離れ小島だ。
むろん、海の家などもない。もっとも冬だからね、あっても閉まってるけど。
「ああ、でもなんてくそ寒いんだ。」
手が凍りそうだった。風もさほど吹いていないとはいえ、１２月の真冬の浜辺はきつかった。ありったけの服を着、マフラーを巻いていても寒くて震えがくる。
僕が悪態を付くと
「すまん、すまん。ほら火にあたれよ。」
彼はちょっとすまなさそうに笑った。
砂浜は真っ黒な暗闇に包まれて何も見えない。建物の明かりや道路の明かりが遠くに見える。僕らが起こした焚き火の火だけが赤々と燃え、静まった砂浜には波の音だけが響いている。
タイヤが半分は砂浜に消えているレガシーが悲しそうにこっちを向いていた。

23話

僕らは火に当たりながら、ウィスキーを交互に回し飲みした。むろんロックだ。水も氷も無いからね。でも、それがかなり効いた。寒さと海の冷たい風でやられていた体が芯から、かーっと熱くなってきた。チーズを食べ、オイルサーディンの缶を空けた。

何故か彼はマシュマロなんか買ってきたみたいで、その辺に落ちている木を細くナイフで削り、マシュマロを刺して火にあぶりながら食べ始めた。おいしいのそれ？って聞くとあぶって溶けかけたところが美味いなどという。焦げて煤で真っ黒になってるのを、無理やり口に押し込まれた。ま、食べてみると美味いかな。

「ほらスヌーピーの漫画であるだろ。こういうの。」

どっかの洋画でこんなシーンならみたことあるかな。カウボーイが羊の晩をしながら焚き火の側で食事を取るシーンだった。

「ぷっ。スヌーピーの漫画だって？」

僕は吹きだした。

「妹が好きでね。妹が持っていたのを子供の頃読んだんだ。スヌーピーがウッドストックとキャンプをし、こうやってマシュマロを火であぶりながら食べるのが美味しそうで、どんな味がするんだろうって。1回やってみたかったんだ。」

やはり相変わらず子供っぽいとこがあるんだから。

「妹がいるの？」

「ああ。」

兄弟の話なんて聞いたことがなかった。親のことも、家族のことはあまり話さない人だ。

「妹と弟がひとりずつ。」

「一番上？」

「そう。」

「弟は年子だから大学生3年。妹は高校生だ。」

それがきっかけで僕らは家族の話をした。僕の家はたぶんごく普通の家庭だと思う。両親に兄貴がひとりと、妹がひとり。兄貴は社会人で結婚もしているし、妹は高校生だ。

兄貴は普通のサラリーマンでごく一般的な人だと思う。学生時代は野球をずっとやっていて、高校も野球の強いところへ行ってまあまあ頑張っていたんだけど、甲子園までは出られず、兄貴もその辺で諦めたのかな、普通に大学を出て普通に就職した。彼は野球で食べていきたかったと、飲んだ時に僕に話すことがある。今は、会社の野球部に属し、地域の子供らに野球を教えている。結局好きなことはやめられないみたい。

妹は私立の高校に通う、これまたごく普通の女子高生だ。最近の女子高生は派手な子が多いみたいだけど、妹はどちらかというと地味な方で、まだ幼い。吹奏楽部に属し、部活が忙しいみたいで、休日もあまり家にいない。

両親はというと、父親は自動車のディラーでずっと営業をしていて、年相応にそこそこ出世もして何とか安泰だし、母親は近所のスーパーに長年パートで勤めながら僕らを育ててくれた。家族みんな仲がいいし、今はそうでもないけど子供の頃は休みの日には、よく海や公園に家族で出かけた。

僕は大学に入って出たっきりだから、月に1、2回は家に帰ってくるようにと母親がうるさい。それでたまに週末家に帰り、兄貴の家族と妹と両親でご飯を食べる。そういう家庭だ。

彼が自分の家のことをあまり話さないのは何故だろうと思っていたのだが、聞いてみるといろいろ確執があるらしい。父親は有名な大会社の重役であることは周りの者はみんな知っているけれど、それ以外のことはあまり聞いたことがない。

彼が僕に話してくれたのは、妹は可愛いらしいが、弟とは何かいろいろあるらしい。

父親が厳しい人で、割と自分の考えを押し付けるタイプらしい。幼少の頃から躾や勉強に厳しく、子供を自分の思い通りに育てたいという思いが前面に出ていたらしい。

そうすると、思いつく展開はそれを嫌がって反発するか、もしくは、そのとおりに父親の理想像のような大人しい子供になるかのどちらかだ。

どうも、前者が悟で、後者が弟らしい。聞いてびっくりだけど、高校生になった時、どうにも親の監視が嫌で、家を飛び出したらしい。母親はそんな父親にあまり口答えも出来ず、ずっと従ってきたような大人しい人らしい。

「それで？どうしたの？」

「中学生の頃から、親父が嫌で、そんな親父にへつらうように大人しく従っている弟が鼻について、絶対高校になったら家を出るんだと思って我慢していた。高校に行かず働いて家を出るっていったら鼻がひん曲がるくらい親父に殴られたよ。」

「やつは自分の敷いたレールを歩かせたいんだ。それがわかっていたから、どうしても反発してやりたかったんだ。それで家出した。でもこれは2週間ほどで連れ戻されたけどね。必死で勉強して、高校は特待生で入った。アルバイトをこっそり探しておいて高校1年の時、また家出した。何とか自分で食べてやっていけないかって頑張ったけど、これも連れ戻された。そんな時、母親の兄貴が、つまり俺の叔父にあたる人が、そんな状況を見かねて俺の後見人をかってでてくれたんだ。優しい人でな。子供がいないせいか俺のことを息子のように思ってくれていて、小さい時からあれこれと俺ら兄弟の面倒を見てくれた人で、この人には俺も懐いていて、信頼していた。」

「その叔父さんは？」

「もちろん、今も健在だし、今も俺の後見人。親父とはほとんど絶

縁状態でな。」
　僕は砂浜に埋まったレガシーを見て、
「でも、あれは親父さんに買ってもらったって。」
「うん。最近、ここ1年くらいかなあ。だいぶ親父も丸くなって、俺が結婚するんだって聞いてから優しくなって、勝手に車を寄越したり、電話してきたり。少しずつだけど。そんな感じ。たまに、家にも帰るよ。ホント、たまにだけど。」
「そうなんだ。」
　だから、家族の話をするのを嫌がったんだ。
「叔父さんが後見人を努めてくれたおかげで、高校も卒業出来たし、大学も入れた。感謝している。」
「叔父さんと一緒に住んで？」
「いや。確かに援助もしてもらったが、バイトしてひとりで住んで卒業した。だいぶ、わがままさせてもらったよ。自分が父親になろうとしている今、何をいろいろ反発してたのかなあって。今になって親父の気持ちも少しはわかるような気がするよ。」
「たぶん感情表現が下手なんだね。親父さんは。一生懸命なりすぎるのかな。子供に対して。」
「そうかもな。」
「でも、隆博はいい家族に恵まれて幸せだな。」

　焚き火がゆらゆらゆらめいて、火に照らされた彼の顔に笑顔が浮かんだ。優しそうな笑顔だ。そしてやっぱり寒いだろうと言って、車から毛布を持ってきて僕にかけてくれながら、
「だからかな、おまえといるとほっとするよ。」
　そんなふうに言われると少し照れてしまう。僕こそ、一緒にいられて嬉しい。みんなが憧れる素敵な先輩。こうして2人で一緒にいられて、自分の内面の話までしてくれるなんて信頼されているみたいで嬉しい。
「こうしていられるなんて嘘みたいだ。隆博は俺のことを受け入れ

てくれるわけないって思っていたから。」
彼はばつの悪そうな顔で俯いた。あの時のことを言っているのだ。
「…聞いてびっくりした。最初は。あんなことを言われるのは、初めてで、それに。」
僕は口ごもった。告白された後、彼を受け入れるかどうかかなり迷ったことを思い起こした。
「うん。すまない。」
悟は押し黙ってしまった。話題を変えようかと話を振ってみるが、なんだか上の空みたいだ。何か言いたいことがあるのかな？
「どうかした？」
「俺さあ。」
思い切ったように口を開いた彼が一気にまくし立てた。
「俺さあ、そういうの、本当は一番認めたくなかったことなんだ。」

24話

（えっ？）

？そういうの。？

彼が僕のことを好きだと言った晩の事を思い出した。

彼が口ごもって言いにくそうにしているのは、僕らの関係のことだとすぐにわかった。迷いながら来た。そして今もこうやって一緒にいるのにどこかで迷っている。その感覚は僕にもわかるような気がした。だけど、それについて何かを答えてやれるかというと、何も言えない。

僕は座っている脇の砂を手に掴んだ。

気まずい雰囲気が流れ、僕は口も聞けずにいたが、彼は構わず一気に話を続けた。

「高校の時、部活でラクビーをやっていた。結構強くてな。いろんな大会へ。いいところまで行ったんだ。練習も厳しくて上下関係も厳しくてな。でも、いい先輩がいっぱいいて、部活以外でもいろんなこと教えてもらって、そういうの楽しくて。大会が終わると、飲むんだ。打ち上げ。その…2年の時かなあ。打ち上げでしこたま飲んで、酔っ払った先輩が自分の部屋で飲もうって。その先輩、親元から離れてひとりで下宿していて。好きな先輩だったんだけど、かなり酔ってたんだろうなあ。」

そして少しの間口をつぐんで、意を決したように言葉を続けた。

「やられちまったんだ。そん時。」

びっくりして何も言えなかった。

「ショックでだいぶ長い間立ち直れなかったな。その後、そういうの忘れたくていろんな女の子とつき合った。全く手当たりしだいだな。」

そして暗い海の方へ視線を向けて

「お前も知ってるだろ。複数の女の子とつきあってたこと。節操な

いな。俺。お前にまであんなこと…。」
自分を否定していじめているみたいだ。
「そんな言い方・・・」

「いろんなこと考えた。俺、そっちの世界の人間なのかなあって。高校の時そういうことがあって、自分が自分で嫌になって普通の世界の人間じゃなくなってしまったような気がして、忘れたくて。でも、結局お前に同じことをしてしまった。嫌で嫌でしょうがないのに、本当は俺はそういう人間なのかなあって。今でもわからない。」
（僕だってわからない。）
（問われたらどう答えていいかからない。扶美のことをずっと忘れられずにいた。今だって忘れていない。なのに里佳子ちゃんとも切れていない。悟のことは好きだ。それは間違いない。だが、今まで女の子にしかそういう気持ちは抱かなかった。）
返答に困って、彼の肩に手をかけると、
「でも、隆博が受け入れてくれて嬉しかった。認めたくないって思いながら、それでも自分の気持ちをどうすることも出来なかったし。どうしていいかわからなかった。隆博が受け入れてくれなかったら、多分俺駄目になってたかもしれん。」

彼が小さな子供のように見えた。少し震えて、自分の気持ちに戸惑い、自分で自分を否定して、そして救われようとしているような幼い子供に。
彼が僕の目を見た。悲しそうな不安そうな目。
衝動的に自分の口を思いっきり彼の口に押し付けた。その反動で僕らは砂浜に倒れた。髪の毛や服に砂がつくのも構わず、むちゃくちゃに口を押し付けた。いきなりキスをされて息が出来ず、むせて咳き込む彼を押さえつけるようにして、何度も何度もキスをした。歯が当たる音がして、唇が切れて血が出てるのがわかったけど、構わず僕らは砂浜を転がるようにして抱き合った。

そうしたかった。そうせずにはいられなかったんだ。
僕らは落ちていこう。それがどこかはわからないけど。もう、ひとりにはさせない。
悟は何も言わなかった。放心したように僕にされるままだった。
波の音がした。砂まみれになった僕らは、何も言わずにじっと長い間そのままの格好でいた。焚き火が燃えるぱちぱちという音を遠くに聞いた。

何が正しくて、何が悪いのか。その基準はじつに曖昧だ。世間ではタブーだとされていることが本当は善なのかもしれないし。良いこととされていることが人間の心を蝕んでいくこともあるに違いない。
僕らはその境界線にいた。このままここに留まることはふたりにとってはマイナスになることかもしれない。
マイナス要因とは、世間一般にいわれるタブーとされることを僕らは共有してしまったのだ。
僕らに時間はない。少しずつ、少しずつ、時間がせまっていた。
僕らはそのことを忘れるように、忘れたいがために、時間の許す限り一緒にいた。じっと毛布に包まって、お互いの体温を感じながら冬の夜があけるのを待った。
一緒にいて何になる。体を重ねてそれが何になる。前の僕はそう思って自分の心を封印していたけど、今はそれだけを心が欲してることだった。
ふたりでいると何もかも周りのことを忘れてしまう自分がいた。悩みがあるなら話せと言ってくれた裕樹の顔も健二も、学校の授業のことや将来の夢さえ意識の外にあった。このことが後になって僕らをどう変えてしまうか。心にどんな影響を与えるのか、何もわからなかった。今、ここに彼がいることだけが僕の心に充足感をもたらしていた。
芙美のことだ。自分の気持ちに素直になれず手放してしまったも

のの大きさに後悔をして、月日を過ごしたことを考えた。欲しいものを欲しいということによって、失うもの。それは必ずあるだろう。夢を見ている渦中の者にはそれが何なのか、どのくらいのものなのか推し量ることは出来ない。すべて、夢が覚めたときに見えてくるものだから。

だけど、僕はその失くしたものの多さや大きさを見て、恐怖するだろうけど、でも欲しいものを欲しいと言ったことに関しては後悔しない。絶対後悔しない。悟もそうだと思う。ずっと、僕らが欲していたものはきっと同じものだったに違いない。

どうもあの晩以来、ふたりして風邪を引いたらしかった。

当然といえば当然だな。酔っ払っているうちはいいが、酔いが覚めた途端、冬の海の寒風にさらされ芯まで冷えて、おまけに砂浜に転がっていたんだから、風邪を引いても当たり前といえば当たり前の展開だ。

店内に心地良いジャズの音色が満ちている。

僕が鼻を啜りながら客のオーダーを聞いていると、オーナーが何してて風邪引いたんだと、聞いてきた。

僕は顔が赤くなった。まさかこのくそ寒いのに、海辺で遊んでたなんて言ったら怒られる。オーナーは半分親代わりみたいなもんだから。親元を離れている僕の監視役だ。父親と彼は友人で、ここへバイトさせておけば安心だろうという母親の目論見は充分感じられた。

湯冷めしたみたいだと適当に返事をして、オーダーされたカクテルを客のテーブルへ持っていこうとしたら、ドアのチャイムが鳴る音がして客が入ってきた。

「いらっしゃいませ。」

振り向くと悟だった。

「いやあ、いらっしゃい。さ、こっちへ。」

オーナーの方が嬉しそうにカウンターへ手招きする。それを見て

僕はちょっとむっとした。
僕の客なんだけど。
そうなんだ、最近オーナーは彼がお気に入りみたいだ。どうも、音楽にも（何にでも秀でていると感心するばかりだが）詳しい悟とは話が合うみたいで、ジャズのことから始まって、いろんな話で盛り上がるみたいだ。だから彼が来るとオーナーは嬉しそうに話し込むので結局、僕に会いに来てくれたのにほとんど僕とは話らしい話も出来ない。だって、僕が客の相手からカクテルまで作らないといけないんだもの。オーナーが話し込んでしまって動かないからだ。
悟は、今日は薄いグレーのシャツに、黒のウールのジャケットを着ている。
「どこへ行って来たの？」
小声で聞くと、聞こえなかったらしい。
「なんや。」
目尻に皺を寄せて笑顔をこちらに向ける。その表情にどきっとした。
よそいきらしい服を指差すと
「ああ、用事があって東京へ行って来たんだ。」
それでか。いつもジャケットなんて着ない、ラフな格好の方が多いので、もの珍しくじっと見てしまう。彼は背が高くて肩幅もあるので、ジャケットを着るととてもよく似合った。
オーナーもそう思うらしく、今日は男前だね。いつもよりもね。なんて言いながら、いつも彼が飲むソルティドッグを作りはじめる。
東京へ行ったことをそれ以上詳しくは聞かなかった。彼には彼のもうひとつの生活があるし、いろいろと用事があるらしいがあえて詳しいことは彼も話さない。
「すみません。」
背後で客が呼ぶ声が聞こえた。応対に出て戻ると、やっぱりオーナーと悟は何やら楽しそうに話をしていた。

「オーナー、ギムレットとサイドカー。」
注文すると
「隆博、作れるだろ？」
僕に任せる気だ。ここ最近いつもなんだから。しょうがなくシェーカーを振る。そして、それからずっとオーナーは腰を落ち着けたままだったので、諦めて僕は客の応対に追われていた。むすっとしたのが表情に出てたのかな。トイレに立った悟が僕の側に来て、
「むくれるなよ。後でうちで飲みなおそう。」
と囁いた。

25話

今日は客の入りが良く店内も華やいだ感じだ。クリスマスが近く、店内にはツリーが飾られ、電飾の飾りや窓辺に並んだポインセチアの赤が華やかな雰囲気を醸し出している。ここの店の客層は男性客が多いが、最近は若い女の子やカップルも目につく。

客の応対に追われながら、ちらちらとオーナーと彼の方に目をやると、オーナーが何かを彼に頼んでいるようだ。それに対し悟が、出来ないとでもいうふうに手を振って困った顔をしているのが見えた。

（何だろう？）

そう思っても僕は忙しくその話の輪に入れないので遠くから見ていると、悟がしょうがないなあとでもいうふうに肩をすくめ、オーナーに追い立てられるようにピアノの方へ向かうのが見えた。

（ピアノ？）

実は店の奥にはちょっとしたステージがあって、グランドピアノが置いてある。

ここ最近はやってないんだけど、前は歌い手さんを頼んでジャズっぽいのや古い映画に使われたムーディな曲を（これはオーナーの趣味、？カサブランカ？でハンフリー・ボガードがピアノを弾きながら歌う？Ｔｉｍｅｓ　ｇｏｅｓ　ｂｙ？とか）ピアノで演奏しながら歌ってもらったりしていた。

以前来てもらっていたクラブ歌手の女性が故郷へ帰るから、と辞めていった辺りから、どうもオーナーのお眼鏡にかなう歌い手さんがいなくて、そのままピアノは埃をかぶったままだった。それでも時々は僕が掃除して、オーナーが調律もしていたので、たぶん使えると思うけど。

何でオーナー自分でやらないの？と聞いたことがあった。だって

一回レイ・チャールズをやったのを聞いたことがあって、ものすごくうまかった。でも、オーナーは俺が歌手になってしまったら店のことは誰がするんだ？って言って、聴くほうがいいなと呟いた。それっきりだ。

悟がピアノの前に座った。

（弾くのかな？）

そう思ってオーナーの方を振り向くと、彼は腕を組んで満足げに悟の方を見守っていた。

鍵盤をたたいてちょっと音を合わせていた彼が、おもむろに鍵盤に指を滑らせながら歌い始めた。

Ｏｈ　Ｄａｎｎｙ　Ｂｏｙ　ｔｈｅ　ｐｉｐｅｓ　ｔｈｅ　ｐｉｐｅｓ　ａｒｅ　ｃａｌｌｉｎｇ
Ｆｒｏｍ　ｇｌｅｎ　ｔｏ　ｇｌｅｎ　ａｎｄ　ｄｏｗｎ　ｔｈｅ　ｍｏｕｎｔａｉｎｓｉｄｅ
Ｔｈｅ　ｓｕｍｍｅｒｓ　ｇｏｎｅ　ａｎｄ　ａｌｌ　ｔｈｅ　ｒｏｓｅｓ　ｆａｌｌｉｎｇ
Ｉｔ’ｓ　ｙｏｕ　Ｉｔ’ｓ　ｙｏｕ　ｍｕｓｕｔ　ｇｏ　ａｎｄ　ｌ　ｍｕｓｔ　ｂｉｄｅ

へえ。僕は感心した。彼の甘い歌声に。こんな特技があるなんて知らなかった。人前で歌うことなんて苦手そうなのに。

カウンターに戻りオーナーの顔を見ると、

「ダニーボーイか。いい声してるね。」

「何でもいいから好きなの一曲やってって頼み込んだんだ。」

歌っている彼を見て、映画？メンフィス・ベル？のハリー・コニックＪｒ．を思い出した。ダニーボーイはアメリカの古い古典でロンドンデリーの歌詞を変えたものだ。

ハリー・コニックＪｒ．はジャズボーカリストでこの映画でデビューを果たした。

映画の中でのハリーの役は、第2次世界大戦中の１９４３年にナチスドイツの軍事基地を攻撃するため、イギリスから飛び立つ「Ｂ－１７爆撃機メンフィス・ベル」に乗り込む若い兵士の役。その彼が兵士の慰安パーティで白けた場を救うために、飛び入りでステージに上がり歌うシーンがあって、その時彼がピアノを演奏し歌ったのが「ダニーボーイ」だ。甘い歌声と現役ジャズボーカリストの彼の歌にため息が出るような素敵なシーンだった。古い映画だけど映画の好きな母親のデッキにあったのを観たことがあった。

……Ｓｕｎｓｈｉｎｅ　ｏｒ　ｉｎ　ｓｈａｄｏｗ
Ｏｈ　Ｄａｎｎｙ　Ｂｏｙ，　Ｏｈ　Ｄａｎｎｙ　Ｂｏｙ
ｌ　ｌｏｖｅ　ｙｏｕ　ｓｏ．

最後のフレーズの“Ｄａｎｎｙ・・・”と歌うところで彼と目が合った。

キイから目を上げたほんの一瞬。視線をふっと横に流すような動きがなんだかセクシーでどきっとした。

映画の中でのハリーもこのフレーズのところで、ダニーという仲間の若い兵士にじっと流し目をするシーンがある。そのシーンを思い出して僕はひとりでにやにやした。彼もあの映画を観たことがあるんだろうか。

「何にやにやしてるんだ。隆博。」

オーナーに声をかけられてどきどきしながら

「メンフィス・ベルって映画知ってます？」

「いや。」

「ハリー・コニックＪｒは？」

「ああ、知ってるよ。ジャズボーカリストだな、彼は。」

オーナーにその映画にハリーが出ていて、ダニーボーイを歌うシーンがあるのだと説明すると、なるほどね。とうなずいた。

あちこちで若い女性客が悟のことを囁いていた。
“うまいわね。彼。”“素敵、声がいいわ。”
近くのカウンターに座っていた女の子が僕の袖を引っ張った。
「彼ここのスタッフ？新しい歌手を入れたの？」
「いえ、スタッフでも歌手でもないですよ。あれ、僕の先輩。」
「へえ、プロなみね。」
女の子は彼に熱い視線を送っている。僕は鼻が高かった。
「しかし、うまいですよね。彼にこんな特技があるなんて知らなかった。」
「特技っていうか、これで食ってたらしいよ、彼。」
「えっ？」
驚く僕に説明しようとオーナーが口を開きかけたら、ちょうど曲が終わった。ステージの方に視線を向けると、ピアノから離れようと席を立った悟を、近くの席に座っていた女の子が2、3人彼を囲んで何やら頼み込んでいる様子だった。悟は困った顔をして首を振っていたが、あんまり熱心に女の子たちが頼むので、うんうんと頷きながら彼女たちが言うことを聞いていた。
「リクエストかな？」
オーナーが見ていると、悟がこちらに人差し指を立てて合図していた。
「もう一曲か。」
オーナーが頷きOKのサインを出すと、
もう一度ピアノの前に座った。

I’m walkin’, yes, indeed.
I’m talin’ about you and me.
I’m hopin’ that you’ll come back to me.

さっきとは違って、ちょっとアップテンポなメロディ。

彼が歌いだすと周りの女の子たちが黄色い歓声を上げた。

「ジャズ？」

知らない聞いたことのない曲だ。

「古い曲だね。ファッツ・ドミノの？Ｉ，Ｍ　ｗａｌｋｉｎ，？だ。悟くんよくこんな曲知ってるね。いくつだ？彼。」

オーナーは感心するように僕に説明してくれた。ニューオリンズ生まれのピアニスト兼歌手のファッツ・ドミノの１９５７年の大ヒット曲で、Ｒ＆Ｂを代表する一曲。アップテンポな楽しくなるようなメロディに、わかりやすい歌詞。すぐにメロディを覚えられそうだ。

深みのあるハスキーな彼の甘い声にうっとりした。オーナーもひとこと「惚れるねえ。」と満足げだ。細い指でキイを叩き、マイクに向かう。ときおり前髪をかきあげながら歌う彼がとてもセクシーだ。

僕は店の壁にもたれながらその様子をじっと見ている。女の子たちが彼の歌う姿をじっと熱い眼差しで見ている。彼はそんな周りの様子など意に関しない様子で、自分の世界で音と遊んでいる。外では見せない子供のような無邪気な楽しそうな表情。リズムに身を任せて、音にすべてを委ねている。僕はじっとその表情を見ていた。

この時間も過去になっていくのだろう。人間の記憶なんて実に曖昧だからね。今この瞬間の悟の表情も、その着ている服も、奏でているピアノの音も、後で思い出そうとしても細かい部分まではもうしっかりとは思い出せないようになってくるだろう。もうこのままここで止まって欲しいと思うような瞬間でさえ、すでにそう思った瞬間に過去の物になっていくのだ。

26話

What you gonna do when I say goodbye.
All you gonna do is dry your eye.

I'm walkin' yes' indeed.

最後のサビの部分に入る。その時、ドアのチャイムが鳴って客が入ってきた。

「いらっしゃいませ。」

2人連れの中年の男性客。一方のちょっと小太りな男性客が悟の方を見て、おやっという顔をした。　知り合いかな？

カウンターしか空いていなかったので、カウンターでよいかと聞くと、それで結構だと頷いたので2人をカウンターへ案内した。小太りな方が連れの客へ何やら囁き、悟の方に目をやったので、連れの客も首を回して悟の方を見た。

？へえ、やるねえ。？などと囁いているのをオーナーが聞いて、知り合いですか？などと聞いているみたいだ。

僕は離れた場所で客のオーダーを聞いていた。そうこうしていると、歌が終わって彼がこちらへ戻ってきた。戻ってくるのもひと苦労していたけどね。女の子たちが彼に携帯やメルアドを聞こうと必死になっていたから。

僕はますます面白くない。カウンターへ戻ってきた悟に、オーナーが？良かったよ？などと言い、褒めていた。悟は鼻を啜りながら「風邪気味で、声があまり出なくてすみません。」

頭を下げた。

オーナーが僕ら2人を見て

「何やお前ら。2人して風邪引いて。怪しいな。」

僕はどきっとしたけど、彼は、
「何言ってるんですか。澤崎さん、冗談きついっすよ。」
などとけろりとしている。

オーナーが？カウンターのお客さん、悟くんの知り合いらしいよ。
？と、声をかけた。
彼がそちらの方へ目をやると、小太りの方がやあ、といった感じ
で片手を挙げた。
「あ、森下さん。」
知り合いらしい。
「どうしたんですか？このお店、よくみえるんですか？」
森下さんと呼ばれた小太りの方が
「彼がいい店があるからって連れてきてくれたんだよ。」
連れを指差すと、もう片方の男性客が、
「こんばんは。」
頭を下げたので、悟も丁寧に頭を下げた。
「何？水木くんはこの店で働いているの。」
さっきのピアノのことを言っているみたいだ。
彼は恥ずかしそうに
「変なところ見られちゃったな。」
「いやあ、僕が無理やり頼んだんですよ。彼ピアノやっていたって
いうから。」
オーナーが口を挟む。
「いや、うまかったよ。すごいね。」
そのやりとりを見ていた悟が、僕の方を振り返り手招きした。
彼らの側に行くと、
「森下さん、これ僕の後輩なんです。堀江隆博くん。」
僕を紹介してくれた。
「こんばんは。初めまして。」
頭を下げると、森下さんと呼ばれた彼が

「初めまして。よろしくね。」
スーツの内ポケットから名刺入れを取り出し、名刺をくれた。
名刺には『株式会社ダイナ・ランゲージサービス　第2営業課部長兼翻訳コーディネーター　森下光雄』とあった。
（翻訳コーディネーター？）
会社名を見て驚いた。翻訳会社の大手だ。悟の翻訳の仕事先？
名刺を眺めていると、悟が勝手に僕を自分の後釜にと、森下さんに売り込んでいた。
まだ、返事していないのに。僕が戸惑った顔を向けると、悟はにこにこと頷いた。
（大丈夫だって）
（ええ、そんなあ）
2人して視線でそんなやり取りを交わしていると、森下さんが、
「堀江くん、やってみないか？」
と、声をかけてきた。
「僕、まだ勉強中で。」
「実践を積むことも勉強になるよ。」
「そうだよ、やってみろよ。俺も面倒見てやるから。」
と、悟。森下さんは続けた。
「水木くんは優秀でね。翻訳をやりたいとうちの会社に登録してくださる人はごまんといるんだけど、その中でも彼は仕事を安心して任せられる数少ない人材でね。納期はきちんと守ってくれるし、仕事は硬い。学生さんなのにほんとよくやってくれてね。ずっとうちは頼みたかったんだけど、東京へ就職するってことを聞いてからほんと困っているんだ。」
「水木くんに前から君のことは聞いていたよ。出版翻訳がやりたいってことはわかっているけど、勉強のためにいろんなことをするのも身につくからね。実務翻訳は数が多いし、結構仕事があるよ。通信、ネットワーク、コンピューター、特許、法律、証券などジャン

ルはいろいろあるけど、最初はあまり専門性のいらないものからやってみて。堀江くんもコンピュータやネットワーク関係は強いらしいね。水木くんと同じで。仕事が一番多いジャンルだからすぐに仕事をお願いできると思うんだけど。」

どうしようか？悟の方を見ると、

（やれ、断るなよ。）

きつい眼差しが飛んできた。それで、森下さんに、

「じゃあ、一度お話を伺わせて下さい。」

そう言うと、年明けに会社に面接に来て欲しいといわれた。トライアル（試訳）をしてみてＯＫなら登録して、ということで話は進んだ。隣にいる連れの彼も会社関係の人らしい。この人にも名刺をもらう。

さて、彼らが帰ってから

（急なんだから。）

困ったふうに口を尖らせると、

（何言ってんだ。お前ならやれるよ。）

有無を言わせない口ぶりだ。

忙しくて結局店ではそれ以上話が出来ず、店が引けるのを待って彼の家で飲み直すことにした。

深夜１２：００過ぎ。彼の家のキッチンでオムレツとキノコのガーリックソテーを作る。東京から飛んで帰ってきたが、演奏を頼まれたり、翻訳会社の取引先の人に会ったりで、店でつまみらしいつまみも食べられなかった悟が、腹が減ったから何か作れとうるさいのでキッチンに立っている。

にんにくをスライスし、フライパンの火を弱火にしてオリーブオイルでこんがり狐色になるまでソテーする。１回取り出し、エリンギ、シメジ、マッシュルームなどのきのこ類を入れ炒める。塩、コショウして取り出し、こんがり狐色にソテーしたガーリックを散らす。

次はオムレツ。ボールに卵を割りいれ、塩、コショウ、コンソメ、牛乳で味をつけ、たっぷりのバターを引く。卵を流し入れ、箸で寄せながら焼いていると、キッチンに入ってきた悟が、

「すごいな。料理が出来るなんて。」

感心しながら僕の手つきを見ている。

「これくらいの簡単なものしか作れないよ。」

「でも、すごいわ。」

食い入るように僕のフライパンさばきに見入っている。

そうなんだ。悟は全く料理が駄目なんだ。勉強、スポーツ、音楽、なんでもトップクラスの超人なのに唯一の弱点は料理だ。インスタントラーメンですらろくに作れない。かろうじて、カップめんにお湯を注いで食べるくらいだな。後は外食。

高校の時ひとり暮らしで料理もまともに出来ずどうしてたんだと聞くと、朝はコンビニ、昼は学食、夜は店で食べていた、と言った。

27話

「店？」
聞き返すと、
「そう。バイト先。」
「さっきのピアノ？」
オーナーが（これで食ってたらしいよ。）と言った意味を聞こうとしたが、聞けなかった。そのことか？
「うん。高校の時、叔父さんに面倒みてもらってはいたが、これは就職したら少しづつ返すつもりなんだけど。親父からは一銭ももらいたくなくて生活費の足しにバイトしてたんだ。」
「だけど、コンビニの店員や新聞配達なんかろくに稼げやしない。それでつてがあってな。隣町のクラブで学校が終わってから雇ってもらっていたんだ。」
「未成年だろ？」
僕がよく学校にばれず補導もされなかったもんだと、感心すると
「まあ、いろいろとうまくやってたからな。」
と、返す。
「客のリクエストに応じて歌を歌いピアノを弾く。あとは今の隆博と同じだな。客の注文を聞いてカクテルを作ったり、応対をしたり、そんな感じ。」
「でも、うまいよ。びっくりしちゃった。」
ピアノはどうしたんだと聞くと、母親が幼稚園の時から習わせたらしい。歌は？と聞くと別に何もしてないと答えた。そして、母親にはこのことは非常に感謝していると言った。そのおかげで親父に世話にならず、何とか高校を卒業出来たからねと、笑った。
「さ、出来たよ。食べるよ。」
「ああ。」

僕がリビングのテーブルに料理を運ぶと、彼がよく冷えたワインを冷蔵庫から取り出す。
「まだ飲むの？」
「他に何を飲めと？」
呆れた、店であれだけ飲んでおいて。まあ、いいけど。
食べながらさっきの森下さんのことを聞いてみた。
「ああ、それにしても変なとこを見られたな。澤崎さんしつこいからなあ。」
眉間にしわを寄せる。とはいっても別にオーナーのことを非難してるわけではない。
「昔を思い出しただろ。」
「まあね。」
「その時のバイト先のオーナーが、澤崎さんと同じくらいの年代の人でな。それで音楽のこととかいろいろ教えてもらったから、澤崎さんと話が合うんだろうな。その人にはだいぶお世話になった。飯を食わせてもらったり、いろいろね。」
「それにしても懐かしい感覚だ。ああやって人前で歌うのはね。」
ふっと笑って、
「ああ、そういえば、あれなあ。前から頼んでおいたんだ。森下さんに。」
急に話を変える。就職の内定が決まった頃に、就職で東京へ行くので翻訳のアルバイトが出来なくなることを伝え、もし良かったら自分の後をやらせたいやつがいるので仕事を紹介してやってもらえないかと、彼に話をしていたらしい。
「で、何で僕？」
「お前が一番見込みがありそうだと思ったからだ。」
と、真剣な顔をした。
「だって、悟は僕のことほとんど知らなかっただろ。」
そうなんだ。夏にあの結婚のお祝い会で、飲みつぶれた彼を送っ

て行ったことがきっかけでこうなったんだけど、それまでは学部内、ワークショップなどで悟に会うことは何度かあったけど、話らしい話をしたことがなく、彼が自分のことを知っていたことが驚きだった。

「何言ってるんだ。お前は知らんかっただろうがな。俺はお前が1年の時からずっと見てたよ。」

珍しく顔を赤くする。それは意外だと聞き返すと、

「お前さあ、熱心に勉強してたしなあ。まず入学出来たことに浮かれて、サークルや合コンやらにうつつを抜かす新入生も多いのに、お前真面目でなあ。」

それは自分がアルコールを分解出来ず飲めないので、あまりそういう行事に参加しなかっただけだと返すと、

「いや、俺わかるんだ。きちんと目的をもって入ってきたヤツは。俺も必死に勉強したもん。まあ、俺の場合は親父に対する反抗心だけだったけどな。とにかく勉強して学校を卒業して一人前になって、早く自立したかったんだ。そして自分のやりたいことを叶えたかった。そのためにはとにかく何でも一番になりたかったんだ。」

この人は楽そうに何でも出来るみたいに思われているけど、人の見ていない所でどのくらい努力していたんだろう。やっぱりすごい人だ。

「ワークショップでの課題さあ、みんな読んだよ。」

「僕の？」

「そうだ。」

知らなかった。初耳だ。

「お前さあ、原文よく理解してるし、訳にセンスあるよ。文章は独りよがりでない論理的な日本語を使ってると思ったし、なんか透明な空気みたいなものを感じるんだよな。それがひどく心地良いような。」

「何それ？」

「まあ、これは俺の個人的な感想だけど。それに、わからないとこ

ろは手間隙惜しまず、本当に丁寧にネットで調べたり、先輩らに聞いたりしてやってるとこを見て信用出来るやつだなあと思って、ワークショップの課題を最初からずっと目を通させてもらったよ。」
知らなかった。全部読んでるなんて。あまり褒められると恥ずかしいなあ、と思いながら聞いていると、
「まあ、それだけではないけどな。」

（何が？）
聞き返そうと思ったが、口をつぐんだ。何かを思い出すような遠い目をしたからだ。それにしても彼が僕のことを1年の時から見ていて、こんなに見込んでくれていたとは思いもしなかった。ひどくそれが照れくさくて、しかし嬉しかった。自分がどこまでやれるかわからないけど夢に近づけるかもしれない。なんだか胸がわくわくした。
「隆博は固いし、しっかりしている。この仕事は思ったより地味だからな。とにかく納期厳守。守秘義務は絶対だ。最終チェックは念入りにして。たぶんこんなことは言わなくてもわかると思うけどね。お前は。あまり自信のない分野のものは断っていいからな。」
「断っていいの？」
「自信のないのをやって迷惑がかかるといけない。自分の身の丈に在ったものから確実にな。」
それから、彼は仕事の事についてあれこれと教えてくれた。
納期厳守、守秘義務、最終チェック、手間隙かけずわからないことは納得するまで調べること。良い文章に触れて日本語の読み書き能力を高めること。専門分野を持つように勉強すること。訳文に自信のない箇所は明確にコメントをつけて提出すること。入手可能な資料を最大限要求すること等々。
面白いところではスラング的な述語や商品名は訳語を見出すまでに苦労したことや、意味不可能な長文の英文。ネィティブでも間違えるスペルなど、苦労もいろいろみたい。

でも、結局僕はやってみることに決めたので、年明けに森下さんの会社へ行ってみることにした。この件に関しては悟が話をしてくれる。試験前やレポートの提出などに困ったときには、彼は面倒くさがらずに今まででも教えてくれて、とても助かっていた。今度の件も出来る限り教えてやるからと言ってくれた。

どうして彼は僕に目をかけてくれるのだろう。自分だって今が一番忙しい時なのに。可能な限りこちらにいて時間を作ってくれる。もうそんなに時間がない。充分わかりすぎるくらいわかっていることだ。それを彼も感じているのだろう。

酒で酔ったせいもあり、眠くて眠くて仕方ないのに、それに抗うようにしてお互いを求めあう。そっと唇に触れる。ゆっくりと深い海の底へ、そこは暖かくてゆったりとしていて、穏やかな時間が流れる。その心地良さに僕は身を沈める。

夢を見ているような感触だ。彼の体温を感じる。すると、徐々に自分の芯の中心がじんわりと熱を持ったように、熱くなっていく。それと同時に、彼の肌も熱を帯びたように熱くなっていくのを自分の肌で直に感じる。僕らはだまってただ、その行為に没頭する。女の子のそれとは違う。

徐々に波が押し寄せる。小さな波が足元へ。少しずつ大きな波になって、足元からあっという間に膝までの高さになり、腰を覆い胸につくまでになり、僕を飲み込もうとする。その波に呑まれまいと必死になって岸壁にしがみついていると、それが苦しいのか心地良いのかわからなくなっていく。どのくらいの時間が経ったのか、どこに自分がいるのかさえ、わからなくなっていく。

いや、違う。この腕は彼の腕だ。そう、彼の腕の中だ。

28話

終わると、彼はサイドテーブルの灯りをつけ、肘を突いて上体を起こしてタバコに火を点けた。
「隆博も吸うか？」
素直に1本もらう。今までタバコはあまり吸ったことがなかったけど、彼とつき合うようになって少しばかり吸うようになった。
彼は黙って紫煙の流れを見ている。
「おもしろいだろ。タバコの煙ってさ、見てて飽きないよ。」
それからちょっと考えたように、じっと天井の1点を見つめながら
「年明けまで会えん。」
と、呟いた。
「ああ。」
と、だけ返事する。
クリスマスから年末年始にかけては乃理子さんの元に行くのだろう。
彼女の顔を思い出した。ふくよかで優しい顔立ち。彼女には何の落ち度もない。あの人は疑うこともなく、悟の帰りを待っているのだろう。強い人だ。
頂点に達するとき、いつも思う。このまま悟を放したくない。どこへも行かせず、ここに留まらせることが出来たら、と思う。でも、それは無理だ。そのことを話したことはない。話すつもりもなかった。
タバコの火を消して、眠りに着く。悟はいつも背後から僕を抱いて眠る。何故正面から抱いて寝ない。理由はふたりともわかっていた。僕の首に腕を巻きつけて、赤ちゃんを揺らすように、ゆっくり鼓動に合わせて僕の体を揺らす。その一定のリズムが心地よくて、うとうとと眠りに落ちていく。
ふいに彼が囁いた。

（隆博、東京へ来ないか？）
ぼんやりとした頭にその言葉だけははっきり聞こえた。でも、何も答えず、僕は眠っているふりをした。
（眠ったのか？）
彼は半分眠っているみたいな声を出した。それでも僕は何も答えなかった。

学校も休校になり、今年もあと残りわずか。
裕樹は年末から正月にかけて帰省すると言っていたし、健二は何やら楽しい予定があるみたいだ。
聞くと、新しい彼女が出来たらしく、クリスマスから年末年始にかけてはデートで忙しいらしい。そんな話を聞いて、ふと里佳子ちゃんのことを思いだす。
結局あれから会っていない。普通に付き合っているなら、健二みたいにクリスマスには食事したり、お正月には一緒に初詣に行ったりして過ごすのが普通なんだろうけど。
クリスマスもずっとバイトで忙しかったから、それを理由に断っていたらぱったり彼女から連絡がなくなっていた。でも、それで良かったのかもしれない。いや、それで良かったんだ。
僕は自分から話をするのが苦手な方だから、彼女みたいに明るくて、いろんなことを話してくれる里佳子ちゃんが一緒にいて楽で、楽しかったけど、だけど彼女の気持ちに応えられない以上、こんなふうにずるずるとはっきりしないまま付き合っていてはいけないことくらいわかっていた。
だけど、何となく寂しかった。裕樹も健二もいない冬休み。悟も。
部屋でうだうだと何をすることもなく過ごしていると、あっというまに今年も後４日になってしまった。
どうしようか。たまには実家へ帰るかな、などと珍しくふと気弱になる。そこへタイミングよく地元の同級生から、お正月にみんなで集まって飲むから来いよ、と誘いがあった。大学や就職などで地

元を離れているやつらが帰ってくるので集まろうということらしい。
僕の気持ちは決まった。適当にバックに荷物を放り込むとアパートを後にした。

実家へ帰ると母親が忙しそうに大掃除をしていた。そして、僕の顔を見ると
「いやあね。この忙しいときに帰ってきたの。」
と仏頂面をした。でも、目元が笑っている。
「たまには帰れって、いつも言うじゃないか。」
バックを玄関先に放り出すと、
「もちろん、掃除手伝いに来たのよね。」
母が笑った。
「別にいいけど。何？」
腰を落ち着ける間もなく、家中の蛍光灯を掃除しろだの、天井の埃を取れだの掃除の手伝いをあれこれと指図し始めた母親の手伝いを始める。
「親父は？」
「３０日までぎりぎり仕事よ。」
「よかったわ。母さんひとりで大変だったの。」
「千夏にやらせりゃいいじゃん。」
妹のことを言うと
「駄目よ。あの子もぎりぎりまで部活があるのよ。年明けすぐに大会があるからね。」
吹奏楽のことだ。
「なんだ、間の悪いところに帰ってきたみたいだな。」
「あら、いいじゃない。隆博が一番暇そうだし。」
「まあ、いいけど。」
蛍光灯を外しながら近くで窓拭きをしている母親と話を続ける。
「なあに。デートする彼女くらいいないの？」
「さあね。」

「あら、寂しいわね。可哀想に。」
けらけら笑い出す。何が面白いんだ。まったく。
「うるさいな。」
ちょっとむっとして言い返すと、
「そう、かりかりしないで。掃除が終わったらご飯食べさせてあげるから。」
彼女は真剣に取り合わない。
まあ、いいけど。僕は母親にあれこれ指図されるまま、大掃除に没頭した。
でも本当はほっとした。ひとりでいると悟のこと、里佳子ちゃんのこと、考えると不安になることばかりだ。でも、こうやって体を動かし、いつも冗談を言っている大らかな母親と、他愛もない話をしていると気が和んだ。

午前中一杯掃除にかかりきり、少し遅い昼食を母親と食べた。久しぶりに家の台所で食事をする。
「カレーだけどいいわよね。」
「うん。」
「昨日から煮込んであるのよ。」
母が皿に盛ってくれる。ジャガイモがいっぱい入ったカレー。僕の子供の頃から変わらない。それを母親と向き合って食べる。母親とふたりで向き合って食事をするなんて本当に久しぶりだ。なんだかこういうのもたまにはいいな。
「隆博。たまにはいいわね。ふたりでこうやってご飯食べるのも。」
思っていたことを母親が口にした。
「今、僕もそう思っていた。」
母さんは嬉しそうに笑い、
「何日までいられるの？」
と、聞いた。
「学校が１０日まで休みなんだ。別に予定はないからいつまででも

いいんだけど。」
「お休みはどこへも行かないの？」
「同級生で集まるんだ。まだいつかわからないんだけど。誘われたからそれで帰ってきたんだ。」
「そう。まあ、ゆっくりしていったら。いつも家にいないんだもの。きっとお父さんも喜ぶわ。」
「うん。」
母さんは久しぶりに帰ってきた僕に始終ご満悦だった。
僕はふっと聞いてみたい衝動にかられた。
（僕がどんな息子でも、そうやって笑って僕を迎えてくれる？）
母さんが
（何？）と目元を緩めた。
「ううん。何でもない。」

29話

その夜遅く、父親が帰って来て、千夏と喧嘩しながら母親の手伝いで食事の支度をしている僕を見てびっくりした顔をした。
「なんや、隆博、帰ってきたんか？」
「そうなのお父さん。珍しいでしょう？」
母さんはにこにこ顔だ。
「お兄ちゃん帰ってくるとさあ、うるさいんだもん。」
「何喧嘩してるんだ。」
「卵の割り方が下手だとか、塩が多いだとかいちいちうるさいんだもん。」
「手伝ってくれるのはいいんですけどね。隆博が千夏のすることが心配みたいで。」
だって、千夏は女の癖にやり方が荒くてと、父親に愚痴ると、
「まあ、喧嘩せんようにやれよ。千夏が母さんを手伝っているんなら、隆博はこっちへきて俺の相手をせい。」
父さんは着替えながら手でグラスを傾けるしぐさをした。
台所からビールを取り出し、グラスをふたつ持ち居間のテレビの前の自分の席に陣取る。この父の席も僕が子供の頃から変わらない。
「あ、隆博は飲めんかったな。」
グラスにビールを注ごうとして、はっとした顔をした。
「いや、少しくらいなら飲めるようになったんだ。」
と、言うと、
「へえ。またどうした。」
父は、嬉しそうにグラスにビールを注いでくれた。父さんと向き合ってこんなふうにビールを飲むなんて初めてのことだ。この役は飲める兄貴の役だった、いつもは。
「父さんはねえ、隆博とこうやって飲めるのを夢見てたのよね。」
母さんがつまみをもって居間へやってきた。父さんの顔を見る。

「本当は、お前と孝一とこうして3人で飲めたらなあ、といつも思ってたよ。」
孝一は僕の兄貴だ。
「そうなんだ。父さんがそんなことを思ってたなんて知らなかった。」

父さんは学校のことなど僕の近況をあれこれと聞いた。いつもならそれが煩わしく思うのに、今日は何だか父さんと素直にいろんな話が出来そうな気がした。
母さんと千夏が台所からおかずを持ってきて並べた。大掃除で忙しいのであまり手の込んだ物なんて作れないわよ、と言いながらも、母の得意料理が何皿も並んだ。シチューは僕の好物のビーフシチューだし、春巻きや、サラダや茶碗蒸しなど手の込んだ物ばかり。久しぶりに家族４人で食卓を囲む。
兄貴は結婚して別所帯を持っているのでいない。年末から正月にかけては帰ってくる予定らしい。
「ひさしぶりだわ。皆が揃うお正月なんてね。」
母さんは嬉しそうだ。たぶんこの分だと明日からまた張り切っておせち料理を作ったり、準備を始めるんだろうな。
「兄さんは元気？」
「ええ、たまに覗いてくれるわよ。うんとも、すんとも、言ってこないあんたとは大違いね。」
と、僕を睨む。
兄さんは結婚して5年ほどになる。子供はまだいないが、子供好きな母親は早く兄貴の子供が見たいらしい。それから千夏の学校の話やら、母さんが最近始めたフラダンスの習い事の話やらが話題に上がった。父さんは嬉しそうにそれを聞いている。あまりあれこれしゃべる人ではない。
その日はあっという間に終わった。2階にある、高校卒業まで使っていた自室に母親が布団を敷いてくれた。

ずっと一緒にいるとうっとおしく思うもので、早くひとりになりたい、自立したいと焦っていた。母さんの干渉やまとわりついてくる千夏のことや、厳しくあれこれ口を出してくる父さんのことが嫌だと思うこともある。でも、こうやって久しぶりに家に帰って来て思うのは、離れていると家族のありがたみがわかるもんだなあということだった。母さんの始終嬉しそうな様子がなんだか嬉しかった。布団に入ると急に、大掃除の疲れが出たのか眠たくなってきた。久しぶりにぐっすり眠れそうだ。

大晦日の昼になって、携帯に里佳子ちゃんからメールが入った。
『今夜は雪になりそうですね。良い年を迎えてね。』
短い一文。急に彼女が何をしているのか気になって仕方がなくなった。
反射的に彼女の番号を検索する。3コールで彼女が出た。
「隆博君！」
驚いたような大声が耳に響いた。
「ごめん。ずっと連絡しなくて。」
謝ると、
「ううん、大丈夫。バイト忙しかったんでしょ。え、今日はどうしたの？」
実家に戻っていることを伝えると、彼女も実家で掃除の手伝いなどをしていたと言う。
急に思いついて、
「あ、夜さ、同級生と集まるんだ。初詣行ってみんなと飲むんだけど。良かったら一緒にどうかな。」
同級生のやつらは皆、彼女を伴ってくるらしい。それを聞いてやはりふと里佳子ちゃんの顔が浮かんだのは否めない。そこへタイミングよく彼女からのメールだ。
「そうなの。行っても大丈夫？」
「全然平気。迎えに行くから。」

実家から彼女の家までは割りと近い。駅まで迎えに行くからと、待ち合わせ時間を決めた。
携帯をきってから、僕は自分の不可解な行動に考えを巡らせた。
みんなが彼女を連れてくるから、里佳子ちゃんを誘ったのか。タイミングよくメールが入ったからそうなったのか。それとも、僕は彼女をまだどこかで求めているのか。それは恋人として、友達として。
どういう感情なのか自分でもはっきりわからなかった。でもやはり彼女のことはどこかで好きだと思っているのだとは思う。

夕方になって兄貴が義姉さんを伴って帰ってきた。2日までいるそうだ。その夜、皆で食卓を囲み、紅白歌合戦を見た。母さんはかいがいしくいろんな物を作り、義姉さんと千夏がそれを手伝った。僕ら男性陣はとにかく飲んでばかりだ。
10時近くになって、駅まで里佳子ちゃんを迎えに行った。その足で、同級生の家にふたりで赴く。もうすでに何人かの同級生が集まっていて、それぞれが彼女を連れてきているので、華やいだ雰囲気に包まれていた。何年ぶりかで会うメンバー、だけど昨日も会っていたかのようにすぐに打ち解け、楽しい時間を過ごせる。
やはり、昔の仲間はいい。そして、皆で初詣に出かけ、また家に集まって飲んで過ごした。こんなに何も考えず楽しんだのはひさしぶりだ。いつも楽しんでいるつもりなのに、今日は本当に楽しかった。近況を報告したり、昔のばか話をしたり。正月はそんな感じで地元の友達に会ってしゃべったり飲んだりして終わった。
合間に母さん孝行をした。家族でも初詣に行って、母さんを初売りにデパートへ連れて行ったりした。
そして正月休みが終わり、兄貴は帰っていき、父さんは仕事へ、千夏は学校へ出かけていった。僕も家でごろごろしていたが、そろそろ大学も始まるし、帰ることを母親に伝えると、ちょっと寂しそうな顔をしたが、すぐに気を取り直し、？また近いうちに帰ってき

なさいよ。?と笑った。

３０話

学校が始まって一週間ほど経ったある日。
久しぶりに悟から連絡があった。年末に話のあった翻訳のバイトの話。森下さんから会社に来てくれるよう電話があって、翌日伺うと返事したと言う。
まったく、いつも僕の予定なんか聞かないんだから。
急いで履歴書を買いに走った。早速、机に向かって履歴書を書き、入学式に着たスーツを引っ張り出し、指定された場所へ向かった。オフィス街。初めて足を踏み入れる場所だ。悟が車で送ってくれた。
「一緒に行ってやりたいけど、子供の面接じゃないんだからな。俺はここまでだ。森下さんにはよく話をしてあるから後はちゃんとやれよ。」
そう、言い残して帰っていった。彼もなんだか忙しそうだ。
それで、目の前のビルの１５Ｆにある彼のオフィスへ向かった。僕の顔を見ると森下さんは愛想よく笑って応接室へ通してくれた。そこで履歴書を渡し、簡単な筆記試験と適正テストを受ける。
「まあ、形式だけだけどね。」
彼は笑った。そしてトライアル（試訳）を持ってきてくれるようにと、Ａ４紙何枚かの用紙を社名入りの封筒に入れて僕に渡した。
「それでＯＫならうちの会社に登録してもらうから。出来れば長いつきあいになるとうれしいんだけどね。」
「よろしくお願いします。」
頭を下げた。
「また登録時に仕事の流れとか、契約のこととか細かい話はその時にね。」
と言い、帰ろうとする僕を階下にある喫茶店に誘ってくれた。
仕事とは関係のないプライベートな話を彼はし、僕にも学校や家族のことなどを聞いた。

あまり面識のない人とプライベートな話をするのは好きではなかったが、人懐こそうな彼なら何となく安心できた。彼はこうして人とのコミュニュケーションを計り仕事を円滑に進めていこうとする人なんだろうなと思った。帰ると留守電に悟から電話が入っていたので、電話をかける。

「お、どうだ。大丈夫か？」
「子ども扱いだな。」
「いやあ、そういうわけではないが、紹介した手前心配でな。」
「大丈夫だよ。今日は面接と適性検査やテストなどだけで、トライアルを見てみないと登録させてもらえないんだから。」
「そうだな。確かそんな感じだったな。」
「で、いつまでに？」
「一週間後。」
「そうか。手伝ってやりたいけどトライアルはだめだな。間に合うようにやれよ。」
「わかった。」

森下さんが喫茶店に誘ってくれたことを話すと、愛想のいい人でよく話を聞いてくれるし、面倒見がいいから仕事がやりやすい、と悟は話してくれた。
「数あるコーディネーターさんの中でも一番つき合いやすい人らしいから。ま、わからんところは彼に聞いてな。」
用件だけ言って電話が切れた。久しぶりなのに。そっけない。
ま、いいか。何かに熱中してる方が楽だ。今の僕には。
シャワーを浴びトライアルにかかる。意外と難なく出来た。ま、これで手こずっていては話にならんがな。それでも、誤訳がないか慎重に何度も見直す。訳した表現がいまいちだと思う箇所は納得行くまで調べて直す。そして最後に何度も見直す。出来た。

一週間を待たずにトライアルを持って彼のオフィスを訪ねる。？

早いな。?と森下さんは感心してくれた。そして2、3日のうちには連絡をすると言った。
早速、翌日に電話があり、OKだから登録に来てくれと言われる。登録に行き、仕事の契約や流れ、注意点やいろんな話をし、書類を数枚記入し、オフィスを後にした。
?ぼちぼち簡単なのからやってみてくれ。なるべく質の良い原稿をまわすから。?と森下さんは人懐こい笑顔で見送ってくれた。

「そうか。良かったな。」
「ああ。」
数日後、トライアルが通り登録してきたことを報告すると、悟は嬉しそうに笑った。
?でも学業を第一にしてな。?
?そうだろうね。あんたにみたいにスーパーマンじゃないからあれもこれも出来ないよ。?
?隆博なら出来るさ。?
彼は満足そうに笑った。
会う時間をなるべくやり繰りしてくれてはいたが、彼は忙しそうだ。卒業を間近に控えてすべて単位を取っていた彼は、大学に出向くことはもうほとんどないが、住む所を探したり、乃理子さんも出産まじかだし、あれこれと忙しい。でもまあ思うような家が見つかって契約をしてきたと話した。
彼女のことを聞くと、ま、なんとか順調だ。4月が出産予定だと話してくれた。でもその話をするとき、彼は僕の目を見ない。やましい話をするみたいに、なるべく触れたくはないみたいだ。気持ちはわかる。僕も別に聞きたい話ではない。それは僕らが離れて行く日がそこまで来ていることを実感させるからだ。
最近は、悟に会う日がめっきり減った。忙しいのはわかっている。彼はおなかの大きな奥さんを抱えている。就職に出産。すぐに家庭

持ち。変わることのない事実。わかっていたはずだ。そう、僕は期間限定の恋人だ。彼の。多分。

わかっていても納得がいかない、腑に落ちない、モヤモヤとしたブルーな感情に振り回される日々。それを誰にも言うことすら出来ない。そして里佳子ちゃんとのことだって曖昧にしていていいわけがない。物分りのよい彼女に僕は甘えたままだ。

何をしても手につかないし、最悪な気分だ。なのに、日常は否応なしにめぐってくる。

部屋に帰るとＦＡＸが山積みになっていて、何だこれはと、ＦＡＸの紙をめくってみると、早速仕事の依頼だった。

僕はため息をついた。すると間髪いれず、森下さんから電話が入った。

「今、ＦＡＸ流しておいたんだけど、どう？」

「はあ。」

「急で悪いんだけど、頼めるかな。」

頭の中に悟の言葉がちらついた。

（とにかく最初は何でも引き受けて自分を売り込め。出来ません、なんて口が裂けても言うなよ。）

「はい。やってみます。」

「そう、助かったよ。もし、わからないこととかあったらすぐ電話してね。社にはずっといるから。」

森下さんは愛想よく言った。

「はい、わかりました。ありがとうございます。」

それで僕は辞書を引き、悟にＰＣに入れてもらった翻訳ソフトの力も借りながら、依頼を受けた原稿の翻訳に取り掛かった。それまで悟のことなどで一杯だった頭の中がだんだん整理され、落ち着いていき、仕事に没頭できるようになった。

気がつくと何時間も経っていた。熱中しているとあっという間に時間が経ってしまう。こんな時、没頭出来ることがあるということ

はなんとありがたいことかと、しみじみと思ってしまった。いろんなことが気になるけど、今の時点は自分がどうしたいのかを時間をかけて考えてみる方がいいのかもしれない。
仕事が一息ついて、キッチンでコーヒーを入れる。お腹が空いたけど、冷蔵庫には何もないし、食べに出かけるには時間が遅すぎる。
時計を見る。午前2時を回っている。食事は諦めることにして、タバコの火を点ける。
以前の僕は酒も飲まないし、タバコを吸うこともなかった。悟とつきあいだしてからだ。以前の僕はもういないのかな、そんなことをぼんやりと考えてみた。悟と関係を持った自分。僕はもう前の僕には戻れない。

里佳子ちゃんを騙している気分になる。彼女は、扶美のことを忘れられない僕を待っていると言った。確かに今まではそうだった。扶美のことがあって、いろんな女の子と付き合っても真摯になれない。だけど、今の僕には悟がいる。悟との付き合いが扶美のことを乗り越えさせたのだと思う。でも、得たものはすぐに僕の手から離れていく。いつもそう。悟との付き合いもあと僅かだ。彼は僕から離れていく。どうすることも出来ない。
大晦日の晩、里佳子ちゃんを同級生の集まりに連れて行った。当然、皆は僕の彼女だと思っている。友達に紹介した手前、彼女も僕との付き合いはステディなものだと思ったに違いない。僕にそこまでの深い意味はなかったのだけど。
悟のことを考えると苦しくなる。逃げるように僕は彼女と会った。屈託のない彼女の笑顔を見ると確かにほっとした。はっきりと答えが出せない僕を彼女は責めることすらしない。気まぐれな僕の誘いにも嫌な顔ひとつせず、付き合ってくれる。あんなにいい子なのに。自分が嫌になる。

31話

そんなある日。僕は里佳子ちゃんと駅前のファッションビルにいた。

服が欲しいという彼女に付き合ってビルの中を隈なく歩き回り、やっと気に入ったファーの飾りがついたニットを手に入れた彼女と、地下のカフェでコーヒーを飲んで休憩した後、ビルを出て、駅前の大きな交差点で信号を待っていた。

休日の昼下がり、かなりの人手が出ていた。人の波に埋もれるような小柄な彼女の手を引き、青信号に変わった交差点に足を踏み出した時だ。

前方にひときわ目立つ長身の男がいた。人の波にもまれるようにこちらに向かってくる顔を見て、思わず声が出そうになった。

悟、言いかけて僕は言葉を失った。急に交差点の真ん中で立ち止まった僕の手を彼女が強く引いた。

「ね、立ち止まったら危ないよ。」

人の波が僕の肩に無遠慮にぶつかってくる。里佳子ちゃんは訝しげに僕の顔を見上げた。

悟もこちらに気がついたようだが、ふと視線をはずし、隣の人影に何やら声を掛けている。混雑する人並みが彼らの前から離れると、僕の視界の中に大きなお腹をしてゆっくり歩いてくる乃理子さんの姿が見えた。悟の手には、大きな紙袋。市街に何店舗かあるベビー用品を扱うチェーン店のロゴが眼に入った。

喉の奥が熱くなった。否応なしに現実を突きつけられる。大きなお腹をした彼女の手を引いた彼はどこから見ても幸せそうな所帯持ちそのものだ。いったい僕は何なんだ。

体中の血が足から頭に上ったようで、顔が熱くなり、体中が熱いのに、冷たい汗が背中に流れるのが気持ち悪かった。だけど、隣の

彼女に気づかれぬよう平常心を装い、
「ごめん。行こうか。」
そう言った自分の声がどこか不自然で上擦っているのを感じた。
里佳子ちゃんも気がついたらしく、
「どうかしたの？大丈夫。顔、真っ青だよ。」
歩きながら、僕の顔を覗き込んだ。
「大丈夫。」
悟がゆっくりとこちらへ近づいてくる。彼は僕に気づかない振りをして通り過ぎた。すれ違うとき、垣間見た彼の表情が心なしか色を失っているように見えた。僕はその肩を掴んで、罵声を浴びせたい衝動を必死で堪えた。
？何でなんだよ。奥さんもいるのに、子供も生まれるのに。何で僕なんだよ。？
心の中で叫んでいた。ろくすっぽ顔を合わせることも最近は出来ないのに。幸せそうにベビー用品なんか揃えて。

わかっていたつもりでも、現実として乃理子さんの幸せそうな姿を見て、愕然となった。自分の心は自分でわかっているつもりだった。彼が東京へ行ってしまうまでの間。納得して飛び込んだつもりだった。自分の心がどう動くのか、どういった行動に走るのか、自分のパターンは判りきっているつもりでいても、本当はわからないことだらけだ。自分の心なんて。こんなに動揺するなんて、思いもしなかった。
交差点を渡りきったところで、急に身体が諤諤と震えて、止まらなくなった。気持ち悪くて吐きそうだ。今にも道路に膝をつきかねない僕の様子を見て、里佳子ちゃんが肩を抱いてくれた。
「どこかで休もうか。」
「いい。大丈夫。」
これ以上、平静さを保っていられなかった。
「ごめん。気分が急に。ここで別れていい？」

彼女は心配そうに小さく首を縦に振った。僕は彼女の返事を待たずに、その場を走り去った。

いつも心の片隅に彼がいた。心と体がいつも彼を求めていた。日常の喧騒にそれは埋もれて、時々意識の表面に現れる。心を思うに任せる時もあれば、無理にそれを意識の下に押し込めようとする時もあった。その感情に弄ばれることがひどく苦しくて、何とかそこから逃れようと、日々の営みに没頭するのだが、その意識はいつも僕を支配していた。そんな毎日が楽しく、甘美な瞬間のつなぎあわせでもある反面、それは地獄に落ちた者にしかわからない苦悩と背中合わせの毎日だ。

だけどお互い顔を合わせた瞬間、そこにあるのは心の深くから沸き立つような喜びだけだった。

心が通じ合っていると思えるその瞬間。彼が僕を見る目。あの笑うとくしゃくしゃになる目もと。

それを手に入れられるなら、地獄の使い間が僕をたぶらかしに来たとして、それが何だというのだ。　そんな気にさせてしまう彼の存在が僕の中では悪魔であり、そして天使でもある。罪悪と背徳にさいなまれて、のたうちまわり、苦しみ、それでもこの想いを手放すことは出来ない。

彼女と別れて、人混みの中をあてもなく彷徨い、深夜にやっと自分の部屋にたどり着いた。

部屋の明かりをつけ、ベッドに腰を下ろす。ひどく疲れた。体中の力が抜けてしまったようにだるくて仕方がない。このまま何も考えずに眠ってしまえたら楽だろうな。

夜の街を歩いていても、思い出すのは乃理子さんの手を引いて、信号を渡ってくる悟の姿だ。想像の中で、里佳子ちゃんを連れていない僕が、悟の肩を掴んで、交差点の真ん中で思いっきり殴り倒して、罵声を浴びせかけている。

？どうしてだ。何故僕なんだ。行ってしまうのに。乃理子さんも赤ん坊も捨ててなんていけないのに。捨てるつもりもないのに。春になったら何事もなかったように、東京で新しい生活を始めるつもりなのに。？

本音だ。今まで口に出そうとも思わなかったけど、今日の彼らの姿を見たら、急に自分が惨めになった。悟はどういうつもりで、僕に好きだと言ったんだ。

嫉妬だ。僕は嫉妬している。嫉妬なんて、やきもちなんて、女の子の持つ感情だとずっと思っていた。僕には無縁のものだと。思いもよらない自分の本当の感情に驚いて、戸惑っていた。

悟のことが憎い。憎くて、そして悔しくてたまらないのに。

なのに会いたい。会いたい。会いたい。

視界が薄っすらと滲んでぼやける。会いたくてたまらない。何故、僕はひとりなんだ。

携帯に里佳子ちゃんからの着信が何件か入っていた。メールにも、僕の体調を心配するメッセージが入っている。むろん、それに返信をする気力すら残っていない僕は、ベッドにうつ伏せになり、部屋のダウンライトの明かりをぼんやり眺めていた。だいぶ経ってから、暗い部屋の中に電話の留守電のランプが点滅して光っていることに気がついた。留守電が何件か入っているようだった。よろよろと立ち上がり、留守電を聞くためにスイッチを押す。

ああ、どうしよう。何件か入っているうちの2件は森下さんからだった。そのメッセージを聞いて僕は現実に引き戻された。

（堀江くん。連絡が欲しいんだけど。頼んでおいた原稿どうかな？明日の締め切り間に合うよね。いつも締め切りより前に届けてくれるから、今回ちょっと心配でね。君のことだから大丈夫だと思うけど。何かあったらすぐ連絡してくれ。）

頼まれていた原稿がまだ仕上がっていない。明日の午前中までに届けなければならない。里佳子ちゃんの買い物に付き合った後、部

屋に戻りすぐに取り掛かれば間に合うとたかをくくっていた。だけど、今日のあのアクシデントのことで、すっかり原稿の事を忘れていた。でもそんなこと理由にならない。　今からでも何とか間に合わせなければ。

そう思い直し、デスクに向かう。原稿に取り掛かって数分もしないうちに、自分の胸の中にモヤモヤとした思いが湧き上がってきた。

（こんなことして何になるんだ。）

翻訳の仕事は僕の夢だ。だけど、悟の後釜として任されたこのアルバイト。何であいつの後を僕が引き受けなければならないんだ。自分が出来なかった夢を僕に押し付けているに過ぎない。悟の自己満足だ。そんなのに何で付き合わなければならないんだ。馬鹿らしい。

原稿を投げ捨てた。自分が自暴自棄になっていることはわかっていたけど、今は何も考えずに眠りたい。もうどうでもよくなっていた。

そう思って、ベッドに突っ伏した瞬間、携帯が鳴った。

32話

（誰だ。こんな時間。）
（悟。）
彼からも何回か着信があった。今日のことだろうか。だが、出たくなかったし、出たところでまともに話なんか出来る状態ではなかった。
携帯を放り出して、布団を頭から被った。何回か着信音を聞いていたが、その電話はしつこくずっと鳴り続けていた。僕はベッドからはいずり出し、仕方なく電話に出た。
「いるんなら出ろよ！何回電話させるんだ。馬鹿野郎！」
鼓膜が破れるかと思うくらいのでかい声でいきなり怒鳴られた。
「何だよ！こんな時間に。」
「だいぶ前から何回も電話をしているのに、そっちこそ何だよ！」
「今、話をしたくない気分なんだ。又今度にしてくれ。」
「今度にしてくれじゃないよ。お前、どうなってんだ。」
電話をしてきたのは、今日の駅前でのことかと思った僕は勘違いしていることに気がついた。
「何のこと？」
「原稿だよ。原稿！」
「何で悟がそんなこと言ってくるんだよ。」
「俺んとこへ電話があったんだよ。森下さんから。最近、締め切りぎりぎりだし、声色が元気がないって、心配して。それでも何とか間に合っているみたいだったから放っておいたんだけど。今日は、明日締め切りなのにお前から連絡がないし、電話してもずっと留守電。携帯へ電話しても出ないし、留守電をいれておいても全く連絡がないって。何かあったんかって。お前にしたらそんなこと一度もないからどうしたのかって。それで俺が電話しても全く連絡がないし、どうなってるんだ。」

「…もう辞める。」
「何を！」
「このバイトもう辞める。」
「何言ってんだ。」
「もうどうでもいいんだよ。こんなことしてたって何の意味もない。」
「原稿どうするんだよ！間に合うのか？」
「間に合わないからってそれがなんだって言うんだ！」

話しながら僕は苛立ちがピークに達するのを感じた。今日のことで何か言ってくるのかと思ったら、仕事のことだ。僕の気持ちなんかあいつ、全然わかっていないんだ。

乱暴に携帯を切り、床に投げつけた。そしてベッドに潜り込み、今度こそ誰が電話をしても出ないつもりだった。携帯は死んだように静かに床に転がっていた。頼むから今日は寝かせてくれ。誰も邪魔をしないでくれ。

数分もしないうちに、うとうとと眠りに引きずり込まれ、心地よい静寂が訪れた。

が、その静寂をドアの激しいノックが引き裂いた。僕は飛び起き、叫んだ。

「誰だ！何時だと思ってるんだ！」
「何時じゃねえよ！早く開けろ！」
悟だ。めちゃめちゃ怒ってる。声を聞いただけでわかる。僕は咄嗟にドアを開けて、
「いい加減にしてくれ。バイトのことはあんたには関係ないだろう！」
と叫んだ。

次の瞬間、目の前を火花が散った。ものすごい勢いで殴られ、玄関に積んであったシューズケースが倒れて靴が散乱した。口の中が切れて拭った手が真っ赤に染まった。起き上がろうとする僕をなお

も彼は胸倉を掴んで殴った。僕はそれを手でさえぎって、思いっきり懇親の力で彼を突き飛ばした。

「いい加減にしてくれ。いきなり何だよ！」

「辞めるってなんだよ！穴をあけるなってあんだけ言ったじゃないか！」

「もう辞めるんだよ！原稿なんてどうでもいい。」

「どうでもいいじゃすまないぞ。仕事をなんだと思ってるんだ。」

「仕事、仕事ってうるさいよ。あんたは自分の夢を俺に押しつけてるんだ。自分が出来なかったことを俺にさせようとしてるだけなんだ。」

そう言った瞬間、また思いっきり殴られた。

玄関の薄明かりの下で見た悟はすごく怒っていた。今まで見たこともないような厳しい顔だった。そしてすごく悲しそうだった。その顔で彼は僕をじっと睨んだ。その目を見ていられなくて思わず目を逸らした。僕は急に弱気になるのを感じた。

「穴をあけるのはいけないことくらいわかっている。だけど…。」

出来る状況じゃない。それに今からじゃ間に合うわけもない。

悟もわかっていたはずだ。今日のことで、僕がショックを受けていたことくらい。だけど、彼はそのことには触れず、

「隆博。とにかく森下さんに迷惑かけられない。どんな理由があろうといったん引き受けたものは、ちゃんと間に合わせないと。」

彼は大きな手で、僕の肩を掴んで立ち上がらせ、自分も服の埃を払った。

僕は頷いた。

「でも、間に合わないんだ。やっていなくて。」

デスクに散らばった原稿を集めると、

「見せてみろ。」

彼に原稿を渡すと、

「何時までだ。」

「明日の昼までに。」
腕時計を灯りの下で見る。午前1時30分を過ぎている。
「間に合うさ。間に合わせよう。」

悟は原稿を半分に分け、片方は自分がやるからと言った。そして今回だけだ、とつけ加えた。そして僕の使っていないノートパソコンを開けると黙々と作業に取り掛かりだした。それを見て僕も机の上のデスクトップを開け、原稿に取り掛かることにした。
彼の方をちらりと見やると銀のフレームの眼鏡をかけ、ものすごい速さでキイを打っている。辞書や参考資料もあまり見ない。そのあまりの速さに驚いてしまった。
「何やってるんだ。早くやれよ。」
叱責が飛ぶ。
「うん。」
僕らは明け方まで言葉も交わさず、黙々と作業に没頭した。白々と夜が明け、カーテン越しに太陽の光が差しだしても、僕らは黙って原稿に向かっていた。そうこうするうちに彼のキイを叩く音がとぎれた。
「よし、出来たぞ。」
悟が僕の方を見た。
「どうだ。」
僕も最後のページを訳して終わったところだった。
「あと、見直して清書だな。」
プリンターで打ち出したものを悟が最終チェックをしてくれた。その間にコーヒーを入れる。カーテン越しの淡い光の中で、熱心な眼差しを原稿に向けている悟の姿を見て心底ほっとした。
信用出来る。彼なら。そう思った。
「ま、いいんじゃないか。こんなことはこれきりにして欲しいけどね。」
そう言って僕が入れたコーヒーを受け取る。彼がコーヒーを飲ん

でいる間に清書して、プリンターで打ち出し、バックアップを取る。彼がいてくれるおかげだろうか、僕は自分がだいぶ正常さを取り戻して落ち着いてきたのを感じる。
「シャワー借りるぞ。」
「ああ。」
「昨日はずっとバタバタしてて飛んできたから、風呂も入っていない。全くお前にはかなわんよ。」
そう言って浴室へ消える。
「悪い。ありがとう。」
「何？なんか言ったか？」
シャワーの音で聞こえなかったらしい。改めて言うのは気恥ずかしい。そのままにしておいた。

それから一睡もしていない僕らはとりあえず仮眠を取り、原稿を持っていくことにした。ベッドを使えと言ったのに、悟は遠慮してソファーでかまわんと言って毛布に包まった。風邪を引かさないようにあるだけの毛布を着せて、僕も数時間眠ることにした。それから起き出し、身支度を済ませ、会社まで原稿を届けた。車に乗ってきた彼に乗せて行ってもらい、なんとか締め切りの時間に間に合った。
「心配していたんだよ。電話も？がらないし。」
森下さんは僕の顔を見ると、本当に心配をしてくれていたんだとわかる人の良い笑顔を浮かべほっとした表情をした。
「申し訳ありません。」
「どうしたの？」
悟に殴られて腫れた頬を見て彼が言った。
「何かあったのと聞きたいけど、プライベートなことだからね。無理には聞かない。でも、原稿だけは間に合わせてね。僕は本当に堀江くんのことかってるんだからね。でも、何か困ったことがあったら、プライベートなことでも何でもいいから話して。待ってるから。

」

彼に答えるためにもこの仕事は続けていきたいと思った。

よく考えたら、悟に頼まれたからやっているわけじゃなくて、自分がやりたいことだからやっているのだと思った。昨日はちょっと自棄になってしまったけど。反省する思いで彼に頭を下げ、社を後にした。

33話

「間に合ったか？」
車に乗り込むと悟がそう聞いてきた。
「うん。」
そしてちらりと僕の頬に目をやった。
「腫れてるな。」
そして僕の頬に触れ、運転席から身を乗り出して顔を近づけてきた。
「やめろよ。人が見てるよ。」
森下さんの会社のほんのすぐ側の路肩に車を止めていた。オフィス街でサラリーマンが行きかう路地だ。
「見てたっていい。」
遮る様に彼が言った。彼の唇が僕の唇に触れると泣きそうになった。軽いキスをして体を離すと、
「お前が自棄になってるの、俺のせいだろ。」
そう言って運転席に身を沈めた。
「タバコある？」
「うん。」
シャツのポケットからタバコを出して、僕の方へ放り投げた。それを受け取り、タバコをくわえ火をつける。僕はタバコを吸いながら窓の外を見た。午前中のオフィス街。スーツ姿のサラリーマンやＯＬが忙しく行きかう。タクシーの群れ。
僕らだけが普通に回るこの世界から遠ざかっているように思えた。
「昨日連れてた子、彼女？」
ふいに悟が口を開いた。里佳子ちゃんのことを言ってるのだ。
「あの子は。」
口ごもった。だけど、彼女だったら何だって言うんだ。

「どうでもいいことだ。僕が付き合ってる子だとしても、悟には関係ないことだ。」
彼が何か言いたそうに鋭い視線で僕の方を見ていることに気がついたが、窓の外を凝視したまま、僕は続けた。
「悟はいったいどういうつもりだ。あんなお腹の大きな奥さんまでいるのに、何を好き好んで僕と付き合ってる。」
言ってからしまったと思った。こんなこと最後まで言うつもりはなかった。弱い自分。悟を責める言葉しか思いつかない。責めたところでどうなるものでもないのに。
「乃理子さんのことわかっているつもりだったけど、実際目にしたらたまんないよ。」
理性で抑えることが出来ない。語尾がきつくなっていることも充分わかっていた。
悟は一言も発しなかった。じっと微動出せず、僕の横顔を見ているのがわかった。彼の視線が痛いほどだった。どんな表情をしているのか。見るのが怖かった。
どのくらい沈黙が続いたのか。彼は黙り込んでいる。僕もそのまま黙り込んだ。
先に沈黙に耐え切れなくなったのは僕の方だった。
「ここでいい。歩いて帰る。」
車を降りようとした。車のドアノブに手を伸ばした僕の腕を掴んで、
「送っていく。」
彼が言った。
「いや、いい。」
「送っていく。」
「いいよ。」
何度かそんなやり取りをしているうちに、僕は段々イライラしてきた。
ひとりにしてくれ。自分はもう数ヶ月もたたないうちに東京へ行

っちまうんだろう。僕のことなんかどうでもいいはずだ。
「いいって言ってるだろ。僕に構うな。さっさと東京でもどこでも行っちまえよ！」
声を荒げた。

次の瞬間、手が飛んでくると思った僕はさっと身を除けたが、彼は殴ってこなかった。重苦しい沈黙があり、彼の方を見ると、悟はハンドルを抱え込むようにして運転席に突っ伏していた。
?泣いている??
彼は押し殺した声で泣いている様だった。
悟は腹から搾り出すような苦しげな声で言った。
「つらくないって、俺がつらくないって思ってるのか?」
声が震えていた。
「俺が何とも思っていないって。つらくないって。平気な顔してお前と別れて東京へ行って、それでいいと思っているって、隆博はそう思ってるのか?」
僕は答えられなかった。自分のことで精一杯で悟の気持ちまで考えてなかった。いつも強気で平然といろんなことをやってのけて、僕といる時もいつも笑っていて、だから苦しんでいるなんて、悲しい思いをしているのは僕だけだと思っていた。
悟が泣いているのを初めて見た。胸が痛かった。
彼は運転席に突っ伏したまま、顔を上げずに続けた。
「このままどこかへ行ってしまいたい。何もかも捨てて、乃理子も赤ん坊も。」
「お前だけいたらいい。」
垣間見えた彼の本音。僕は何も言えなかった。その身体に手をかけてやることすら出来なかった。僕も一緒だ。本音を言えば僕も同じだ。僕たちを残して世界は回っていればいい。僕らは取り残されていい。だけど、現実は僕らを甘やかしてなんてくれやしない。

現実は僕らの間を流れる大きな川だ。僕らはその激流を見て立ちすくむ。

この思いを今すぐ捨てることが出来たらどんなに楽だろう。それが出来ないことはイヤというほどわかっているのに。どうして一緒にいられないんだろう。好きなのに。

つらいのはそういうことだ。好きなのに一緒にいられない。求めているのにそれを得ることが出来ない。そしてお互いの気持ちを知っているのに、それを酌んであげることが出来ない。お互いの気持ちが一緒なのにたどり着くところがない。どんなに心の底から相手を思っていても、相手に対して何もしてやれないことが一番つらいのだ。

34話

次の講義の為、教室を移動していた時だった。
「隆博！」
名を呼ばれて振り向くと、振り向きざまに殴られた。渡り廊下に無様に尻もちをついたまま、鉄拳の相手を確かめると健二だった。
「健二。」
口いっぱいに鉄くさい嫌な味がして、唾を吐き出すと地面が真っ赤に染まった。
「いきなり何するんだ。」
「お前さ、いい加減にしろよ。」
走り寄って僕の胸倉を掴んだ健二が仁王のような顔を近づけてきた。
「何のことだ。」
訳がわからず聞き返すと、
「おまん、理由も言わずに里佳子ちゃんと別れたんだってな。」

すぐに事情は飲み込めた。だからって何で逐一健二に言っていくんだよ。あの子も。自分のわがままを棚にあげて、僕は胸の中で舌打ちをした。
あの朝、原稿を届けに行った帰り道、彼女に携帯をかけた。
?もう会えない。?
?何故?何があったの。?
?ごめん。本当にごめん。?
手の中の小さな機械から、彼女が何かを言っているのが聞こえた。罪悪感が一杯に胸の中に広がる。それから逃れたいがために僕は急いで通話ボタンを切った。
もう何も考えたくなかった。彼女に落ち度なんて何もない。ただただ僕のわがままだ。誰からも離れたかった。ひとりになりたかっ

た。
「彼女は理由を知りたいって言うんだ。このあいだ会った時もおまんの様子がおかしかったから、心配して。」
あの日のことか。あれからあの子に会っていないからな。
健二から目を逸らしたまま、黙り込んでいると、
「何やってんだ。」
人並みを掻き分けて裕樹がやって来た。
派手に倒れた物音を聞きつけ、喧嘩だと誰かが叫び、あっという間に人垣が出来た。それすら意に関せず、健二は僕を詰問していた。その場に裕樹が飛び込んできた。

「こんなとこで何やってんだよ。」
裕樹は僕の腕を掴んで立ち上がらせ、健二の背中を押して、その場を後にした。
講堂の裏口に僕ら3人は顔を付きあわせて立っていた。
「で、何。今日の喧嘩の理由は。」
健二が眉根に皺を寄せたまま、
「裕樹だって知ってるだろ。例の彼女のこと。」
「ああ、あれか。」
裕樹も事の次第は知っているようだった。
だからっていきなり殴らんでも、とその場の雰囲気を和ませようと軽い笑い声を立てた。
「いや、僕が悪いんだ。」
僕はふたりに素直に頭を下げた。
「おまんさ、最近おかしいわ。里佳子ちゃんに、おまんから別れるって言われる前に何かあったんかって聞いたら、その前の日にデート中に、おまんが気分が悪くなったって真っ青になって帰ったって。で、何か思いつくことはって聞いたら、駅前の交差点で、お腹の大きな奥さんを連れたひときわ目のつく長身の男がいたって。それを見ておまんの様子がおかしくなったって。」

「で、それさ、水木先輩だろ。背が高うて、めちゃめちゃいい男っていったら、俺んらの周りって、あの人しかおらんやろ。」
図星で、僕は何も言えず黙った。
健二は仏頂面のまま続けた。
「前も怖い先輩に誘われて行かないかんって、デートすっぽかしたんやて。それも水木先輩やろ。それに俺んらの誘い、ここんとこ続けてドタキャンしたやろ。それやって水木先輩や。」
健二たちから飲みに誘われて、出かけようとした所へ悟から電話が入ったことがあった。彼に会う為に、急に誘いを断ったことが数回あった。
彼は僕の顔から視線を外さないまま、
「どういうことや。おまんの行動、訳わからんわ。」

言われてもしょうがない。だからって言えない。悟と僕のことを。ふたりとも親友だと思う。今まで隠し事ひとつしたこともない。何でもお互いのことは話していたけど。
「まあ、俺んらのことはええけど、里佳子ちゃんに理由も言わんと勝手に会えんなんて言って、それまでだってええ加減あの子振り回して。おまん男やろ、しゃっとせんな。」
「理由を言え。理由を。」
健二が僕の肩を掴んで揺すった。
自分のいい加減さがあの子を苦しめている。悟が春には僕から離れていってしまうことがつらくて、あの子と本気で付き合おうかと思ったこともある。だけど、それはただ単に苦しい思いから逃げたいがためだ。本当は。そんな理由。里佳子ちゃんに申し訳ない。当たりまえだ。誰からも責められて当然だ。そして、やっぱりそれすら出来ず、理由すら言わずに勝手に別れを切り出した。いい加減な自分。
そんな自分とは対照的に悟は乃理子さんと幸せそうにしていた。又交差点でのふたりの様子が目に浮かんだ。

でも、あの時悟は言った。
?このままどこかへ行ってしまいたい。何もかも捨てて、乃理子も赤ん坊も。お前だけいたらいい。?
苦しそうに。
どの悟が本当なのだろう。あれが本音なのだろうか。
そう思った途端、胸を力任せに思いっきり殴られたように苦しくて、涙が滲んだ。
その様子に驚いた健二が、
「扶美のことやないやろ。」

里佳子ちゃんを振り回している理由。滲んだ涙の理由。それを健二は扶美のことだと思ったらしい。　僕が何年もそのことから立ち直れずに、夢遊病者のようにふらふらと真夜中に健二を尋ねていったりしたことを彼は思い出したに違いない。あの頃の僕は不意に泣き出したり、訳のわからないことを呟いたりして、周りの人を困らせていた。
「違う。扶美のことじゃない。」
僕は首を振った。反射的に悟のことが口をついてでかけた。
「本当は僕はみず・・・」
他に好きな人がいる。水木先輩とつきあっている。
言いかけた僕の口を塞ぐように、裕樹の大きな腕が肩を包んだ。
?言うな。?
微かに耳元で裕樹が囁いた。
「健二、理由はお前が聞いてどうする?隆博が直接その子に言わないといかんやろ。お前がそこまで首を突っ込むことじゃないだろ。」
裕樹の気迫に、
?まあ、そりゃそうや。?
彼は納得した。
?隆博もいろいろあるんやろ。後は俺に任せてくれ。?
裕樹がそう言うと、健二は、

「わかった。後はおまんがあんばようしてや。」
そう言って講堂の角を曲がって去っていった。
「裕樹。」
裕樹の顔を見ると、
「細かいことはよくわからんけど、言いにくいこともあるやろ。無理して言うことないよ。」
その時、直感的に彼は知っているんだと思った。健二は何でも口に出したり、行動に示さないとわかってもらえないけど、裕樹は何も言わなくても、察してくれたり、勘が良く気持ちの細かいところまで酌んでくれる機悟さがある。

?何で、水木先輩よ。もうすぐ子供も生まれるんやに、あんまり飲んで歩いとんと、奥さんに愛想つかされるんやないか。隆博。おまんええんか。?
立て続けに焼酎をお代わりしていた健二が、真っ赤な顔をして僕に絡んできた。
あの時も3人で飲んでいたところへ、悟から急に電話が入って居酒屋を後にしようとした時だ。
悟が待っていることが気掛かりで、絡んできた健二をどうしようかと困っていると、
?ええ。行け。?
悪酔いしているような健二の腕を掴んで、裕樹が笑って目配せをしてくれた。
ああ、たぶんあの頃から裕樹はわかっているんだ。きっと。
「健二もそのうちわかってくれるやろうし。」
彼は僕の肩に腕を回したままそう言った。
僕は学食のテーブルの向かいで、?何をやらかしても友達でいてくれるか。?と聞いた時、?たとえ、お前が泥棒をしても、殺人をしてもだ。俺がお前を嫌いになることはない。そうすることには何かしら理由があるだろうし、俺はお前を知っているつもりだ。?そ

う即答してくれた裕樹の男らしい確信に満ちた笑顔を思い出した。
「ありがとう。」
裕樹の顔を真正面から見て、はっきり口に出した。
彼は首を振って、
「俺んらはいいけど、彼女には理由をちゃんと言った方がいいぞ。言いにくいかもしれんが、逃げちゃいかん。」
僕の気持ちは決まった。後ろに誰かが見守ってくれてる。自分のことを理解してくれる。それが何て心強いのだろうと思った。
「そうだな。裕樹の言う通りだ。」

35話

この冬一番の寒波が通り過ぎた後、構内は真っ白な雪に覆われていた。

講義を終えた僕は久しぶりにゆっくり構内を歩いてみることにした。

石造りの大きな正門をくぐると、すぐ右脇に事務局があり、図書館、講堂がある。まん前に南校舎、その左脇に西校舎、少し歩くと、東校舎があり、研究室塔が並んでいる。その奥にエルム、つまりハルニレの木が聳える森がある。それを抜けると、学生の交流会館があり、そこを左に折れると延々と続くポプラ並木がある。所々にベンチがあり、学生らが話をしたり、本を読んだり、昼飯を食べたりしている。

ちょうど適度な距離の良い散歩道で、夏の新緑の季節には、短い夏を惜しむように、ポプラの木々が鮮やかな緑の葉をつけ生き生きと輝いている。そのポプラ並木を通り抜けると、ちょっとした池があって、数羽の鴨やアヒルが水面をうろうろと餌を啄ばんだり、水の中に潜ったりしている。

僕は夏場の新緑の季節にこのポプラ並木を歩くのが好きだ。どこもかしこも構内は緑で覆われる。　木々の下を歩けば、日中でも強い日差しを感じることはない。木漏れ陽がゆらゆらと顔を照らし、心地好い乾いた風がシャツの中を通り抜け、髪を撫でていく感触が好きで、よく歩きに来る。授業の合間をみてこの散歩コースを楽しみ、池まで行って鴨たちに餌をやり戻ってくる。

この地方は夏が短い。一年の大半を雪で覆われる。先日まで降り積もった雪が道の脇に押しやられ、溶けかけたアイスクリームのようになっていた。

並木道まで歩いてみようかと迷いながら、エルムの森を抜けたと

ころで、4、5人の同じ学部の先輩たちに出くわした。頭を下げて挨拶をして脇を抜けようとすると、
「おい、隆博。」
声をかけられた。
振り向くと、その集団の中に悟がいて、彼らと別れこちらに歩いてくるところだった。
原稿を届けに行った朝以来、会っていなかった。
「どうしたの？学校で会うなんて。」
「もう授業はないんでしょう。」
並んで歩きながらそう言うと、
「ああ、もう最後だからなあ、構内を歩いて見納めしようかと思って。後、ちょっとした手続きとか、しないといけない用事があったんで。」
さっき一緒にいた先輩のうちのひとりが、こっちを向き大声を上げた。
「おい、悟。来れるんだろうな。」
「ああ、後でな。」
そういって手を振って答えている。僕は去っていく先輩らに頭を下げて見送った。
「何？」
「うん、後で飲み会。」
「最後？」
「ああ、まあそうかなあ。」
僕は急に寂しい気持ちにとらわれた。
「なんや、元気ないな。」
「いや、別に。」
「寒いなあ、お前こそ何してるんだ。」
「ちょっと池まで歩いてみようかと思って。」
「授業は？」
「もう終わった。寒かったらいいよ。悟、戻れば。」

「そっけないな。」
「だって。」

そうか、もう学校へ来ないんだ。最後に構内を見納め、最後にみんなで飲み会。そんな話を聞いて、悟はもう去ってしまうんだなと改めて思い、そして自分の置かれている状況を考えたらとてもハイな気分になんてなれるわけがない。
「まあ、いいわ。俺も見納めや。ポプラ並木を歩いてみる。」
そう言って僕の髪の毛をくしゃくしゃと掴んだ。元気のない僕を元気づける為か。
気を取り直して歩き出すと、すぐに並木道にたどり着いた。雪で真っ白になったこの並木道もなかなか精悍な感じがしていい。道の脇には先日まで降り積もった雪が押しやられていたが、今朝から降り続いた真新しい雪が真っ白な雪の道を作っていた。それらが光を受けて所々きらきらと光っている。誰もいない。誰も足跡をつけていない。
「だいぶ積もってるな。」
悟が言った。
「そうでもないさ。」
冬の間外を歩く時、この辺では膝まであるスノーブーツを履くのが常識だ。中心部の街へ行く時は滑り止めのついた靴かスニーカーでいいけど。そういうわけで、今日の僕たちも例外に漏れずスノーブーツを履いていたので、雪道を歩くのがどうということもない。
先に歩き出そうとすると、
「ちょっと待った。俺が先だ。」
悟が僕を遮った。
「何で？」
訝しげに立ち止まった僕には気にも留めず、先にどんどん歩き出した。
「足跡のついていない道に、一番乗りで足跡をつけるのは気持ちが

いいなあ。」
などといっている。
そうか、何もついていない雪道に一番初めに足跡がつけたかっただけか。相変わらず子供っぽいところがある。
「また、隆博呆れてるだろう？」
振り返っていたずらっ子のように口の端をあげた悟を見て、ああ、あきれているよと首を振った。彼はにやにやと笑っている。

そして彼の所まで追いついていき、又並んで歩き出す。ふくらはぎの辺りまで雪が積もっていた。なかなか歩くのが大変だ。
「戻る？」
彼に聞くと
「いや、いいよ。たまにはこういうのも面白いよ。」
と笑っている。そして次に急に真面目な顔をして
「そういえば、あの…。」
と口ごもった。
「何？」
「バイト。辞めちゃうのか？」
翻訳のバイトのことか。
僕は首を振った。
「あの時はちょっと自棄になっていただけだ。よく考えたら、自分がやりたかったことを引き受けただけだ。悟はチャンスというか、きっかけをくれたんだ。」
あの時は、悟が自分が出来なかったことを押し付けただけだと思った。だけど、違う。押し付けられたからやってるんじゃない。自分の夢なんだ。将来、やりたい仕事に繋がることだ。
「そうか。良かった。」
悟はほっとした笑顔を見せた。
「心配してたんだ。隆博がもう辞めてしまうと言い出すかと思って。」

「大丈夫。森下さんもよくしてくれるし。」
「そうか。」

今日の悟は言葉少なだ。
何かを思いつめているようだ。少し硬い表情をした横顔を見て、そう思った。
それに気づかない振りをして、僕は黙って歩いた。
この雪の日に、構内のこんな奥まで歩いてくる人もいず、当然、雪掻きもしていない道を、歩くというよりも押しやるようにして進むと、数分で池に出た。
池は凍っていて、むろん鴨もアヒルもいない。枯れた草や木の上に雪が積もっていて、冬枯れの寂しい雰囲気をかもし出していた。池の脇にちょっとした急ごしらえの東屋があって、自販機がぽつんと一台だけ置いてある。
「しかし、こんな所まで歩いてくるとさすがに凍えるわ。」
「こんな物好きは僕らくらいだろうね。」
悟はポケットから小銭を出してコーヒーを買い、僕の手に渡してくれた。手袋を外し、凍えた指先で暖かいカップの感触を楽しむ。ふたりして凍った池の水面を眺めながらコーヒーを飲んでいると、
「こないだは殴ったりしてごめん。」
悟がすまなそうにつぶやいた。
「いいんだ。」
「俺、お前の気持ちを考えなさすぎていた。バイトを辞めるなんて自棄になっていたのは、何故かわかっていたのに。」
僕は首を振った。
「だけど、ひどいことを言った。僕は。」
現実としてどうしようもないことを口にしたんだ。聞けば悟だってつらいことくらいわかっていたのに、自分の気持ちを抑え切れなくて、言ってしまった事を後悔していた。原稿を届けに行った帰りのこと。

「隆博に責められて当然なんだ。」
彼は肩を落とした。僕はその姿を見て、急に寂しさにとらわれた。
「それに。」
悟は迷ったように池の湖面に視線を泳がせた。
彼が何を言いたいのかわかったような気がした。でも、言わせたくなくて、彼のコートの袖を引き寄せた。
「ちょっと、コーヒーこぼれ・・・」
言いかけた彼の口を塞いだ。冷気で冷たくなった唇はすぐに熱で熱くなる。
彼の気持ちを確かめるように舌で弄ると、それに反応するように彼の熱い吐息がすぐ側に感じられた。
顔を離すと、珍しく顔を赤く上気させている。
「急にびっくりするよ。」
いつも彼のリードだ。僕から彼を求めたりしたことはない。積極的な僕の反応に驚いていることが手に取るようにわかる。
こぼれたコーヒーが雪の上に茶色い染みのように広がる。それに視線を落とした悟は黙り込んでしまった。

たぶん言いたいことはお互いいっぱいあるだろうに、だけど実際は何ひとつ口に出来ない。その中のひとつでも言ってしまえば僕らの関係の終わりを示唆することになるかもしれないと、お互い神経を尖らせているのかもしれない。
先のことなど何も考えたくない。こうやって雪の降る湖面を二人で見ていることだけが大事なことのように思える。ただ、ひとつだけわかることは、こうして悟と一緒にいると、僕が欲していることは彼と一緒にいる時間だけなのだとわかる。
黙り込んだ彼の横で、僕は冷静に考えを巡らせていた。
もう、これで学校も見納め。ふたりでこの池に来ることももうない。なのに、悟は何故、別れると、もう会えないのだと、僕に告げないのだろう。僕だって聞きたいわけじゃないけど、実際もうこう

していられる時間なんてあと僅か。どちらが先に流れていく時の無常さを口にするのだろう。僕はその時、冷静でいられるだろうか。自信がない

不安な胸の内のように薄い灰色に曇った空から、細かい雪がちらちらと舞いだした。

「雪降ってきたな。」

悟が空を見上げる。

「そうだね。戻ろう。」

自販機の横にあるごみ捨てに、カップを丸めて捨てる。帰り道を歩き出してふと後ろを振り返る。東屋に佇んだまま、悟が動かない。

「どうしたの。雪がひどくなるよ。」

「隆博。」

「うん。」

「一週間、いや3、4日でもいい。出られないか?」

雪が、彼の頭の上に白い綿のように舞い降りる。あの時、彼が僕のバイト先に来た夜。髪の毛についた雪を反射的に振り払おうとして思わずひっこめた手。僕は彼の方へ歩み寄り、髪の毛についた雪を手でつまんだ。白い結晶は瞬時に僕の指先で溶けて消える。

「悟の好きな旅?」

「ああ。」

一瞬の間をおいて僕は言った。

「いいよ。出られるよ。」

36話

（あ、もう時間だ。急がなくちゃ）
大慌てで荷物をかばんに放りこむ。
（でも、何なんだ。この持ち物って？）
デスクのサイドライトの灯りの下で、もう一度悟に手渡されたメモを見て、荷物の確認をする。
「防寒用長靴、登山用ウェア、ザック、手袋、帽子、雨具、サングラス、フリースのズボンやスパッツ、ｅｔｃ…」
（防寒用長靴？？　登山用ウェア？？？）
（どこへ行くつもりなんだ？）
何だか嫌な予感がした。どこへ行くか聞いても教えてくれないんだから。それでもとりあえず指定された物を揃え、荷造りをする。だけどどう見ても山へ行く装備だ。兄の孝一は野球の他にもスポーツは何でもこざれだ。登山も彼の守備範囲だから、殆どの荷物は兄貴に借りた。
でも、山かあ。３月とはいえまだ冬だよ。今。本当かな。
そこへ階下に車が入ってくる音がした。アパートの窓から覗く。悟のようだが、車が違う。だが、カーテンを開けて様子を伺った僕を認めてか、小さくフォンを鳴らす音がした。やっぱり悟のようだ。だけど、アパートの外壁のすぐ横に止まっているのは赤のエックストレイルだ。
外灯の下の艶のある赤色のボンネットを見て、僕の脳裏にあの日彼女がつけていた赤い小さなピアスが浮かんだ。
？これね。母が１８歳の誕生日にくれた物なの。？
里佳子ちゃんはドロップ型の小さなルビーを指で触りながらそう言った。
「だからあの日必死で探してたのよね。」

２年ほど前のサークルのバス旅行でのこと。途中のサービスエリアでトイレに立った僕がバスに戻ろうとしたら、サービスエリアの売店で這うようにして必死に何かを探している女の子の姿が目に入った。

？どうしたの。？聞くと、目に涙を滲ませて彼女は、？ピアスを片方落としたの。？そう言った。時計を見ると集合時間になるところだった。僕はバスの運転手に事の次第を告げ、待ってもらうように言って、すぐに売店に戻った。ふたりして床を舐めるように探していたら、売店に繋がる通路に奇跡的にも赤い小さな石が転がっているのを見つけた。

集合時間には１０分ほど遅れたが、みんなのブーイングに？だって急に腹が下っちゃってさ。？と僕は舌を出した。

「ああ、あれか。」

里佳子ちゃんに言われるまでそんな事件があったことなどすっかり忘れていた。あの時の女の子が彼女だって事も全然気づいていなかった。

「嬉しかったの。一緒に探してくれたこと。遅れた理由も自分のせいにしてくれて。」

彼女が別れ際に話してくれたこと。僕を何故好きになってくれたのかって。こんな曖昧でいい加減な自分を好いてくれて嬉しかったことを最後に伝えたら、そう応えてくれた。

彼女と会った。例の水族館で。アシカのショーを見るって言ったのに結局行ってなかったから。最後にアシカのショーを見て、水族館の喫茶店で話をした。

正直にすべて話した。扶美のこと。それから悟のこと。

「じゃあ、私いつまで待っていても出番なさそうだね。」

彼女は少し口の端に笑みを乗せて、寂しそうに言った。

「もういない人なら、いつか隆博君がその人を忘れて私の方に来てくれる日も来るかもしれないって思ったけど、現実存在している人

で、しかも忘れられなかった人を忘れさせちゃうほど凄い人なら、勝ち目なさそうだもんね。」
そうおどけて見せた。
そして言いにくそうにテーブルについたグラスの水滴を指でなぞりながら、
「あの、隆博君ってゲイ・・・なの？」
当然そう思うだろうな。僕は慎重に言葉を選んだ。
「わからない。こんな気持ちを抱いたのは初めてだから、自分も戸惑っている。今まで女の子にしかこんな気持ちは抱かなかった。」
里佳子ちゃんは困惑した表情で首を縦に振った。
そして視線を僕からはずして、
「ああ、あの人か。交差点で会った背の高い人。だからあの時隆博君変だったんだ。でも、てっきりお腹の大きな女の人の方かと思っちゃったけど。」
あの時の僕の様子がおかしかったことに合点がいったみたいだったが、女性の方が相手だと思ったらしい。当然だろうな。
？でも、何だかいろいろ複雑そうだね。？
僕は悟と乃理子さんのことは詳しくは彼女に話さなかった。彼女も察して聞こうとはしなかったが、複雑な事情があることは想像がついたに違いない。だけどそれ以上そのことには触れず、
「でも、やっぱりちょっとショック。」
そうため息をついた。
僕は返す言葉もなく黙ったまま、コーヒーに口をつけた。彼女も黙ってカップを手にし、そして思い切ったように顔を上げた。
「だって、大晦日の晩、あんなふうに友達に紹介してくれたのは、もう私を彼女だって思ってくれてたんだって、私、勝手に勘違いしてたから。」
胸を突かれた。ショックだったのは相手が悟だからだということだと思っていたら、彼女にとってショックだったのは、ステディな

付き合いだとみんなに認めてもらうような行動を僕が取ったことだった。
自分の軽はずみな行動に顔から火が出る思いだった。
「ごめん。僕が深く考えずに行動していたからだ。」
「いいのよ。」
彼女は指で耳のピアスを確かめるように触れ、
「少しの間でも隆博君と一緒にいられて良かった。」
そう言った。
最後まで彼女は優しかった。本当に僕には勿体無い人だった。

赤のボンネットと彼女の耳にぶら下がっていたルビーの色が重なる。アパートの階段を下りながら目にする赤色に、あの日の彼女の寂しそうな笑顔を思い出す。後ろめたさみたいな感情は拭いきれない。結局、僕は又ひとり女の子を傷つけたことに間違いない。
そして、今夜彼と旅にでる。彼も彼女を置いて。何といって出てきたのだろう。臨月の乃理子さんを置いて。僕らはふたりして後ろめたい思いを引きずり、逃避行のような旅に出るのだ。だけど、半ば僕は開き直りのようなさばさばした気持ちだった。だって何を責められても彼といる時間は後残り僅かなのだから。
アパートのエントランスを出て、エクストレイルに近づくと、悟が降りてきた。
「車、違うね。」
「うん、つれの。」
僕の荷物を後ろのハッチバックに入れながら彼が答える。
「大丈夫だった？」
「何が？」
水銀灯の下で、目元に皺を寄せて微笑む悟。
「出てこられた？」
「あ、ああ。」
僕の問いの意味を考え、一瞬の間をおいた後、そう答え、

「そうだな。ちょっと渋い顔はされたけど。」
正直に答える。
「ま、いいよ。早く乗れよ。この時間なら高速も空いてる。あっという間だ。」
言われたとおり、助手席に座りシートベルトを締める。

車に一歩乗ってしまえば、僕らは現実の世界から全く別の世界へ移動してしまうことが出来る。車という密室の世界。車を走らせるエンジン音や、車道の湿った雪の振動やカーステレオから流れる音楽。ほとんど車の走っていない国道。時折、通り過ぎる対向車。ぽつん、ぽつんと現れる２４時間営業のコンビニやファミレスの明かり。そんなものを眺めていると、この世界には僕と彼しかいないような気がする。
学校やバイトのこと、締め切りが近づいている原稿や、そんな諸々のことがすべて現実味を失っていく。こうして悟と2人でいる世界の方が、本当の世界なのではないかと錯覚をしてしまう。確かに2人でいる世界も現実の世界には違いないのだが。でも普段の生活の感覚とは違う。夢を見ているような、そんな感覚。
すぐ近くのＩＣから高速に乗る。ＥＴＣのレーンをくぐり、合流地点の手前からアクセルを吹かし高速道に滑り出すと、その感覚はますます増してくる。
真夜中の高速道路。非日常的な空間。前を走る車のテールランプだけがいやに鮮やかに目に映る。規則正しく、定間隔に並んだ高速のナトリウム灯のオレンジの灯りが、ちらちらとフロントガラスに反射する。真っ暗な車内で、カーステレオのイコライザーが鮮やかなグリーンで音楽のリズムを刻んでいる。
「タバコ吸っていいか？」
ダッシュボードを指差し、悟が聞く。
「ああ、いいよ。」
ダッシュボードからタバコを取り出し、火をつけてやる。

「すまん。」
紫煙の流れ、吸い込む時に赤く点るタバコの先を何の気なしに眺める。そしてタバコを吸う彼の横顔を眺める。細い指。大きな手。
「何？隆博も吸えば？」
視線に気づき彼が言葉をかける。
「いや、いい。」
「しかしひさしぶりだな。こんなんしてふたりで出かけるのって。」
「ああ、ひさしぶりだ。なかなか会う暇なんかなかったもんな。」
このところ会ってもほんの数時間一緒に食事するくらいしか時間がなかった。だから楽しみにしていた。悟とふたりで出かけること。ゆっくりと旅に出かけるなんて、思いもしなかった。
そう、旅。そういえば行き先って？
「あ、そういえば行き先って？」
「行き先？」
「どこへ行くつもりだ？」
「あれ、言ってなかったけ？」
悟がすっとんきょうな声を上げた。
「聞いてないよ。」
「ああ、そうか。」
「それに何？あの持ち物？それにこの車。四駆でしょ？何か嫌な予感がするんだけど。」
悟は噴出しそうになるのをこらえて
「うん、うん、当たってるかも。お前のそのいやぁな予感。」
いやに嬉しそうだ。
「もういいかげんに教えてくれたって。」
「そうだな。うん。まあ、とりあえずそのサービスエリアで休憩しよう。」
そう言って、サービスエリアに寄るために左のレーンに車を滑らせる。

37話

真夜中のサービスエリア。むろん、中にある売店や食堂なんかはシャッターが下りている。

自販機でコーヒーを買おうと中に入ると、それでも数人の人たちがたむろしている。そのほとんどは真夜中の高速を走る長距離トラックの運転手だ。

僕らは彼らの脇をすり抜け、中の休憩所のテーブルに陣取る。そこで悟がおもむろに地図を取り出して、僕の目の前に広げた。

「行くとこ。ここ。」

指をさす。コーヒーを飲みながら彼のさした方向へ目をやり、思わずコーヒーを噴出しそうになった。

「えっ！ここ？何しに行くの？」

「うん、いいだろう。絶景だよ。」

驚いている僕を尻目に、彼はゆっくりとした動作でタバコに火をつけ煙を吐き出す。

自分の腕時計を見る。腕時計の日付は3月15日をさしている。

彼の指差した大郷高地は3月中旬でも雪深く、GWまで雪に閉ざされる。大郷高地はG県とN県の境に位置し、三方連邦から北アルプスまでの雄大な山脈を一望出来る有数の景勝地だ。夏は観光客や登山客でごった返す。一転して冬になると雪も多く交通規制がかかるため、訪れる人も少なくひっそりとしている。冬山登山を目指す少数のクライマーたちの聖地だ。

僕が言いたかったのは、何故この寒いのに、さらに寒い所へ行くのかとういうことと、悟はどうか知らないけど、僕は冬山なんて全く初めてで、ほとんど登山らしい登山なんてやったことがないのに。無謀すぎるのもどうかしている。それで絶句して口も聞けずにいる僕に対して、悟が言った。

「まさか俺と一緒で、かけ流しの露天風呂が有名な老舗の温泉旅館でのんびりするとか、歓楽街で豪遊する旅とか、そんなの思ってなかっただろう？」
そりゃ、そんなことは思っていないけど、極端すぎる。
「雪ひどいだろ。」
「うん。でも何回か行っているから。」
「えっ？何回もって？」
「叔父さんの別荘があってね。高校の時以来行ってないけど。」
「叔父さんの別荘って？例の？」
僕が聞いたのは親代わりに面倒をみてくれている後見人の叔父さんのことだ。
「そう。」
「でも、山かあ…。」

尻込みする僕を無視するかのように、彼は勝手に今回の旅についての計画を話し始める。彼の計画によるとこうだ。
このまま高速を北上し、中谷ＪＣで北越道に入る。そこから２００キロ近く走ってＮ県に入る。甚悦ＩＣで降りると、すぐ叔父さんの別荘がある別荘地に入る。そこで泊まって次の日は釜トンネルまで車で行き、その先は冬季通行止めだ。それでそこから歩いて大梨平まで出る。その距離４０キロ。むろん1日では無理だから途中はテント泊。
テント泊だって？凍っちゃうよ。全く。その先に悟がお勧めの山があるらしい。どうも、彼はそこで樹氷の森を見たいらしい。雪を被った三方連邦の絶景を眺めたり、雪中キャンプを楽しんだり。何度か叔父さんと一緒に訪れ、楽しい思い出がある地なので、又どうしても行きたくなったのだと。面白そうだとは思うけど、寒い、考えただけで寒すぎる。
僕が黙ってその計画を聞いていると、
「気がなさそうだな。」

にやにやした。僕の反応を楽しんでいるみたいだ。
「だって…」
そう言うと、彼は黙って地図をしまい席を立った。それを追いかけるようにして外へ出ると、
「気がないなら帰っていいぞ。」
彼が振り返った。
「そんなこと言ってないよ。」
急に悟が立ち止まり前方を指差した。
「あのトラックの運ちゃん。ヒッチハイクしろよ。帰れるぜ。」
見ると、僕らの住んでいる県のナンバーのトラックが前方に停まっていた。
トラックの持ち主とおぼしき人物が荷物の点検をしていた。
「お～い。」
悟がトラックの運転手に向かって手を振り始めたから、
「止めろよ。しょうがないなあ。」
慌てて腕を掴むと、彼は振り返ってにやにやしながら
「行くだろ？」
「いつも強引だね。」
半ば呆れてそう答える。
「だけど本当に冬山なんて経験ないんだ。お遊びのような登山なら兄貴に連れられて2、3回行ったことがあるけど、それだってずいぶん前の話だ。」
それまでおどけて笑っていた彼が、急に真面目な顔をして言った。
「大丈夫。俺がフォローするから。」
いつも彼のペースだ。半分呆れて、それでも半分はそんな強引な彼のペースに引っ張られることを楽しんでいる。観念して雪山登山と雪中キャンプにつき合うことにする。

「運転代わろうか？」
「頼む。」

キイを受け取る。車に乗り込み、キイを回す。
車のデジタル時計の文字を見る。夜中の２時を少し過ぎたところだ。アクセルを踏む。四駆だから出足は重いけど、合流地点に滑り込み本線に乗ると、あっという間にスピードメーターの針は１２０キロを指す。
「結構加速するね。」
「ああ。」
「雪道も？」
「大丈夫だ。だけど一般道は雪が結構あるだろうから高速降りたら代わるよ。」
「うん。」
そう言って悟は又タバコに火をつける。その様子を見て、
「眠いんだろ。寝ててもいいよ。」
たて続けに何本もタバコを吸うのは彼が眠くてたまらないときだ。
「ごめん。」
「いいよ。僕は大丈夫だから。ＩＣ降りたら起こすよ。」
「うん。」

彼はタバコの火を消すと、リクライニングを倒して寝息を立て始めた。
カーステレオのボリュームをワンランクダウンする。追い越し車線を大量に荷物を積んだトラックが何台も連なって通り過ぎる。僕はスピードを落とし、自分のペースで運転を楽しむ。
ひとりきりの時間。隣では彼が寝ているが。
非日常的な空間で、ひとりカーステレオの微かな音量に包まれて、加速する車の振動に身を任せる。真夜中の高速を走りながら、思いを巡らせる。
叔父貴の別荘だって？どんな人なんだろう。別荘を持ってるなんてすごいな。雪は深いんだろうか。どんな所なんだろう。
彼が言うには、その叔父さんっていうのがかなりの趣味人で、山

登り、キャンプ、アウトドア全般、カメラや無線やいろんなことに興味があって、昔から子供の悟を連れていろんな所へ行ったらしい。今回の大郷高地も何度か叔父貴に連れて行かれたらしく、冬になると雪の中でキャンプをしたり、近くのスキー場でスキーをしたりしたらしい。高校2年の時以来、行ってないらしいが、その雪原と樹氷が急に見たくなったらしい。

彼は、東京へ行ってしまうと、今より遠くなってしまうからなかなか行けなくなっちゃうしな、とぽつんとつぶやいた。

東京か。いつ発つんだろう？

あれからそのことについて悟は何も言わない。

いろんなことを思っているうちにあっという間に、甚悦ＩＣまで１５キロとの表示が見えてきた。

「悟。」

声をかける。

「うん。着いた？」

「あと１５キロだ。」

「うん。」

声がまだ半分眠っている。

表示に従ってレーンを左に寄り、出口に向かう。ＥＴＣのレーンを越え、一般道に出た後ファザードを出し、路肩に車を止めて悟を起こす。

「熟睡していた。悪かったな。」

「いや、全然。」

僕は出かける前に夕飯の後、少し眠っていたから眠気を感じることもなかった。

悟は運転席に腰掛けるとナビに目的地のキーワードを入力する。

「道、わからないの？」

「だいたい覚えているけどね。５年経っているだろ。それに５年前は高校生だったから自分で運転してないからうろ覚えなんだ。」

すぐにナビが目的地の別荘地の道順を案内し始めた。
「よし、行こう。」

38話

高速を降りて、ものの10分もしないうちに別荘地の看板が見えてきた。
「ここ？」
「うん。」
看板の表示に従って道を折れると、別荘地に上がってゆく道が見えてきた。暗くて周りがよくわからないけれど、林に囲まれた別荘地には何件かの別荘が立在している。さすがに道は細く、登り坂ばかりで雪も多い。
「冬は四駆でないと上がれないね。」
「ああ、昔おじさんと来た時にたまたま叔父さんがセダンに乗ってきて、まだ初冬だったから雪もそんなにないだろうって、たかをくくっていたら結構雪があって。車が登り坂をどうしても上がって行かなくって。」
「で、どうしたの？」
「皆で押したんだよ。叔母さんや妹や弟と。」
ああ、そうなんだ。兄弟と一緒に？
「小学生だったな。俺そん時。よく覚えているよ。あの頃はセダンばっかりだったし、今みたいに四駆に乗っている人ってあまりいなかったから。叔父さんは先端だったんだよな、ジープみたいなの乗っていてよく乗せてもらった。」
「そうなんだ。かっこいい叔父さんだね。」
悟は鳥目だと言いながらも、夜の雪道を難なく車を走らせ、あっというまにその叔父さんの別荘に着いた。
「たぶんこれだったと思う。」
懐中電灯を持って車を降り、その建物を灯りで照らしながら彼は言った。

灯りに照らされた建物は、こぢんまりとした黒い木材で出来たログハウス風の建物で、入り口まではちょっとした橋を渡っていくような感じになっている。その下には小さな小川が流れているみたいだ。今は雪があってよく見えないけど。そして出窓があって玄関先にはちょっとしたポーチがある。きちんと雪掻きがされてあって建物の脇には積んだ雪がうずくまっていた。

「すごい。いい別荘だね。」

「そう？だいぶ来ていないから荒れているかと思っていたけど、吾郎さんがきちんと管理してくれてるみたいだ。」

「吾郎さんって？」

「うん。ここの別荘地の管理人で叔父さんの友達なんだ。」

「隆博も明日会えるよ。」

明日って？と聞くと、吾郎さんはこの別荘地から車で２０分ほどの所の集落に住んでいる。山へ入るのにスノーシューなどの装備を彼の所で借りることになっているのと、挨拶がてらに訪ねると約束をしているのだと、悟は言った。

「いい人物だよ。温和で面倒見が良くてね。あと、その奥さんの文さんが又おもしろい人だから、きっと隆博も好きになるよ。」

？文さん？と言ったところで彼が思い出し笑いをしたので、その吾郎さんという人より、文さんという奥さんの方に僕は興味を持ってしまった。

「ま、とりあえず中へ。」

そう言って、玄関先にある木彫りのモアイ像をひっくり返すと鍵が出てきた。

「何でモアイ像？」

「さあ、叔父さんの趣味なんだ。こういうの。遅くなるって言ったから、吾郎さんがここへ鍵を置いていってくれたんだよ。」

悟が鍵を開けて玄関先の電灯をつける。

促されて中へ入ると、最初に目に飛び込んできたのが暖炉と、一枚板の木材で作られた大きなテーブルだ。

「すごい、暖炉だ。」
「初めて見る？」
「うん。」
その暖炉に近寄るとほのかに暖かい。
「この暖炉何だか暖かいよ。」
彼も近寄り手をかざす。
「たぶん吾郎さんが来て、暖めておいてくれたんだろうな。」
確かに面倒見の良い気のつく人物らしい。

部屋の中を見回す。奥に小さなキッチンがあって、右手にバスルーム。上にロフトがあってそこで眠れるようになっているみたいだ。
壁にかけてある時計を見ると4時を回っている。
「荷物は明日にしよう。そのままでいいよ。」
そう言ってロフトに上がり、悟は早々に毛布に包まった。僕も同じようにして荷物を床に放り投げ、着替えるのもそこそこにして布団に潜り込んだ。五郎さんがきちんと用意してくれていたらしく布団の中は暖かく、気のせいか陽に干した枯れ草の匂いがした。すると、ものの2分も経たないうちに隣から規則正しい寝息が聞こえてきた。
（もう寝てるや。）
よほど疲れているんだなと思った。
ここ最近は一緒にいても、ふと見るとどこかにもたれかかってうとうとしていることがある。だけど、その寝息を聞いていると、僕の方は段々目が冴えてしまって眠れなくなってしまった。
「悟。」
声をかけてみたが、ぐっすり眠り込んでいるみたいだ。
布団を抜け出して彼の側に行ってみる。そっと、頬に触れてみる。夜の冷気にひんやりとした頬の感触が手に残った。そのまま頬に口を寄せる。その気配に気づいたのか、
「…隆博。」

彼が薄っすらと目をあけて僕を見た。
思ったより深く眠り込んでいるのではなかったみたいだ。
「ごめん、起こした。」
「……」
返事の代わりに彼が僕の首に手をまわす。
「会いたかった。」

それが合図だった。
抱きあうと、僕らはお互いひどく遠い所にいて、やっとあるべき所に戻ってきたような感じがする。　抱きあいながらいろんな考えに揺さぶられ続ける。過去のこと、現在のこと、一週間後のこと、一ヶ月先、半年先…もっとその先のこと。頭に浮かぶいろんな思いは、押し寄せる快感の波に呑み込まれ消滅する。今ここにあることだけを考える。そのことにのみ集中する。だけど、こうしている時間の中に、時折、僕はひどくあせりのようなものを感じる時がある。手に入れているのに、それがすぐに消えてしまうような不確かなものに思えて…。
そうだ。飢餓感だ。心の中に湧き上がる飢餓感は消しようすがなかった。
（僕をこんなふうにしたのはあんただ。）
心の中で叫んでみる。
だけど、その叫びは呑まれ続ける。夜の闇の中に、彼の息遣いの中に。僕は苦しくてたまらなかった。だけどこんなに甘くて幸せな瞬間が他にあるだろうか。

恋をするということ。それと体の関係を持つということを切り離して考えることは難しい。心を手に入れた、心が通じたと感じることが出来たら相手の身体も欲しいと思うのは当然のこと。ぎりぎりの一歩手前までどうするか迷い、苦しんで、その先を飛び越えてしまったら？お互い繋がっているという充足感。一時の快楽に身をゆ

だねる刹那的な時間。その先に何もないとゆうことを僕らは知っているのに。お互いを求めずにはいられない。
その先に何もない？そうだろうか。本当に何もないのだろうか。こうしていることは本当に無意味なことなのだろうか。無意味なことだとしたら何故僕らはこのことで苦しみ、罪悪感にさいなまされて、それでも喜びを見出すのだろうか。まだ見えてこない。もうタイムリミットはすぐそこまで来ているのに。
どれほどの時間を一緒に過ごしてもその答えは見えてこない。
ただひとつわかっているのは、僕らにはもう時間がない。今度会う時は、僕らはまた違った関係で会うことしか出来ない。
それとももう2度と会えない。そう思うと、胸が苦しくなる。

39話

ロフト上の灯り取りの窓から射す光で目が覚めた。ぴーんと張り詰めたような山の冷気が頬を刺す。窓を見上げると、もうずいぶんと日が昇っているみたいだ。時計を見るともう昼近い。

「悟。」

声をかけてみるが隣で彼はぐっすり眠り込んでいる。昨日あのまま眠ってしまったから彼は上半身裸のままだ。毛布もかけずに。

（よく風邪ひかんなあ。）

彼の頑丈さに感心する。

毛布をかけてやろうと、背中越しに毛布を引きあげ、僕ははっとした。

明るい陽の下で見る彼の上半身の左のわき腹に、みみず腫れの様な古い傷を見つけたからだ。今まで明るいところで彼の裸を見たことがなかったのでちっとも気がつかなかった。

（火傷？）

人差し指の長さほどの傷が複数残っている。

（何だろう？ひどい傷跡だ。）

そう思って眺めていると、階下でどんどんとドアを叩く音がした。

（誰だろう？）

出て行っていいのかどうか迷い、彼を揺さぶるようにして起こす。

「うん。起きる。起きるよ。」

「悟、下に誰か来てるよ。」

「あ、本当か？」

彼はシャツを引っ掛けるとロフトの階段を下りて玄関先に向かった。

「はい？」

ドアに向かって彼が声をかけると、その人物は大きな声で

「おい、俺だ。」

と叫んだ。

「あ、吾郎さん。」

悟がドアを開けると、５０代と思しき白髪まじりの中肉中背の男性が玄関先に飛び込んできて悟に抱きついた。

「悟、待っとたんだぞ。」

「ちょっと見ん間に大きくなって。」

「いやだな。吾郎さん。俺、もう社会人だよ。」

子ども扱いされて彼はちょっと嫌そうな顔をした。が、もちろん目は笑っている。

吾郎さんと呼ばれた人物は、それは嬉しそうに、いつ着いたんだとか、もう昼近くになるのに家に来ないからどうしたのか見に来たのだとか、いろんなものを用意しておいてあるとか、そんなことをしゃべっていた。

よほど親しい人物らしい。そう思ってちょっと遠慮をしてロフトの階段に腰掛けて様子を見ていると、悟が、

「隆博。」

こちらを向いた。

「この子が悟の後輩か。」

吾郎さんは、人懐こそうな笑顔を僕に向けた。

「こんにちは。お世話になります。」

頭を下げると、悟が紹介してくれた。

「堀江隆博だ。」

「そうか。隆博くんか。悟がいつも世話になっとるな。」

「何言ってんだよ。世話してんのは俺んだよ。」

彼は吾郎さんに向かって悪態をついた。

「なあに言っとるが。きままなお前さんにつき合って、こん雪があるとこで山に入るなんて。奇特な。いい後輩やな。」

彼は悟の性格や行動を知り尽くしているらしく、放浪癖があることや、あちこちでふらふらとキャンプや寝泊りなど奇怪な行動をす

ることを話した。
　それで以前、冬の海に連れて行かれて、火を焚き宴会をしたことを話すと、
「やっぱり。いきなりやし、この子は強引やでびっくりするやろうな。」
「いや、別に。馴れました。」
　そう返すと、
「馴れんとこの子とはつき合えんやろうな。」
　吾郎さんは快活な大きな声で笑った。腹にあれこれ思わないような人の良い豪快な印象を受けた。
「で、あとで家来るんやろ？文が首をなごうして待っとるぞ。」
「うん。昨日着いたの遅かったんで今まで寝てたんだ。だから街へ出て、ちょっと買い物をしてから寄ります。」
「よし。」
　そしてその後、吾郎さんは別荘で過ごすのに必要な物やら、食料やらを用意しておいたことを話し、薪が積んである場所を教え、あれこれと世話をやき帰って行った。
　吾郎さんが帰っていくと、
「ここから車で少し行ったところに街があるんだ。そこで明日の買い物をしてから吾郎さんの家に行こう。食事とか用意してくれてるみたいだから。」
　悟はそう言って着替え始めた。着替える時に又ちらと見えた脇腹の傷跡が気になったけど、僕は口をつぐんだ。
　そして街へ行く車の中で明日の詳細を聞いて、必要な物を買い揃えるために駅前にあるパーキングに車を止めた。

　古い城下町で、こぢんまりとした駅も古風で何となく雰囲気がある。日にＪＲが数本停まるだけらしい。駅に沿うようにして並んでいる商店街を歩く。綺麗に雪掻きがしてあり、歩道には雪がなく歩きやすい。木彫りの人形や漆器などを扱う民芸店が何軒か並んでい

る。
　近くに温泉があり、そこは古い湯治場らしく、土産物を見ながら歩いている観光客もちらほらといる。その並んだ土産物屋を過ぎると、地元の人が買い物をするとみえる食料品店や、金物屋、本屋、床屋、喫茶店などが軒を連ねている。
　歩きながら悟は続けた。
「足何センチだったけ？確か俺と一緒だと思ったから、靴は俺のでいいし、吾郎さんちにスノーシューとストックはある。テントもそこで借りるし、買い足すのはあれとこれと……」
　悟はそう言いながらまるで住みなれた街を歩くみたいに、あちこちの路地を入り、商店街を右往左往する。どこにどんな店があるのか頭の中に入っているみたいだ。
「よく迷わないね。」
　そう声をかけると、
「うん、小学校の時から叔父さんと何回も来ているから。それにこの街は5年前とさほど変わらないよ。」
　そう言って必要な物を手に取り、あっというまに買い物を済ませた。そして商店街の端まで来ると、
「文さんにお土産を買っていくよ。」
　と言い、一軒の和菓子屋さんの暖簾をくぐる。どっしりとした古い木造のたたずまいが老舗の店らしい。
「何を買うの。」
「文さんは、ここの羊羹とそば饅頭が好きなんだ。」
　そう言ってショーケースを覗き込む彼の表情が、今まで見たこともないような表情だった。
　何て言っていいのかな。
　お母さんにお土産を買っていくような、ちょっとはにかんだような。
「両方買っていこうかな。こんなに食べきれないと怒られちまうか

な。」
それでも結局、栗蒸し羊羹とそば饅頭の両方を彼は注文した。
その様子を見て、僕は文さんという人を想像した。どうも彼は文さんに母親の面影を見ているらしい。母親ともあまり縁がないような彼が、嬉しそうに菓子なんぞを買っていく女性とは…。優しくておっとりとした感じの品の良い老婦人が目に浮かんだ。
「何にやにやしてるんだ？」
その様子を興味深げにじろじろ見ていた僕に気がついたらしい。
「だって、すごく嬉しそうなんだもん。それに女の人に何か買っている姿って、初めて見るし。」
「何言ってるんだ。俺はフェミニストだぜ。女性に対しては誰にでもこうなの。」
そう言って、菓子の包みを店員からひったくるようにして店をさっさと出て行った。照れている彼の様子がおかしかった。慌てて走って追いかける。
「待ってくれ。」
相変わらず足が速い。
「遅いぞ。」
追いついた僕を横目でにらみながら
「何だか嬉しそうだな。」
「だって。」
何だか僕は陽気になってしまった。何故だろう。たぶん悟が嬉しそうだからだ。
さっきの吾郎さんと会った時も、きっと心を許している人物なのだろうと容易に想像ができた。そういう気のおけない人たちに会うのを、彼は楽しみにしていたのだと思う。彼が嬉しいと感じている様子を見るのは、僕にとっても嬉しいことだからだ。

40話

パーキングに車を取りに行って、吾郎さんの家に向かう。吾郎さんの家はその商店街からさほど遠くない集落にあった。
「しかし家が少ないね。」
田んぼや畑が連なる県道を走っていくと、ぽつん、ぽつんと家が見える。住宅密集地に実家がある僕には珍しい風景だ。
「まあ田舎だからなあ。」
「今買い物した街までみんな出てくるの。」
「そうだろうな。」
「車がないと不便だね。バスとか通ってるのかな。」
「そうだな、1時間に1本くらいだろうな。今はどうかな。昔はほんと不便だったよ。だいぶ良くなったかもな。」
「いつ頃から来てるの。」
「初めて来たのは小学4年生の時かな。確か。」
「それからちょくちょく夏休みとか冬休みとか。」
「ふうん。」
そんな話をしていると集落が見えてきた。瓦屋根がどっしりとした古い民家ばかりだ。庭が広くて蔵のある家もある。その中の一軒が吾郎さんの家だった。大きな母屋と脇にちょっとした離れと物置があって、家のすぐ前に畑があった。家の前の広い庭に車を止めると、車の音を聞きつけた吾郎さんが玄関から飛び出してきた。
僕らを見ると
「やっと来たわい。」
と顔をくしゃくしゃにした。
「もう飲んでたんでしょ。」
悟は車から降りながら彼に尋ねた。確かに吾郎さんの顔はほろ酔い加減に赤く上気している。
「まあ、待ちきれんくてな。それにもう日も暮れる。」

時計を見ると午後４時をまわっている。
「ほれ、早よう。隆博くんも中に入って。」
吾郎さんに促されて玄関の引き戸をくぐる。さすがに田舎の古い民家だ。広い土間の続きに座敷が見えた。
「広いお家ですね。」
「なんが、古いだけよ。文がいつも掃除が大変だとこぼしとるよ。」
吾郎さんと話しながら土間で靴を脱いでいると、
「やっと来たか。」
女性の声がした。振り向くと、座敷の続きになっている台所の方から初老の女性が顔を覗かせた。
年齢は吾郎さんより上なんだろうか。後ろで結んだ髪の毛には白いものが混じっている。目が大きくて顎がきゅっと締まった顔は猫を連想させた。背は吾郎さんよりだいぶ低いみたいで小柄な女性だ。僕は頭を下げた。

「おう。隆博くん。これが女房の文だ。」
「堀江です。お邪魔します。」
「この子が悟の連れてきた子か。」
「そうだ。隆博くん。遠慮せんと早ようあがれ。」
靴を脱いで座敷に上がると、文さんが僕の鼻先まで顔を寄せてじっと僕の顔を眺めた。初対面で顔をまじまじと見られてどきまぎした。何と言葉を発していいのかわからずそのままでいると、
「睫毛長かね。」
「はあ？」
「なんちゅう睫毛が長いんよ。」
「そうですか？」
「うん。女の子に間違えられんと？」
（わ、言われた。）と思った。
実は睫毛が長いのはコンプレックスだった。あまりこのことには触れたくないんだけど、小学生の時はよく女の子に間違えられた。

しかも当時家の近所に、母親の友達が美容院を経営していて、よくそこに連れて行かれては髪の毛にパーマをあてられたり、セットさせられたり。つまりおもちゃにさせられていたんだな。母親に当時のことを聞くと、

「いかつい孝一と違って、ほんとに隆博は小さい時は可愛くてねえ。千夏のほうがごついくらいで。だからお母さん楽しくって、隆博が女の子だったら良かったのにって思ったくらいよ。」だって。

だから中学になったら髪の毛も短くして、野球部に入ったのに。ずいぶんその容姿については言われなくなって、睫毛が長いコンプレックスも忘れかけていたのに。こんなところで指摘されるとは。

何も言い返せずにびっくりしたまま突っ立っていると、吾郎さんから借りるスノーシューやストックなどを納屋で物色していた悟が玄関の引き戸をくぐりながら、

「文さん。あんまりいじめないでくれよ。」

と声をかけた。

「ああ、悟。元気そうで何よりや。」

吾郎さんほどのオーバーアクションではないが、それでも彼女は嬉しそうに悟の首に腕を回した。その文さんの背中をぽんぽんと叩きながら、

「隆博は神経細いからな。いきなり文さんの毒舌にはついていけんよ。」

「毒舌？ホントのことを言ったまでや。うちはこれでも褒めたつもりやけどな。」

「褒めたって？男に向かって女の子に間違えられるやって？」

「綺麗な顔しとるって、うちは褒めたつもりや。」

文さんはそっぽを向いた。悟は僕の顔を見て大笑いしている。

「そんなふうに思って見たことなかったけど、確かに隆博は綺麗な顔しているな。」

僕がむすっとしていると

「そうむくれるなよ。あれで文さんはお前のこと気に入ったみたい

だぞ。」
「あれで？」
と小声で返すと、
「ああやって最初からぶしつけに物を言うのは、その人を気に入ったという証拠なんだ。」
「俺も最初はわからんかったけどな。」
文さんが近づいてきて
「何を2人でこそこそしゃべっとる。」
悟の頭を叩いた。
「だって最初はびっくりするよ。文さんの物言いじゃあ。」
「何、言っとる。」
文さんが憤慨した。
そこへ吾郎さんが来て
「そうそう、文にはびっくりして当たり前や。悟も初対面で文にいろいろ言われてなあ。あれ小4の時やろ。隆司に連れてこられた時。ああ、隆司ってこいつの叔父やけどな。何を文が言ったか忘れたが、気に障ったんだろうなあ。悟が怒って出ていってしまって、俺んら泡くって夜道をずいぶん探して歩いたことを覚えとるよ。」
「え、そうなんですか。」
「ほんときつい子でなあ。全然しゃべらんし、口ついとんかと思ったよ。いつ来ても生傷がたえん子でなあ。」
（生傷？）
そこで文さんが吾郎さんをたしなめるように目くばせをした。
「お父さん、早ようあっちで飲むもん用意せんか。」
僕がちらっと悟の方を見ると、
「そうだよ。昔の話はいいよ。恥ずかしいことばっかりだ。それより喉が渇いたよ。早くなんか飲ませてよ。」
そう言って顔を赤くして少し酔っ払っている吾郎さんの腕を取り、座敷の方へ向かった。
「おう。隆博くんもこっち来て飲め。」

「はい。」
僕もふたりに続いて座敷の方へ行こうとすると、文さんがばっと僕の腕を掴んだ。
「隆博はうちを手伝え。」
「え？」
「夕飯の支度や。」
「はあ。」
（で、何で僕が？）（しかもいきなり呼び捨て？）
と思ったが、文さんは僕の顔を見て、いたずらっ子のような嬉しそうな顔でにかっと笑った。やはり気に入られたってこと？
エプロンをしてタオルで頭を巻いた文さんの後に続きながら僕は思った。なるほど悟が思い出し笑いをするはずだ。僕が想像していた上品で優しげな老婦人のイメージはおもいっきり壊れていた。でも初対面で言いたい放題。なかなか面白そうな女性だ。

41話

文さんに続いて台所に入ると
「ほれ。」
と言って彼女がエプロンを僕に放り投げる。
「いいですよ。」
エプロンを返そうとすると
「服が汚れるやろ。」
無理やりエプロンを首からかけようとする。が、文さんの身長じゃ僕の首まで手が届かない。その様子を台所の入り口にもたれかかって悟が見ていた。
にやにや面白そうに見ている彼に向かって
「何見てんだよ。」
悪態をつくと
「いや、いいコンビだなあと思って。」
「なんじゃ、悟。お前も手伝うんか？」
「やだなあ。俺が料理全然出来ないの知ってんでしょ。」
苦笑いしながら、彼はさっき買った菓子の包みを文さんに手渡す。
「おう、これは金蝶堂の。」
彼女の口元から笑みがこぼれる。
「いつもの。羊羹とそば饅頭。」
「おお、すまなんだな。」
やはり好物みたいだ。嬉しそうな文さんが僕に向かって
「うちは甘党でな。ここのが一番や。」
「後で頂くで、悟。仏壇へ飾ってきてくれ。」
と言い、包みを悟の方へ渡した。
「うん。」
そのやり取りを見ていると母子みたいだ。目尻の下がった彼の表情を見ていると特にそんなふうに思う。仏壇のある座敷へ行こうと

して悟が振り返って言った。
「そうそう、文さん。隆博は料理すごく上手だから。何でも出来るよ。」
「おう、そうか。」
嬉しそうに、文さんはがばっと前歯を見せた。
僕はそんなことはないと手を振って見せたが、彼女は早速包丁を僕に持たせ、あれこれと指示をし始めた。
（やれやれここまで来て料理しないといけないなんて。）
心の中でため息をつきながら、指示された蓮根の皮を剥いていると、
「今、やれやれ何でこんなとこで料理をしないかんのやと、思っただろ。」
文さんが僕の心の内を見透かした。
「いや、そんなこと。」
（う〜ん。なかなかの人物。）

てきぱきと手際のいい文さんの横で指示された通りに手伝っていると、文さんはあれこれと僕のことを聞いてきた。学校のこと、専攻している学科や勉強している内容。将来は何の仕事につきたいのかとか。家族のこと、兄弟のこと。悟とのつき合いのこと。彼女は快活ではきはきとし、毒舌ではあるがユーモアがあり、自分たちの生活のことなどを話し僕を笑わせた。
話していると、彼女が頭の回転の速い賢い人物であるのがわかる。悟が彼女を好きな理由が何となくわかった。
だいたいの下ごしらえはしてあるらしく、2人でやっているせいかあまり時間もかけずに何品かの料理が出来た。
「さ、後はお盆に乗せて運ぶだけやな。」
「はい。」
僕はお盆に料理を乗せながら気がついた。
（そうか、文さんは僕に料理を手伝わせたいわけじゃなく、僕がど

んな人間かみたかったんだな。）
なるほど、悟が連れてきた人物がどんな人間か彼女は興味があったみたいだ。それだけでも彼女がどんなにか悟のことを可愛がっているかよくわかる。

ふたりはだいぶ出来上がっているらしく、座敷の方から吾郎さんの豪快なしゃべり声が聞こえてきた。
「それで、東京へはいつ？」
「うん、２５日には。この旅行が終わったら。４月に入ったらすぐ入社式があるし。」
「そうか、ぎりぎりまでこっちにおるんやな。」
「ああ。」
（２５日？）
東京へ行く日。僕が聞かなくてはいけないと思いながら先延ばししていた事を、吾郎さんが聞いていた。聞くとはなしに聞こえてしまったが、その日にちを聞いて急速に僕は現実に引き戻された気がした。
（すぐだ。あと１０日。）
一瞬立ち止まった僕の様子に文さんは気がつかないふりをした。そしてわざと大きな声で、
「おまたせ。」
そう言って座敷のガラスの引き戸を開けた。
顔を真っ赤にした吾郎さんがこっちに向かって
「おつかれさん。隆博くん悪かったなあ。手伝わせてしもうて。」
「いいえ、別に。」
「悟の言ったとおりや、この子は料理がうまいなあ。手際がいいし。」
「そうだろ。俺もよう、飯作ってもらったから。」
「そうか、この子嫁さんにもらったらどうや。」
文さんは冗談を言った。そうしたら吾郎さんが笑いながら

「文。悟はもう嫁さんをもらったらしいぞ。」
「え、いつ？」
文さんも吾郎さんも、そのことは今日初めて聞いたみたいだった。
「夏に入籍だけした。」
文さんは悟に近づいて、又頭をぽかりと殴り
「なんでそんな大事なことをさっさと言わん。」
と怒った。
「ごめん、恥ずかしくて。」
「なんが恥ずかしいか。」
「だってこれらしいわ。」
横で吾郎さんが、お腹が膨らんでいるゼスチャアーをした。

文さんの強い平手打ちが飛んだ。
ぱしーんと音が鳴った。
「痛。」
僕は文さんの顔を見た。怒っているような、泣き出しそうな複雑な表情をしていた。
「まあまあ文。ええが。」
「だって順序が逆じゃ。それにまんだ就職もしとらん子供や。」
「まあ、そうだが、もう卒業で就職先も決まっとる。心配いらんよ。」
吾郎さんがフォローした。
「気楽そうなことを言いおって。」
悟は文さんの言うことを真摯な表情で聞いている。
「そんでいつ産まれる。」
「4月。」
「来月か？」
そこでまた文さんの平手が飛んだ。
「嫁さん放かってこんとこまで来たんか？」
「許可もらってるよ。」

悟が子供のような表情をした。
「まあいいが、文。悟も所帯持ったらそんな遊んどれんし。せっかく来てくれたんやし。」
「まあ、そうやけど。」
文さんは大人しくなった。
そして真剣な厳しい目を向けて悟に聞いた。
「ほんでお前さんは幸せなんか。」
悟は黙って頷いた。
文さんはさっき僕にしたみたいに、鼻先まで顔を近づけて彼の目をじっとのぞきこんだ。悟はきちんと正座してぴくりとも動かずに文さんの目を見ていた。
文さんは何を感じ取ったんだろう。彼が僕に話した?迷い?を彼の目に見たのだろうか。それとも?
「まあ、いい。実際の生活は厳しい。大変なことばかりやし、人の親になるのは並大抵のことでないぞ。」
とだけ言った。
「うん。」
悟は短く答えた。僕はそのやりとりを見ていたが、悟の表情からは何も読み取ることは出来なかった。

42話

「まあ、めでたいことやし。乾杯するぞ。」
吾郎さんが陽気に言った。
「隆博くんは手伝いで、まんだ何も飲んどらんしな。」
彼はコップにビールを注いでくれた。
「ありがとうございます。」
コップにビールを受けると
「かわいそうに。初対面でいきなり手伝わされてなあ。喉かわいたやろ。」
吾郎さんが文さんの方を向いた。
「ええが、この子うち気に入ったわ。」
(ほら、そうだろ。)
僕の方に悟が目くばせをした。
文さんはにこにこと、さっきとはうってかわった柔らかい表情で、料理を僕らに取り分けてくれた。
「これ何ですか?」
小皿に乗せられた、大きな雑魚のような魚の唐揚げを僕は指差した。
「稚々子や。」
「ちちこ?」
「魚?」
「そうや。から揚げにして佃煮にしたもので、この辺の郷土料理だよ。」
悟が説明した。食べてみると香ばしくてとても美味しい。
「酒のつまみじゃな。これは。」
「この辺で捕れる魚なんですか?」
聞いてみると、吾郎さんは釣りが趣味で、だいたい魚は自給自足らしい。

「この稚々子は夏になるとこの辺の川ではぎょうさん捕れてな。網を持って行って、すくうと面白いように捕れる。それを佃煮にして保管しておき、冬場に食べるんだよ。」

吾郎さんと文さんは、家の前の畑で自分たちが食べる分の野菜を作り、釣りをして、だいたいは自給自足の自然の生活を楽しんでいるらしい。別荘地の管理などで外貨を稼ぎ、必要な物はさっき僕らが買い物をした街まで行き、買ってきて生活をしていると言った。

「彼の叔父さんのお友達なんですよね。」

悟に聞いたことを尋ねてみると、

「ああ、隆司とは元の職場の同僚でな。」

「そうなんですか。」

「T市にある商社に勤めていた。あれ47歳の時やったなあ。ああいうサラリーマン生活が性にあわんくてな、どうしたもんかと悩んどった時やった。ちょうどリストラの波が押し寄せてきおって、早期希望退職者を会社が募ったんや。こりゃいいわと俺はさっさとそれに応募して、たんと退職金をもらって辞めて田舎で暮らそうと。文にはだいぶ反対されて離婚寸前になったけど。」

「結局、お前さんが押し通したんや。」

文さんは呆れ顔をした。

「それで、前から住みたかったこの土地に引っ越してきて、つてもあってな。今の別荘地を格安で譲り受けたんだ。その管理とこうやって自給自足の農業生活でなんとか食べているんだが、この生活が俺には合ってると思ってる。」

「うちはこんなへんぴなとこ嫌やったんやけどな。」

「でも、文だってすぐに馴染んだんやんか。」

「そうか？」

「こいつは色が白うて弱々しくてなあ、こっち来てからやん。こんなん丈夫になって強うなったんは。」

ええ、この人が弱々しいって？

前の文さんの姿が想像つかなかった。
「でないとやっていけえへんかったんや。」
僕は文さんのことを、猫のような感じの女性だと思ったが、なるほど、若い時はたぶん線が細くて繊細な感じの女性だったんだろうと思った。田舎の生活で大変たくましく、強くなったんだろうと今の文さんを見て納得した。

座敷の円卓の上に並んだ料理を、文さんがあれこれと取り皿に取ってくれた。中でも美味しいと思ったのは、お豆腐をステーキにして、鉄板に長芋の擦ったのを流し込んだ物だった。ちょっと豆腐が硬くてしっかりとした食感で、美味しいと彼女に言うと、それもこの辺の料理だといった。
嫌いな食べ物はないのかと聞かれたので、別にないと答えると、彼女は
「ええことや。悟は好き嫌いが多くてな、大変やったんやで。」
悟は罰の悪そうな顔をしたが、それを聞きながらもくもくと黙って食べていた。
「おお、そうやな、だいぶ治ったけどな。あれは別荘地を管理し始めて2、3年経った頃からやなあ、隆司が悟を連れて来始めたのは。文が何作っても箸をつけんくてなあ。ほとほと困ったよ。」
「ええ、そんな我儘だったんですか？」
僕は笑った。だって、今だってあれはまずい、これは嫌だと食べ物に関してはうるさいんだから。鰻はだめでしょ、スパゲティだって僕は大好きだけど、悟は嫌いだし。あと何だっけ？
「あんまりこういう家庭料理みたいなの食べたことなかったんだよ。それだけだ。」
彼は反論した。
「まあ、来始めた頃はほんととっつきにくい子でなあ、きついし、しゃべらんわ、食べんわで。でもこの辺の生活が面白かったんやろうな。そのうちに馴染んでね。この子の兄弟やら、その辺の近所の

子供やら連れて、夏は川へ泳ぎに行ったり、釣りをしたり、冬はその辺の山に入ってクロスカントリーやらスキーをしたり。隆司には子供がおらへんかったもんで、悟のことをたいそう気に入っていて、ほんとの子供みたいに夏も冬も連れて遊びに来ておったからなあ。」
「叔父さん、今は？」
悟が答えた。
「仕事で海外出張。イスタンブールだ。もう3年はあるね。」
「そうやな。」
吾郎さんが答えた。
「隆司がおらん間に悟が結婚したんて聞いたら、びっくりするやろうな。」
「うん。一応手紙では知らせた。」
「そうか。」
そこで吾郎さんはちょっと言いよどんだ感じで、彼に聞いた。
「親父さんは？」
「うん。承諾してる。」
「そうか。」
「最近、どうなん？」
文さんが聞いた。
「うん、普通。」
「結婚のことはなんて。」
「うん、喜んでくれたよ。」
親父さんとはうまくいっていないことを聞いたことがあった。それでも結婚が決まった頃から少しずつではあるが行き来していると言っていた。たぶん、ふたりもそれを心配しているんだろう。
「そうか。」
そこで、文さんは興味津々で相手の女性のことを尋ねた。それについて悟は簡単に答えただけで、あまり深くは説明しなかった。
「文さん、ビールないよ。」
彼は空になったビンを指差して、追加をねだった。

「はい、はい。」
話を変えようとした彼の意図が僕にはわかっていた。

43話

文さんがビールを取りに行って席に戻ると、今度は僕の話題に話を振られた。
「隆博くんは悟と同じ学部なんやて？」
吾郎さんが聞いた。
「ええ。」
あまり学部内では顔を合わしても話したことはほとんどなくて、ワークショップで同席したのがきっかけでのつき合いだと説明すると、
「まじめなヤツでな。新入生でも、飲み会やサークル、合コンなどで遊んでるやつは結構いるのに、ほんと真面目に勉強してて、ワークショップでもすごい成績良くてな。俺んら上のヤツからも評判が良くてな。礼儀正しくて。」
悟が僕を褒め始めたので、
「やめてくれよ。そんなんじゃないよ。飲めなかったからそういうのに出なかっただけだって前言ったじゃないか。」
そう言うと、
「え、こんだけ飲めるのにか？」
吾郎さんがびっくりした。
「それを飲めるようにしたんだよ。俺が。」
悟が自慢げに言った。
「悪いことばっか教えよって。」
文さんがまたぼかりとやった。
「そんなことないですよ。先輩は勉強もスポーツも何でも出来るし、下の者にも面倒見が良くて、僕ら後輩連中の間では人気あるんですよ。結構勉強も見てもらったし、今のアルバイトだって。」
「アルバイトは何を？」
「俺が前やってたの引き継ぎさせたんだ。」

「翻訳のか。」
「ええ。」
「隆博は翻訳家になるのが夢なんだ。だから目標を持って勉強している。遊び半分で親に金出して貰って、のんべんだらりと来ている連中とは違うよ。」
「あんまり褒めると後で何かあるんかなあって思っちゃうよ。」
と言うと、
「別になんも。褒めて悪いか。」
悟が目を細めた。
吾郎さんが
「まあ、だいぶ褒めとかんと明日の強行ツアーにはつき合ってもらえんからなあ。」
笑って彼を叩いた。
「そうかな。えらいかなあ。吾郎さん。」
急に心配そうに悟が訪ねた。
「うん、今年は雪が少ないから、そんなに積雪はないと思うけど。隆博くん、雪山は？」
「初めてです。」
神妙に答えると、
「山は？」
兄貴に連れられて行った山の名前をいくつかあげると、登山もたしなむ吾郎さんはふんふんと聞いており、おもむろに
「でも、雪山は初めてだとあんまり傾斜のひどいところはやめたほうが無難かも知れんぞ。」
と答えた。
「そうかなあ。」
「うん。」

そしてふたりして地図を広げて明日のルート変更の話をし始めた。それを脇で聞いていると、台所で作業をしていた文さんが来て、

「あれんら話しているうちに風呂に入らんか？」
と尋ねてきた。
「風呂？いいんですか？」
「今沸かしておる。入っていけば帰って寝るだけだから楽だ。」
「風呂からあがったら美味しい林檎をもらったから、むいてやる。それに悟にもらった菓子を食べないかん。」
好意に甘えることにした。
文さんに案内されて風呂へ行く。勝手口から裏へ回るよう言われたので、家の外にあるらしい。風呂のある建物は別になっていて、トタンと木板で囲った小屋が見えた。文さんに促されて中に入ると、なるほど、釜風呂だ。初めて見る。
「すごい。」
感心すると、
「こういう風呂は初めてか？」
「ええ。」
ひとりで入るにはちょっと大きめで、丸い楕円形の鍋を連想させるような、内部が少し赤茶けたような鉄の釜の風呂桶があり、脇にすのこが敷いてあり、脱衣場が作ってある。風呂桶の真横に窓が作ってあり、そこから外をのぞくと、下に薪をくべるようなかまどが作ってある。
「毎日沸かしているんですか？」
尋ねると、
「うん、結構大変なんでな、夏場は毎日沸かしておったが、冬場は2、3日に1回くらいかな。」
「そうですか。」
「うちが下で薪をくべてやる。湯加減が少しぬるいかもしれん。」
文さんは風呂桶の下に板を敷いて入るように指示して外へ出た。熱くなった釜底に足が触れると火傷をするからだ。言われたとおりにして風呂桶に身を沈めると、鉄の匂いなのか何なのか、何ともいえない香ばしいような、草のようなかぐわしい香りがした。湯が柔

らかくて身体の芯まで暖まるような感じがした。
「湯加減はどうや？」
外から声がした。ぱちぱちと薪が燃える音がした。
「いいですよ。」
「少しぬるいか？」
「もう少し熱い方が好きだな。」
「そうか。」
文さんが薪をくべる音がした。
「どこの温泉よりもいいですよ。こんなお湯初めてだ。」
「そうか、普通の家庭用のホーロー釜よりこういうのが暖まるからな。」
「うちもここへ来て、こんな風呂は手間がかかるし、改造して普通の家のような風呂にしようとあの人に言ったんやけど、あの人はこの風呂が気に入っていて。そのうち、うちもこの風呂が気に入ってな。冬はほんと暖まって湯冷めしにくい。」
確かにじんわりとゆっくり身体の芯から温まるような気がする。
僕は薪をくべてくれる文さんと、窓越しに話をしながら湯船につかる。

「文さん？」
「うん。」
「先輩は…。」
「悟と呼んどるんじゃろ。」
ああ、聞こえていたのか。それで僕は言い直して
「うん、悟はいつも友達とか誰か連れて来ていたんですか？」
「そうじゃなあ。高校2年くらいが最後やったかなあ。それまでは部活の友人やら学校の友達やら連れてきおったが。近所の子供たちもおったし、隆司と2人で来る時もあったし、いろいろやな。」
「そうですか。」
「悟はいつも大勢の人に囲まれている。学校でもそうでした。僕な

んかはどっちかというと人に囲まれていると疲れてしまう方で、2、3人の仲間といる方が気が楽でした。だから、人気のある人でいつも大勢の人に囲まれている悟が僕のことを覚えていて、ちょくちょく僕がバイトしている店に遊びに来てくれたのがとても意外で。」
「そうか。だけどあの子は寂しい子や。」
「確かに大勢の人に囲まれていることが多い。うちに来る時も友達を何人か連れてきて。でもうちはいつも気になっておった。」
「何がですか？」
「心がそこにないんや。」
「えっ？心が？」
僕は聞き返した。文さんは言った。
「ああ、人に囲まれて楽しそうにしていても、心ここにあらずっていうのかな。心底楽しんでいない、心はそこになくてどこかに行ってしまっているような、そんな気がして。」
僕はいつも仲間に囲まれていた悟の姿を思い出してみた。
「皆に人気があって、スポーツも勉強も音楽も、何もかもスーパーマンみたいに秀でていて、そんな人なのに？」
「それがあの子の鎧だと、思ったことは？」

僕ははっとした。海辺で聞いた話。僕に抱かれて放心したように、砂の上に寝転がっていた彼の表情を思い出した。
「うちはあの子が可愛い。うちんらにも子供がおった。女の子で小学校3年やった。一人っ子やったんやけど、ここへ来る前に事故で。」
文さんは沈黙した。そうだったのか。
「ここへ越して来て、隆司があの子を連れてきて。うちは悟に自分の死んだ娘を思っとたんやろうな。それもあって可愛くて。」
僕は聞いてみた。
「ここへ来たばかりの時は、だいぶ今とは性格が違ったみたいですね。」

「うん。きつい目をして、無口で、大人なんか信用しとらんというような顔してうちんらを受つけんかったな。だいぶ長い間。」
「それを叔父さんが？」
「隆司には懐いておった。うちんらが隆司にとって気の許した友人であることが、悟にもだいぶわかるようになると、うちんらにも懐くようになってきたが、初めて会った時のあの子のきつい目が忘れられんくてな。」
「そうですか。」
きつい目。人を信用しない目。そんな目をした子供の頃の悟を僕は想像してみた。そしてそれと同時に脳裏に浮かんだのは朝見たあの古い傷跡。温まってきた僕は湯船から出たり入ったりしながら、聞いてみようかどうか迷っていたが、思い切って聞いてみることにした。

44話

「文さん、変なこと聞いてもいいですか。」
「何や？」
「文さんは子供の頃から悟のこと知っているんですよね。」
「そうやな。」
「最初に吾郎さんが悟のこと、生傷が絶えん子やったって言ったんですけど、あれは？」
　文さんは黙った。聞いてはいけないことだったんだろうか。僕はばつが悪くなって気まずい雰囲気を打ち消そうと、
「いや、やっぱりいいですよ。それより、もうお湯このくらいの熱さでいいですよ。」
　と笑った。すると文さんは代わりにこう答えた。
「隆博。お前さんになら話しても悟はかまわんと思っているだろうと思うから、話すわ。」
「あの子がここへ来始めた頃、悟を風呂に入れようとして着替えを持ってきた時に、見たら、体中に細かい傷がついておったんや。すぐに変やと思って。隆司にそれとなく聞いてみたら、あの子の親父さんが。」
（ああ、やっぱりそうか。）
　子供に自分の敷いたレールを歩かせようとする威圧的な父親の姿が目に浮かんだ。反発していた彼に親父さんは面白くなかったんだろう。
「腹の傷跡は？」
「見たんか？」
「ちらっと。いつ頃の傷？」
　文さんは答えた。小学校高学年くらいの時の話らしい。彼の母親が浮気をしていたのが発覚したらしく、それに激昂した彼の父親が母親を責めたらしい。その時に母親に手をあげた父親に反発した彼

に矛先が向かったらしいが、詳しいことはそれ以上文さんも知らない。母親は従順で父親の言いなりになるような人だったらしいが、暴君である夫から逃れ安らぎを求めたかったんだろう。その母親をかばった彼に、妻に向けるべきの怒りを彼に向けたのか。

「隆司がそのことをずっと気にしておった。自分には子供もいないし、悟をひきとりたいと何度も、何度も、あれの父親と話をして。」

「何故、お母さんは悟を連れて離婚しようとしなかったんですかね。」

「わからん。あれの母親のことは。隆司はあれの母親の兄弟だから、だいぶ母親にも説得したとは思うがな。とにかくあの子の父親は首を縦に振らんくてな。中学を卒業した時に、隆司が後見人になってとにかく父親の元から離したんや。それが悟の希望でもあったしな。」

「そうですか。」

そんなつらいことがあったんだ。そんなところはおくびにも見せずにいつも明るくて、強気で。でも、時々ふっと寂しそうな、疲れたような顔をすることがあった。彼の心の内の闇を見たような気がした。

窓の外で薪がぱちぱちと燃える音がする。窓の外から夜の冷気が入り込んで、遠い所で何かが鳴く様な音が聞こえた。少しの間僕らはお互い口を聞かずに黙り込んでいた。すると、文さんが思い切ったように声をかけた。

「隆博。」

「はい。」

「うちなあ、今日お前さんに会って思ったんや。」

「何をですか？」

「さっき、あそこでみんなで食事をしておった時に、悟がじっとお前さんを見ておった。あんな目をうちは初めて見たよ。長年、悟を見て来たけど、あんな安心したような顔を初めて見た。大勢の人に

囲まれていても心はここにないことをずっと気にしておった。でも、今日はあの子の心はここにおる。それがはっきりわかったよ。」
彼女は言葉を区切った。
「どうしてなのかも。」
僕はちょっとの間、答え様子がなく黙っていた。何と返事をしていいものか。彼女は知っている？頭の良い勘の鋭い人物に見受けられる。僕らの関係を気づいているのか。
黙っている僕にさらに彼女は話を続けた。
「隆博。悟にはお前さんが必要だと思う。支えになってやってくれ。」
風が木々の間を通り、又遠くの方で鳥のような鳴き声が響いた。
僕は言った。
「はい。」
とだけ短く答えた。複雑な気持ちだった。

風呂から上がると2人は碁を並べていた。
「どうだった？風呂。」
悟が聞いてきた。
「すごく温まるね。初めてだよ、ああいうお風呂。」
「そうか。」
文さんが来て彼に言った。
「悟も入ってきな。」
「うん。」
そう言って彼が席を立ったので、僕が吾郎さんの碁の相手をすることになった。
「腹はふくれたかな。」
「ええ、文さんは料理が上手ですね。どれもおいしかった。」
「ほうか。」
「田舎の飯ばっかりで若いもんには口に合わんかと心配しとったが。」

「いえ、そんなこと。」
碁をしながら吾郎さんが明日のことを話し始めた。
「さっき、地図を見ながらコースを少し変えさせたでな。あいつ、やっぱりちょっと強行なコースを立てておった。」
（やっぱり。）
「隆司と何回も行っているコースだけど、雪山をやったことのないもんにはちょっとえらいと思ってな。」
「助かりました。」
そう笑うと、
「天気も悪くないみたいだし、ほんとに真っ白で綺麗だぞ。」
「吾郎さんも？」
「ああ、わしも隆司と何回か行ってみたことがある。」
「そうですか。」
吾郎さんは明日必要な装備は揃えて車に積んでおいたと話した。
そして、明日途中まで同行する旨を話した。
「でも、何から何まで。」
「いんや、かまわんよ。あんなとこに車を留めておいたらバッテリーが凍ってしまうわ。しかも借りた車らしいが。」
彼の話では、別荘地から釜トンネルの手前までは車が入れる。そこから先は、車は通行止めなので、トンネルの手前に車を留めて行くつもりでいたのだが、日帰りならいいが途中でテントを張るつもりなら、夜あの場所に置いておくと寒さでバッテリーが凍ってしまうことがあるらしく、それを心配してそこまで車で乗せて行ってやるというのだ。
彼と明日のことをあれこれ話していると、悟が風呂から上がって来たので、文さんが果物をむいて持ってきた。そしてさっきのお菓子を食べながら、お茶を飲んで話をしていると夜も更けてきたので、僕らはそろそろおいとますることにした。明日は5時前に吾郎さんが迎えにきてくれるらしいので、あまり夜更かしするのも良くないと思って。

車に乗り込むと、後ろのハッチバックにはテントやらスノーシューやらの装備がつんであった。
「忘れ物はない？」
と聞くと、
「ああ、吾郎さんと一緒に積んだから大丈夫だよ。」
彼が答えた。
文さんと吾郎さんは庭先まで出て見送ってくれた。お礼を言って車に乗り込むと、吾郎さんが家の中に入っていく姿がルームミラー越しに見えた。でも、文さんは僕らの車がうーんと遠くまで、その姿が見えなくなるまで庭先に立って見送ってくれた。それを僕は車のサイドミラーでずっと見ていた。
文さんの姿が見えなくなると、僕は悟に文さんの話をした。
「おもしろい人だろう。」
「ああ、想像していた感じとはずいぶん違ったけどね。」
「どんな想像？」
「悟が目尻を下げてあの店で菓子を選んでいる姿を見て、ずいぶんと上品で優しげな感じの老婦人を想像していたんだ。でも、いきなり初対面で呼び捨て。？隆博、台所を手伝え。？だもん。」
悟は大きな声で笑った。
「うん、うん、いつもあの調子なんだ。ぶっきらぼうに見えるけど、口も悪いけど、とても優しいんだ。本当に人のことを細かいとこまで気を配って考えていてくれるしね。面倒見も良いし。」
ああ、彼は本当に文さんのことが好きなんだな。
「悟は文さんに似てるね。」
「どこが？」
すっとんきょうな声を上げる。
「口が悪いところ。」
「ああ、違いない。」
ひと呼吸おいてつけ加える。

「面倒見が良いところもね。」
そう言うと彼は照れたように横を向いた。

45話

別荘に着くと、僕たちは明日の荷物を確認し、早々に寝床にもぐりこんだ。目覚ましを3個も並べて。
「起きられるかな、自信がないよ。」
「何で？」
「飲みすぎたよ。」
「あのくらいでか？」
だからあんたみたいに強くないっていうの。彼もだけど吾郎さんもかなりの飲兵衛だな。そう思いながら布団にくるまっていると、あっというまに眠りに落ちた。

案の定、次の日の朝、頭が少しがんがんした。
「二日酔い？」
僕の冴えない顔色を見て、悟が聞いた。彼は今起きたばっかりの僕と違って、もうすでに身支度を整え、すっきりした顔でコーヒーを沸かしていた。
「大丈夫か？」
コーヒーの入ったカップをキッチンのカウンター越しに僕に渡しながら、彼が聞いた。
「うん、何とか。」
「すぐに吾郎さんが来るぞ。早く用意しろよ。」
「うん。」
コーヒーを流し込み、顔を洗いにバスルームに行く。歯を磨き顔を洗ってタオルで顔を拭いていると、そらきた。玄関のドアをどんどんと叩く音がする。着替えながら様子を伺っていると、やっぱり吾郎さんだ。まだ約束した時間より早い。せっかちなのは吾郎さん似か？血族でもないのに、せっかちなのは吾郎さん似、口が悪く、面倒見が良いのは文さん似。笑いが込み上げてきてくすくす笑って

いると、
「おい、吾郎さん来てるぞ。早くしろよ。」
と叱責が飛んだ。
「ごめん、すぐ出るよ。」
外には吾郎さんのピックアップが停まっていた。
「おはようございます。」
声をかけると、
「おお、おはよう。大丈夫か？昨日はずいぶん飲ませてしまったが。」
吾郎さんが僕の顔を覗き込んだ。
「大丈夫だなあ？隆博。」
背後からやって来た悟が僕の手にザックを押し付けた。
「ああ、ごめん。」
ちょっと酒が残っているみたいだ。荷物を忘れるなんて。
「じゃあ、行こうか。」
悟のエクストレイルに吾郎さんが乗り込んで言った。彼が助手席に座り、僕は後部座席に座った。
まだ、夜明け前で道は暗く、明かりのない別荘地の細い下り坂を吾郎さんは馴れたハンドルさばきでどんどん下っていった。
「やっぱり道凍っとるわ。」
「もう3月の半ばなのに？」
僕が聞くと、
「この辺では3月はまだ冬だよ。」
悟が答える。
細い道をどんどん下り県道に出る。車がぼちぼち走っている。県道を15分くらい走ると、前方に古い大きな、今にも崩れ落ちそうなトンネルが見えてきた。
「あれが釜トンネルだよ。」
なるほど。トンネルの数メートル先に車を何台か止めることが出

来るスペースがある。ちらほらと僕らみたいなトレッキング客が荷物を出したり、装備を身につけたりしている。そのスペースに吾郎さんは車を止めた。ここまでの道は綺麗に除雪されていて、路肩には５０センチほどの雪が積もっている。こんなに雪があるのかと感心して見ていると、

「この辺の雪で感心してどうするんだ。奥はもっとあるよ。」

彼が言いながら僕のザックにスノーシューをくくりつける。事前に装備の使い方などを聞いていた僕が

「まだいいの？」

と聞くと、

「トンネルの中を出て、しらぬだの池までは整地されているから雪はないよ。スノーシューをつけるのはその先でいい。」

吾郎さんが付け加えた。

「トンネル内は所々凍ってるからな、気いつけて。」

僕らが準備を済ませたことを確認すると吾郎さんは帰って行った。

「さ、行こうか。」

嬉しそうに悟が笑顔を見せた。こういうところに来るとホントに嬉しそうな顔をする。

東の方向から太陽が昇り始める。うっすらとした日の出の光が、岩を穿って掘ったトンネルの表面を映し始める。

僕はザックを担いで思わずその重さにびっくりした。出遅れた僕を振り返って、

「ちょっと荷物が重いか？」

と聞いた。

「いや、大丈夫だ。」

テント泊なので２０キロくらいはあるかもしれない。

「しらぬだの池まで行こう。そこで重かったら俺が少し持つよ。」

冬期通行止めで硬く締まったゲート脇を抜け、トンネルに続くロ

ック・シェードに入ると、半円形となったトンネルの入り口が現れる。
トンネルの内部に入る。電灯はついているが、所々切れている箇所があって、トンネル内はうっすらと暗闇に包まれている。暗い湿ったトンネル。上からぽちゃん、ぽちゃんと音を立てて水が落ちてくる。雪はないが、やっぱり所々凍っているみたいで、足をすくわれそうで怖い。幅員の狭くなったトンネルは大きく右へ曲がり、そして左へ大きくカーブする。その傾斜のきつさに驚いた。息が上がる。荷物の重さが肩に食い込んでくる。かなりしんどい。
「大丈夫か。」
彼が声をかけるのに
「うん。」
何とか返事を返す。荷物を担いでいるせいか結構暑い。
「かなり勾配がきついね。」
と返すと、
「クランク状に屈折して続くので、実際の距離より長く感じるかもしれん。」
汗もかかずに彼は答えた。
「凍っているけど、アイゼンをつけるまでもないだろう。でも転ばないように気をつけて。」
「ああ。」
一面に凍っていた場合のために、軽アイゼンをザックの上部に入れて出発したが、このくらいなら必要ないと彼は言った。それでもアイゼンをつけてあがってくる人たちもいるみたいで、カツーン、カツーンとアイゼンが路面を打つ音が後方から聞こえてくる。
僕がしんどそうにしているのを見て、彼は歩調を少し緩めた。歩きながら、トンネルの内部を見回す。岩を穿って掘った名残として、むき出しの岩肌部分がいくらか残っている。トンネルの上部の岩肌には水がたまっているらしく、水漏れの音が続き、所々大きなツラ

ラがぶら下がっている。
「もうすぐだから。」
前方から彼が声をかけた。
トンネルの出口を出ると、上洞門に出る。かなり長い洞門内の舗装道を歩くと、やっと洞門を抜けた。そこを抜けると舗装された県道に真っ白な雪が積もっていた。日は昇っていて、朝日に照らされ一面の雪がきらきらと光っていた。暑さと急勾配のせいで息が上がった僕はそこで一息ついた。
そして前方を眺めると真っ白な雪を被った荒々しい感じのする山がそびえ立っていた。

「すごい。」
声を上げると
「聖岳だよ。」
と、ペットボトルから水を飲みながら悟が答える。
「へえ。」
「このトンネルを抜けてこの聖岳を見ると、大郷高地へ来たんだなあという実感がわくよ。」
彼が答えた。そこで聖岳を眺めながら僕らはひと息いれることにした。
この先は左へとカーブして緩やかな林道を30分程歩く。大きく張り出した屋根を右へと回り込み、笹とシラカバ林の平地を過ぎる。すると下り加減のスロープの先から三方連邦がゆっくりとその壮大な姿を現す。誰もがその雄大で美しい山々の姿を目にすると、息を呑み、感嘆の声を上げる。すばらしい絶景だそうだ。
ひと息入れた後、又歩き始める。呼吸も落ち着き少し余裕の出てきた僕は、歩きながら彼に聞いてみる。
「夏はどんな感じ？」
「夏は夏でいいよ。緑が本当に綺麗で、目が痛いくらいだ。」
彼の叔父さんがこの場所が好きで、毎シーズン何回か訪れている。

つまりそれに彼も同行しているから、冬以外にも春、夏、秋と訪れていることになる。そのどのシーズンもそれぞれに素晴らしいと語った。

「これから先に、まだいい景色を見ることの出来るスポットがある。」

「そうか。」

左へ右へと緩やかに大きくカーブして続く林道からはさっきの聖岳がいろんな角度をとって僕らの前にその姿を現す。

その聖岳を眺めながら歩いていくと、笹とシラカバ林で覆われた平地が見えてくる。その先を抜けて少し下りになっているスロープを歩いていくと、その例の三方連邦が見えてきた。

46話

「すごい！」
思わず歩いていた足が止まる。こんな綺麗な山々は初めて見る。誰も足を踏み入れてはならない神の領域。朝日に照らされて神々しいまでの輝きを放つ山々。太陽の光が当たる角度によって山肌に陰影が出来ている。雪を被った渓谷のその白い部分が、切り立った象牙の肌を連想させる。まだ上の方には靄がかかっていて、その稜線ははっきりとは見えない。緩やかに、時には荒々しく、手を繋いで広がる釣屋根。自分の方に迫ってくるようなその存在感に圧倒される。
「山が動いている。生きているよ。」
「おもしろいこと言うな。お前。」
悟が鼻で笑った。
だって見ていると、朝日が少しずつ本当に少しずつだけど、その照らす角度を変えていく。それがまるで山が生き物のように動いているように思えるんだ。
ぼーっと見とれている僕に彼が説明する。
「俺のこの指の先、わかるか？」
「あれが西三方だ。その横に並んでいるのが奥三方。そして前三方だ。」
彼の指差す方向を目で追う。すばらしい大パノラマだ。
すばらしい被写体を、腕の良いカメラマンがその卓越した技術で写真に収めた物を見て、なんて綺麗なんだろう、なんて素敵なんだろうって思うけど、実際にその景色を見た感動は、写真で見た時の感動とはるかに大きな違いがある。実際、その場所に立ってみるとみないとでは雲泥の差だ。その景色の中に立ってみて、現実、その場の空気を吸い、風を肌で感じ、その時の気温、つまり熱いとか寒いとかを感じる。そうゆう視覚以外の五感で実際感じるものって、

本当に凄いと思う。今の僕は五感全部でこの景色を堪能していた。
「すごいね。」
又、声に出してみる。
「さっきから隆博は？すごい、すごい？ってそれしか言わないんだから。」
悟はザックを降ろして、それに腰掛けタバコに火をつける。
「だって本当に凄いよ、きれいだ。」
「冬山初めてだもんな。」
彼の隣に腰をかけようとすると、
「雪の上に直接座るな。」
と、注意された。
それで同じようにザックを降ろし、それに腰掛けて聞いた。
「何故？」
「体温が下がるんだよ。ちょっとしたことだけど気をつけた方がいい。」
そうか。
彼はゆっくりタバコを吸いながらぼんやり三方連邦を目で追っていた。
僕はその紫煙の流れが気になった。
「山へ来てタバコはやめなよ。」
せっかくの景色が煙で台無しになるような気がした。
「うん、ごめん。この先は吸わないよ。」
そう言いながらもゆっくりと煙を堪能して、おもむろに胸から携帯灰皿を取り出す。タバコの火を消して、携帯灰皿をポケットにしまう。
「これからちょっと行った所に林道の分岐点がある。そこから川を挟んで左岸へ行く道と右岸へ行く道がある。」
彼が地図を見せた。
「どっちへ？」
「こっちだ。しらぬだの池がある方、右岸へ出る道へ。そこからは

雪があるからその分岐点でスノーシューをはこう。」

そしてまた林道を歩き始める。道には雪が積もっているが、たいして歩きにくいほどではない。少し歩くとその分岐点が見えてきた。なるほど、ここからは結構雪がある。普通の靴ではやはり歩きにくいかもしれない。悟に教えてもらって初めてスノーシューを履く。デッキの大きさがちょっと気になると言うと、あまり意識しない方が歩きやすい、左右のバランスが崩れて歩きにくいからと、彼は言った。　あまり雪のない平らな所で少し歩いてみて、スノーシューの感覚を掴む。

「前に出すようにして歩いてみて。ストックをうまく使え。雪面を蹴るようにすると疲れる。体重を移動させながら、前に出した足に体重を乗せたら後ろの足を前に出して、今度はそこへ体重を移動させて。」

教えてもらったとおりに歩いてみると、すぐに感覚がつかめた。綿の上を歩いているみたいで、不思議で結構面白い感覚だ。

「雪が深くなったら、スノーシューで平らに雪を押しつぶすような感じで歩くと結構楽だ。この先はだんだん雪が深くなっていくからな。」

真っ白なふわふわした新雪の感触を、身体全体で楽しみながら歩いていく。３０分程歩くと眼前に池が見えてきた。川かと見間違うほどの大きさで、池の周りは雪で覆われていて、誰もそこへ降りた気配はない。だけど動物はいるらしい。所々何かしらの動物の足跡が点在している。

これがしらぬだの池らしい。池のあちこちから枯れ木が点在して、それが雪を被り、この世の終わりのような悲壮感が漂っている。彼に聞くと、この池は大正時代に聖岳が噴火して、その泥流が川を堰き止めて出来たのだという。後方に先ほどみた三方連邦がそびえ、枯れ木がちょっと寂しい感じがするが、素敵なコントラストだ。僕

らは池を眺めながら、転々としている動物の足跡が何なのか、あれこれと思案してみた。
「夏なら鴨とかリスとか結構見るけどなあ。」
池の周りは結構広いスペースがあって、夏場などは絵を描きに来ている人や、池で泳いでいる子供たちとかもいるらしい。そんな情景が嘘のように今はひっそりとしている。
小さな足跡はよく見ると、４つの足跡がＴ字型に並んでいる。横２つに並んでいる方が後ろ足だとすると、これはうさぎだなと、悟が言った。
「うさぎ？」
「雪の上に出ているヤブや、雪の重みで垂れ下がった枝から、枝や皮を食べてるんだよ。その辺に隠れて様子を伺っているのかも。」
潜んでいるうさぎを脅かさないように静かにその場から離れた。

この先に、又湖があって湿原になっている。そこまで行ってからひと休みしようと彼が言った。本当は釜トンネルから歩き詰めで、途中途中休憩はとってはいるものの、座ってゆっくりするような休憩はまだとっていない。僕は少しバテていた。本当のことを言うと昨日の酒がまだ少し残っていた。
そこから田代湿原はすぐだった。田代湖という湖の周りを囲むように湿原の原が広がっている。もちろん今は雪で何も見えないが。田代湖は、しらぬだの池よりひとまわりほど大きな湖だった。池の中央に真っ白い靄がかかっていて、それが幻想的でとても綺麗だった。横に細長く３０センチほどに伸びた湖面にはうっすらと氷が張り、湖の周りを取り囲むようにブナやカラマツの林がそびえ、ケショウヤナギがうっすらと雪をまとっていた。まるで絵本の世界だ。
「あ、樹氷だ。」
悟が叫んだ。
僕が雪だと思っていたのは樹氷だった。よく目をこらして見ると、湖の周りの木々の枝々に氷が張っており、それが一面に広がってい

る。
「へえ、樹氷なんだ。初めて見る。」
珍しそうに眺めていると、
「めったにないんだ。こんなふうに樹氷が張っているのは。」
樹氷が張る条件は天気や気温、湿度などに左右される。よく晴れた日の朝晩は気温がぐんと下がる。その温度差が絶対条件らしい。今日は快晴になりそうだ。確かに昨日の晩はひどく寒かった。そして風がなかった。それも条件らしい。それにしても悟はいろんなことを知っている。それを言うと、すべて叔父さんの受け売りだと言った。
「どうしたの？」
彼が腕時計を見て、思案顔をしているので聞いてみると、
「まだ日が昇りきっていないだろう。あの方向から日が射して来ると、一瞬にして木々の樹氷が溶けるんだ。樹氷が風に乗って流れていく様はそれは綺麗なんだって。」
「綺麗なんだって、っていうことはまだ見たことはないってこと？」
「ああ、まだチャンスに恵まれなくて。」
彼の指差した方向を見ると、まだ山の岩肌に陰がじっとりと張りついていて、それが徐々に動いているのが見えた。
「どのくらい？」
「３０分後くらいかな？」
「待ってみる？」
「そうだな。」

47話

僕たちは、日が昇り樹氷が消えていくのを見るため、待つことにした。まだ日が昇りきらないため風が冷たく、突っ立ていると寒いので、僕らは雪で即席のテーブルと椅子を作ることにした。大きな雪玉を作り、何かの時に雪を掘って避難する穴を掘らないといけないかもしれないということで、折りたたみの小さなスコップを持ってきた。それで雪玉を叩いたり角を取ったりして、形を作った。

作業をしていると次第に身体が温まってきた。その雪で作った椅子の上にアルミのシートを引いて、ガスコンロでお湯を沸かした。そのお湯でコーヒーを作る。やれやれやっと温かい飲み物を飲んで休憩が出来るとほっとした。

「疲れた？」

悟が聞いた。

「いや。」

「二日酔いだろ。頭大丈夫？」

すごい、よくわかるなと感心すると、顔見てりゃわかるよと言った。そしていつもと状況が違うから具合が悪かったりしたらすぐ言えよ、とつけ加えた。

時計を見るとあれから３０分は経っていた。

「まだかな。」

「もうそろそろだろ。」

新鮮な朝の空気が流れていた。冷たくてひんやりして、それでも生まれたての新鮮な空気を感じる。　僕は横に座っている彼の顔を見た。コーヒーの入ったマグカップを暖めるように両手で囲み、じっと一点を見つめている。黒のニットキャップを目深に被り、いつもは生やしたことのない無精ひげを生やしている。それがひどく大人びて見えた。そして真剣な目。その一瞬を見逃すことがないように、一心に見つめている。樹氷が飛び去る様子はそんなに綺麗なん

だろうかと思った。カラマツやケショウヤナギが樹氷をまとい、真っ白な雪で覆われた広がる湿原を見て、これでも充分綺麗だと思っていた。

いや、彼はその一瞬にして崩れ去る美しい瞬間を待っているのだ。それが自分の元に訪れるかどうかなんてことは、本当は何の確信もないことだ。そんな美しくてはかない一瞬が訪れるかどうか、自分の中で賭けをしているみたいだ。まるで、それはそんなことはありえない、あってはいけないような夢をみているようだ。そう、まるで僕と彼のことのようだ。

彼の横顔を見つめる。

（そして最後の旅。もし彼が待っている瞬間がやってきても、それを2度と僕と一緒に見ることはないだろう。）

胸の奥が痛んだ。彼は何を思っているだろう。何も語らない。

時計を見る。４０分経った。

その時だ。山肌を舐めるようにして、日が作る影が徐々に移動している様をじっと眺めていると、日が完全に田代湖の上に躍り出た。一面に日の光がまるで粉を吹きかけるみたいに、湖を取り囲む林の木々の上に降りかかる。すると木々に張りついていた樹氷が魔法のように軽やかに、その身を今までの住処から日の光の中へ移動させる。それがきらきらと輝いて、一面宝石が飛び散ったかのような美しい光景を作る。僕は見惚れた。風に乗ってその宝石が自分のすぐ近くまで来るような気がした。

僕らは黙ってその光景を見ていた。ほんの一瞬。時間にすると何分、いや何秒？まるで夢みたいだ。

「まるで夢みたいだ。」

僕が心の中で思った台詞を瞬時に彼が口にした。そして満足そうに目を細め、口の端をあげて笑った。そして続けた。

「隆博と見られるなんて。」

僕はどきっとした。

「ひとりで見ても綺麗だけど、こういう景色って、ひとりで見ると何だか孤独を感じるんだよな。だから良かったよ。」
僕はなんて言っていいかわからなくて、黙ってうなずくと、
「美しいって儚いってことなんだよな。」
ぽつんとつぶやく。あの時のあの言葉。扶美もそう口にした。だけど今の僕にはこの言葉は別れを連想させる。切ない思いで、僕は彼の言葉を耳にした。
そして樹氷が飛び散って朝日がまんべんなくその姿にあたって活動をし始めた湖を眼前にして、僕らは名残惜しげに、ガスコンロなどを片づけ始めた。
（儚い、そう。美しいって儚いんだ。そしてこの時間もさっきの樹氷のように一瞬にして後方へ飛び去って、2度と戻らないんだ。）
何だろう。美しい瞬間を見た後って何でこんなふうに胸がしんみりするんだろう。多分彼も同じことを思っているに違いない、そう思った。
2人で休憩した跡を片づけ、その場を後にした。振り返ると、僕らが作った急ごしらえの雪の椅子とテーブルが広い雪の湿原の中にぽつんと立っているのが見えた。あの雪の椅子とテーブルも確かにあの美しい瞬間に立ち会ったのに、数日後には溶けて消えてなくなっているのだろう。そう思うとなんだか寂しくなった。だけど、僕らはそれを口にすることはなく川沿いの道を進んでいった。

テントを張る予定の大梨平のキャンプ場までの道を、川沿いに上流をさかのぼるような形で進んでいく。段々と雪が深くなっていくのがわかる。スノーシューで雪を踏み潰すようにして歩くのだが、時折バランスを崩してしまう。
「大丈夫か？」
時折、彼が振り返り声をかける。
「ああ。」
少し頭が痛いような気がして、すっきりしない。先ほどお昼を食

べた時に薬を飲んだのだけど、こんなふうにいつまでもすっきりしないような二日酔いは初めてだ。
調子が出ないなあと、思いながら歩いていると、そんな僕の様子が気に掛かるのか悟は度々振り返って声をかける。大丈夫だと答えながら、彼の背中を追うようにして歩いていると、ふと頭に浮かんだことがあった。
（そうだ。まだ日にちを聞いていない。）
東京へ行く日にちのことだ。吾郎さんの家で2人が話しているのを聞いてしまったけど、直接彼の口からは聞いていない。
（聞いてみようか。）
聞いたからといってどうなるものでもない。彼は東京へ行く。僕は又元通りの生活に戻るだけだ。

あの朝、彼は何もかも捨てて、お前だけいたらいいと口にした。だけど、それは一時気持ちが高ぶって思わず口にしてしまったことで、もしそれが悟の本音だとしても、乃理子さんと産まれてくる赤ん坊を見捨てるわけになんていかない。
どうしたらいいのか。どうすべきなのか。そんなことわかりきっている。
だけど、聞いてみたい。はっきり彼の口から。そう、別れをだ。
その方がすっきりする。だけど、その時、僕は冷静でいられるだろうか。
今まで、お互いの思っていることなんて、話して確認しあうべきではないと思っていた。そうしたところで何かが変わるわけではないし、聞いて余計にお互いつらい思いをするだけかもしれない。でもこうして一緒にいられるのはこれが最後だろう。最後だと思えば思うほど、その思いは大きくなっていく。胸を指すような焦燥感にかられる。このまま何もなかったかのように、お互いの生活に戻っていく。樹氷を見たときに作った雪のテーブルと椅子は数日経てば崩れて、春になって暖かくなったら溶けて消えてしまう。まるで現

実、僕らがそこに存在などしなかったように。
（聞いてみようか。）
また思いが頭をもたげた。行ったり来たりだ。歩きながらあれこれと思案する。ふと視線を川の流れの方へ移す。こんなに寒くて周りは凍ってしまうのに、何故川は凍らないのかな。流れているからだよな。
物思いにふけっていると、又声をかけれらた。
「休憩する？」
ぼんやりして悟の声を聞き逃した。
「何？」
「休憩するかって聞いてんだよ。」
彼が仏頂面で立ち止まった。

48話

「え、ああ。」
「いや、いいよ。」
「そうか。大梨平までまだだいぶあるから。なるべく早めに着いてテント張りたいし、いいか？」
彼は少し急ぎたいようだ。
「ああ。」
聞くタイミングを逃してしまった。
それでも、雪山は初めての僕には足元が悪く、歩きづらそうにしているのがわかったらしく、彼は少し歩調を緩めた。それで僕は周りをゆっくり見ながら歩く余裕が出てきた。
川原には所々雪が無く、岩がむき出しになっている所や、石がごろごろと転がっている箇所がある。そして川の流れを取り囲むようにして、雪を被った山々が並んでいる。何だか急にその川原に降り立って川の流れを間近で見てみたいような衝動に駆られた。

「悟、下へ降りてみたい。」
「えっ。」
彼はびっくりして振り返り、雪があるから滑るよと言った。
「無理かな。」
「そうだな。降りれそうな所を探すから、もう少し先へいってみよう。」
そう言って、少し進んでいくと、傾斜があまりなくて川原へ降りられそうな道があった。ストックを上手に使ってゆっくり降りていく。川原にはすぐに降りることができた。川原には岩がごつごつしていてスノーシューが駄目になるから、その辺を歩きたいならスノーシューを脱げよと彼が言った。それでその通りにして、川の流れが見える所まで歩いていってみた。またさっきのことを思った。川

は流れているから凍らないんだよな。そして何故か芙美のことを思い出してしまった。
広い川原だった。三方連邦の１つ銚子ヶ岳が川の上流の方に、ちょうど僕の目の前に位置していた。雄々しく人を寄せつけない威厳をたたえて、氷のように尖ったその尾根は、僕を威圧するように何も言わずに聳え立っていた。その靄がかかった中腹を見て、そこに芙美がいるような気がした。
人が死んだらどこへ行くんだろう？その時自分の頭に疑問がふと浮かんだ。身体は歩いてきたので熱く、暖かい体温を感じる。冷気を含んだ風が自分の頬をなでてく。身体は温かいのだが、表面が外に出ている顔などの部分には風の冷たさを感じる。
気温は何度だろう。１℃もないはずだ。こんなに寒いはずなのに、表面に出ている部分は別として、身体の中に血がめぐって、生きていることを感じさせるような体温の熱さを感じる。その様子を後方でストックを杖にするようにして立って見ていた悟が、同じようにスノーシューを脱いで僕の方へやってきた。
「何が見えた？」
そして僕の背中へ質問を投げかけた。
「あの世だよ。」
「あの世？」
彼はぎょっとしたように言い、そして笑い出した。
「何、それ？」
僕は言った。
「人が死んだらどこへ行くんだろうって、考えたことってある？」
「いやあ、ないな。自分は多分リアリストだろうな。そういう事って考えたことないな。」
「ふうん。」
「何、隆博はなんて？」
真面目な顔に戻って彼が尋ねた。
「いや、川の流れを見ていてふっと思ったんだ。あの世とかじゃな

くて、死んだら魂はどこへ行くのかっていう話。」
「魂？」
「そうだ。死んだら身体は灰に帰るだろ。でも魂はきっと帰る場所があると思うんだ。もしそういう場所があるとしたら、それはこんな所じゃないかなと思ったんだ。」
「なんていうか、神々しいというか人の叡智が及びつかないような、そんな場所に思えるんだ。ここ。死んだら人はどこへ行くかじゃなくて、魂だけになってあるべきところへ帰っていくんだろうなって思うんだ。」
「ふうん。」

感心したように、今度は彼が鼻を鳴らした。
僕は川の流れで磨き上げられる川中の石を見た。その流れは透明で澄んでいて、本当に川底まで綺麗に見える。川の中の石や岩のひとつひとつまでね。その澄んだ流れを見ていると実感する。この考えが真実だって。
それは、人は死んだら魂だけになって、何も考えない？無？の存在に戻るんだ。ここにある石ころや木の根っこや、川原に寝転がっている岩のひとつひとつや、もしくはこの川の流れの一環になって、やっと本当の安らぎを得るんだろう。それは本当に幸せなことかもしれない。そして長い長い時間？自分？という存在を意識することなく、ただここに空気のようにじっと存在するだけなんだろうな。
そんな話を僕がすると、悟はだまってじっと聞いていた。そして思いついたよう前方の山の中腹を指差した。
彼の指の先に銚子ヶ岳があった。
「あの辺りに？」
そう言い、遠くを眺めた。魂だけになって帰る場所。彼の目線も銚子ヶ岳の靄のかかった中腹辺りにあった。きっと彼は自分と同じことを感じている。そう思った。そうしたら急に何だか嬉しく、胸の中が暖かいもので満たされるような、そんな気がしてきた。

僕らは川沿いをどんどん遡って行き、今日の宿泊地に着いた。そこはだだっぴろい雪の平原だった。はるか遠くに山の尾根が見える。本当に広くて何も遮るものが無く、雪を被った木が隣接する林もかなり遠くに見える。

「こりゃ、風が強いとかなり寒いね。」

僕が言うと、

「そうだなあ、テントが吹き飛ばされるかも。」

彼もにやにや笑う。

この大梨平のキャンプ場は、夏は本当に美しい牧草地で、牛なんかが草をはんでいたりして、それはのどかで牧歌的な雰囲気が漂うとてもいいキャンプ場らしい。もちろん、今はただ真っ白な雪の平原だが。

「夏はな、この辺まで来ると観光客もほとんどいなくてのんびりできて、叔父さんと来てはテントを張り、魚を釣ってきて焼いたりして過ごすにはそれはいい場所なんだ。」

そうか。僕としては夏に来てみたいな、こんなに寒くはないだろうし、緑の広がる平原で昼寝なんぞしたらずいぶん気持ちいいだろうな。

「出来れば夏にして欲しかったなんて、思ってるんだろう？」

「よくわかるね。」

僕の考え、図星だ。

「ふん。」

「まあ、早めにテント張ろうぜ。食事の支度もしないといけないし。」

「ていうか、どうせそれ僕でしょ。悟、料理出来ないから。」

「悪いな。」

「これを機会にチャレンジしてみたら。」

うん、そうだなあ、なんて言いながらがさごぞと道具を出し、テントを張る準備をしている。全くやる気なんてないんだから。

それでも雪を踏み固めて、テントを張る敷地を確保しているうちに身体も温まり、なんだか楽しい気分になってきた。気がつくと頭の痛みも和らいできたみたいだ。悟はこんなことはかなり馴れているみたいで、手際よく準備し、テントを張り、寒さ除けと防水のために外側にもシートを張った。中には何枚か重ねてマットを引き、寒さをしのいだ。

「眠れるかな？」

僕が聞くと、

「寒さで時々目は覚めるだろうな。」

あっけなく彼は答えた。

そうか。まあ、いい。

まだ日が昇っていたから、外にテーブルを作り、食事の支度をし始めた。風がなくてありがたい。

「で、夕ご飯は何？」

彼はうれしそうだ。

「キムチ鍋は？」

「いいね。」

49話

そう、食事などの食料担当は僕。それ以外のテントなどの装備は彼の担当だ。

バーナーで火を起こし、鍋に湯を沸かす。キムチ鍋の素をいれて汁を作り、冷凍して持ってきた野菜や肉を入れる。事前に切って冷凍した食材を持ってきたのだが、解凍することなく、1日経った今でもそのまま凍った状態のままだ。まあ、これだけ寒いんだから当然といえば当然なんだが。明日の朝はこの残った汁にレトルトのご飯を入れて雑炊にする。湯を沸かし、切っておいた材料を入れるだけだからあっという間に出来上がる。真っ白い湯気がもうもうと雪の平原に立ちのぼる。他にテントを張っている者もいない。まるでのろしを上げているみたいだ。

「出来たよ。」

テントの設営をしていた彼が振り返った。

「もう？」

「だから、切った材料を入れるだけだから、悟でも出来るよって言ったじゃん。」

「いや、お前が作ったほうが絶対うまい。」

絶対食事当番をやろうとはしないんだから。

まあ、いいか。荷物の中からお皿やコップなどを取り出す。他はソーセージ、缶詰やサラミなど。もちろんお酒も。寒いので温まるのがいいということで焼酎のお湯割にすることにした。

で、僕らは焼酎をちびちびやりながらいろんな話をした。まず僕はずいぶん前から聞いてみたかったことを聞いてみた。

「前から思っていたんだけど、悟は何でも出来るのに、何故料理が出来ないの？」

そう聞くと、彼は困った顔をした。

「何故、って言われても困るなあ。」
「だってひとり暮らしで絶対出来ないと困るのに。」
「そうなんだけど、まあ、出来なくても食べるのには困らないし。やろうと思ったことも無いからなあ。何故って言われても思いつかないよ。」
　それからそんなこと初めて聞かれたとも言い、ちょっと考えてからこう続けた。
「叔父さんに似たんだろうなあ。」
「例の叔父さん？」
「ああ。」
「子供の頃からいろんな所へ連れて行ってもらって、その大半はこんなアウトドアだから、もちろんキャンプやらバーベキューやらで料理をする機会はあったはずなんだけど、叔父さんが飯合でご飯を炊くといつも真っ黒で、そのまずい飯をいつも無理やり食べさせられた覚えがある。その頃はレトルトのご飯なんてなかったからね。」
　叔父さんはアウトドアでも料理を楽しむようなタイプではないんだ。それが一番の楽しみなんじゃないかと思うんだけど。
「それで叔父さんがやっているのを、見よう見まねでやってみたこともあるんだけど、多分料理のセンスがないんだろうな。叔父さんと一緒だ。真っ黒のご飯しか出来ない。カレーもまずくて食べれたもんじゃない。せいぜい肉とか野菜を焼いて食べるくらいしか出来ない。それでも充分楽しかったけどね。」
「ふうん。」
　隆博は？と振られたので、
　母親が料理上手で、たぶんそういうのを食べたり、母親が台所に立っているのを見ていたりしているからかなあ。別にどうしてってことはないんだけど、大学に入ってから、自炊を始めたりしているうちに何となく出来るようになっていただけのことだと、説明した。
「天性なのかなあ。そういうのって。」
「天性？」

「うん、今までつき合った女の子が作った物より、お前が作る物の方がうまい。」
「女の子には勝てないよ。」
そう言いながら、母親が、千夏よりあんたの方が料理がうまいと言っていたことを思い出した。
「あんまり、褒め言葉にもならんね。女の子じゃあるまいし。」
そう言ってむくれると、
「ごめん、でも得意なことがいくつかあるっていいことだよ。それに男だから料理が出来ないで通る時代でもないしね。本当は少しくらい出来たほうがいいなあって、思うこともあるし。」
「得意なことねえ。悟は得意なことがありすぎるよ。なんでそんなスーパーマンなのかね。」
「そうか？」
自分で自覚が無いのか。
「昔、母親に言われたことがある。いろんなことが出来た方がいいって。何でかっていうと、それは自分の為ではなく、いろいろ出来ることがあると、それを人の役に立てることが出来るからだって、言われたんだ。」
「お母さん良いこと言うね。」
「ピアノを無理やり習わされたときにそう言って説得された。」
「幼稚園の子に？」
悟がピアノを習い始めたのは幼稚園の頃だと言っていたことを、思い出した。
「ああ、たぶん母親は子供が小さかろうがなんだろうが、一人前の人間だと思ってしゃべっていた部分があったんだ。」
母親の話をするなんて珍しい。だいぶ酔ってきたのかな。僕は火の加減を見ながら、野菜や肉を入れた。煮立ってくるとそれを取り皿に取り分けてやる。
「そうなのか。何でそんなにいろんなことが出来るのか不思議だった。」

「多分、積み重ねっていうか、習慣だな。」
「習慣？」
「子供の頃、偉人の話を本で読んだりして、何で同じ人間なのにこんないろんなことが出来る人がいるんだろうって不思議だった。で、その人たちがどんなことをして、どんな生活をしていたのか調べたんだ。」
「それで？」
「うーん。難しいことなんだけど、いや、でも難しいと思ってしまったら何も出来ないんだ。何かを成し遂げようとする時、最初からそれを難しいって考えちゃだめなんだ。そのことを何回も練習したり、出来ない所は何回もやったり、分からない箇所があれば勉強して調べたりするだろう。それを毎日やるんだ。習慣にしてね。それでひとつずつ自分のものにする。その数が1個、2個、とちょっとずつでも増えていくだろう。それが自分の自信につながるんだよ。その…なんていうか、パズルを解くみたいな感覚かな。何となく、こうすれば出来るだろうっていうような仕組みがわかってくるんだよ。」
「ある日、それがいろんなことに応用出来るって気づくんだ。」
僕が頭に手を当てて、言葉の意味を噛み含めるように考えながら聞いていると、
「難しいか？こんな話。」
悟が怪訝そうな顔をした。
「いや、そんなことは。」
「でも常人にはちょっと理解しづらい話かも？」
と、笑うと、
「俺、変わってるってこと？」
彼も笑った。いつもはどれだけお酒を飲んでも顔色ひとつ変わらないのに、珍しく顔を赤く上気させいる。
「いや、すごいって思っているよ。」

鍋をつつきながら何倍か杯を空けているうちに、日が西に傾き始めた。うっすらと周りが暗くなり始め、ランタンの灯をつけようと立ち上がった。僕はまたふと先ほどのことを思い出した。

（聞いてみようか。）

ゆっくり話が出来る時間がまだたっぷりある。ランタンの灯をつけ席に戻る。話しかけようと思うのだが、彼の顔を見ると口を開くことが出来ない。楽しそうにしている彼の顔を見ると何だか口にすることが出来ない。

「どうした？」

「別に。寒くなってきたね。」

せっかく気分良く飲んでいるのに雰囲気を壊すことはない。そう思い直して話題を変えることにした。

「寒いときは鍋が一番だね。」

「結局これが一番簡単だしな。」

僕らは今までの順調に来た行程の話をし、山の上で何が食べたいかなど話をした。彼は山の上でカキ氷が食べたいと言った。

50話

「カキ氷？」
びっくりして尋ねると、
「雪山に登った時に、頂上に綺麗な雪があるだろ。アズキ缶とコンデンスミルクを持って行ってそれにかけて食べるんだ。」
聞いただけで寒そうな話だと、身を震わせると、
山に登ると結構暑くて汗をかくから、意外と美味しいんだと言った。
「で、明日やってみるの？」
「ああ、美味しそうだろう？」

明日、僕らはこの大梨平のすぐ先にある水晶平まで登ることにしている。吾郎さんが僕にこっそり教えてくれたことによると、本当はもう少し先にある、標高がここより数百メートル程高い別の峰に登る予定だったらしい。馴れていて何回も登っている者ならいいが、僕みたいな初心者にはさすがに無理だと、吾郎さんが進言してくれたおかげで変更になったらしい。
もう少しで雪山遭難するところだった。とはいえ、本当は明日その水晶平に登るのも気が進まない。平坦な道でも結構歩きづらいのに、山歩きだなんて。
「そういえば体調は大丈夫か？」
僕が二日酔いで頭が痛いと言っていたことを思い出して彼は言った。
「だいぶいいよ。」
「そう、でももうあまり飲まない方がいいかな。」
そして、あちこち登った山について話などをしていると、あたりは真っ暗になり、焚き火を焚いて、ガスバーナーの火で鍋をしているとはいえ、さすがに辺りが冷え込んできた。

「結構冷え込んできたな。」
温度計を見るとマイナス13度。テントの中でもマイナス6度しかない。
「テントの中でも氷が張るよ。」
「本当に…？」
「水を張っておくとさ、すぐに凍るよ。」
悟は楽しそうだ。寒さにはずいぶん強いみたいだ。それでも結構な時間が経っていた。僕らは早々に片づけて、テントの中でもう一杯やることにした。

テントの中に入るとそれでも結構暖かい。風がないからいいな。外はだだっぴろい平原だから少しでも風が吹くと寒い。着られるだけの服を着て、シェラフに包まる。ランタンの灯りをひとつにして、タバコをふかしながら又いろんな話をした。子供の頃の話や、あちこちに行った話や、熱中していたスポーツや趣味のことなど。
悟はまだずっとあれから飲んで、タバコをふかしていたが、僕は明日峰へ上るのに、酒が残っているとまずいと思い、止めることにした。それで時折会話が途切れて、外の様子を何とはなしに伺っていると、テントに落ちる粉雪の音が断続的に聞こえた。あとはランタンのシューッという燃焼する音が聞こえるだけだ。
「全く静かだな。」
「あの世に取り残されてしまったような気がするね。」
僕が返すと、
「？あの世？とかいうと、そういえばさっき川原で変わった話をしていたな。」
彼が聞く。
「何？」
問うと、
死んだ人の魂はどこへ行くのか、という話だと彼が言った。また芙美のことが頭をよぎった。

「さっき、俺感心していたんだ。」
何のことかと聞くと？死？に対してあんなふうにいろいろ語れるっていうか、しっかりした考え方を持っていることに対してだと言った。
「２０歳そこそこでそんな？死ぬこと？なんて考えないもんな。本当にずっと先のことで、実感として感じたことなんてないからな。」
「普通、そうだろうね。」
つぶやくと、そのまま２人とも黙り込んでしまった。
彼が何か聞きたそうだった。そして僕の顔をじっと眺めて、
「何を考えている？」
と、尋ねた。
「別に。」
芙美のことを考えていることを気取られないように、さりげないふうを装って新しいタバコに火をつけた。
「でも本当はこんな風にしている時でも、きっと？死？はすぐ側にいるんだと思うよ。」
そう言うと、
「怖がらせないでくれよ。」
そう言って彼は身を縮めた。
怖い話が大好きなくせに結構怖がりなんだから。僕がその様子を見てくすくすと笑うと、
「誰か好きな子っていたか？」
いきなり聞いてきた。
「藪から棒に何だよ。」
僕が芙美のことを考えていたことがわかるみたいだ。
「最初に好きになった子って？どんな子？聞いてみたい。」
「えー、いいよ。そんなこと。」
はぐらかそうとすると、聞きだそうとして彼はしつこかった。
しょうがなく、芙美の話をした。中学校から同じクラスでずっと片思いをしていたこと。高校生になって仲良くなり、グループでいろ

んな所へ遊びにいった話なんかを。
「それで今何している？その子？」
（イマナニシテイル？ソノコ？）
同い年。大学生だったのか、社会人になって働いていたのか？思いっきり胸を凍った手でひっつかまれたような気がした。僕が戸惑って黙り込んでいると、
「聞かない方がいいかな？」
遠慮がちに彼が言った。
「いや、別に。でももういないんだ。その子。」
さらさらとした粉雪がテントの側面を滑り落ちる音がした。ちょっとした間があって悟が思い切ったふうに尋ねた。
「死んだのか？」
「ああ。」
自分が今どんな顔をしているのかが気になった。彼に表情を読み取られたくなかった。
「事故でね。結局自分の気持ちすら伝えることが出来なかった。でも、彼女、好いていてくれたんだ。死んでからわかったことだけどね。ずいぶん後悔した。」
「そうか。」
「彼女は本が好きで、英語が得意だった。いろんな洋書を原文で読んでいて、最後に彼女が僕に渡してくれた本が原書だったんだけど、その頃、全く英語が出来なくてね。でも何とかそれを読みたくて、一生懸命勉強した。それで何とかその本が読めるようになって、それでかなあ、何となくその辺から翻訳をやりたいって思いだしたのは。」
「彼女もそういうことやりたかったんだろうな。」
「ちゃんと聞いたことってなかったけど、そうだったのかもしれない。」
ふうんと呟いて、悟が黙り込んでしまったから、僕はこんな湿っ

ぽい話をして悪かったなと思い謝ると、
「いや、ちょっとその子がうらやましいなって。死んだ人はいつまでも思い続けてもらえる。永遠に。さっき川原で思っていたのはその子のことなんだろう。だからあんな話を…」
彼が寂しそうな顔をして、また黙り込んでしまったから、僕は口を開いた。

「死んだ人はいつまでも忘れられずに思い続けてもらえるって。そうだな、若い時の姿のままで、美しい思い出になって。でも、それがうらやましいって？でも、僕はそんなの嫌だ。生きているその人の声を聞いて、その身体に触れていたいよ。」
僕は悟のことを言った。彼が理解してくれるといいと思った。
「相手の歳を重ねていく姿を見たいよ。その人との間にどんなに汚くて、見苦しい思い出が増えていったって。その中には目を向けたくないような、どろどろとした嫌な思いもあるだろう。でもそれでも、そのままそこで自分の気持ちだけが取り残されたまま止まっているのよりはいい。自分の気持ちがそのままそこで動けないまま、止まっているのは苦しいよ。もうそんな思いは嫌だ。」
僕は彼の両腕を掴んだ。僕は彼が年齢を重ねていく姿を想像してみた。その目元に皺が増えていく姿を。たぶん僕はそれを見ることはない。腕を掴んだ手に力を込めた。彼は僕の手を取った。
「悪かったよ。うらやましいなんて、軽いよな。ごめん。」
僕は別に謝って欲しいわけではなかった。今思っているのは芙美のことより、現実に目の前にいる相手のことだった。彼も同じ気持ちだろうか。そうだったいい。だけど彼は何も言わなかった。
また、テントの側面を雪が滑り落ちる音がした。僕らは黙って、その音を聞きながら眠りについた。

51話

しばらくうとうとして眠りについたと思うと、寒さでふと目が覚める。背中に冷気が這い上がってきて、寒さで震える。それでも眠たくて、その睡魔と寒さとの間で夜中、僕はうろうろしていた。

朝、目が覚めると、悟の言ったとおりに、昨日飲みかけで放っておいたコップの酒が氷になっていた。手元の懐中電灯で照らしてみる。そして腕時計に視線を移して時間を確認する。まだ4時を少し過ぎたところだ。テントの中は真っ暗で、夜明けはまだまだ先だと暗闇が告げている。隣を見ると悟は寝息を立ててぐっすり寝込んでいる。起き出すにはまだ早い時間だが、これ以上シェラフに包まっていても眠れそうになかったので、起き出すことにした。

外に出ると真っ暗で、鋭いナイフのその切っ先で、頬を切りつけられるような冷気が身にこたえた。指先が凍りそうだった。僕は自分の指先に息を吹きかけ、ランタンに灯をともした。昨日、焚き火用にと取っておいた木片がテントの脇に転がっている。雪に濡れないようにシートを被せておいたので、大丈夫。すぐに火が起こせるだろう。僕はその木片を積んで、バーナーと着火材で火を起こした。ちらちらと赤い火が木片の間に見え隠れし、やがて大きな炎になる。

まだ夜が明けきらない暗い雪の平原に、そこだけがまるで生き物のように揺らめき、ぽつんと赤い色をともす。僕はその火で凍えた指先を暖める。指先に感触が戻ってくると、ポットに水を入れ火にくべる。何かの映画で観た。こんなシーン。火を起こし、ポットにお湯を沸かしてコーヒーを入れ、それを飲みながら夜明けを待つ。漆黒からダークグレー、そして灰色を含んだブルー、やがて夜明けが近づくと乳白色の空へと。

遠くで鳥が鳴くような声がした。こんな静かな時間にひとり身をおいていると、現実の自分が住んでいる世界が、本当に思いもよら

ないほど遠い所にひっそりと現実味をなくして崩れ落ちたままになっている。そんな夢とも現実ともつかぬような想いをひとりめぐらせる。

夜と朝の境目の時間。不思議な感覚だ。誰もいない。誰の意識もこの僕の時間を邪魔しない。焚き火と自分の吐く白い息だけだ。そして寒さを感じる感覚だけが残される。

そうしているうちに東の空が徐々に明るくなってきた。一面に広がる薄いブルーグレーの空の切れ間から乳白色の空が遠慮がちに顔を覗かせている。今は曇っているけど多分徐々に晴れてくるだろうと思っていると、

「早いな。」

ふと後ろで声がした。その声で僕の意識は一気に現実に引き戻される。

「悟。」

「眠れなかったか？」

そう言って眠そうに目をこすり、僕の側に来てその鼻先を僕の頬に押し当てる。彼の冷たくなった鼻先の感触にくすぐったいような感じを覚える。子供のような仕草。彼の目を見る。ふいに笑みがこぼれる。

そう、それでも半分は僕の意識はまだ夢の中だ。

そして彼も。

お湯が沸いた。白い湯気が薄暗い平原に立ち昇る。それでコーヒーを作り、彼に手渡す。僕も同じようにホーローのカップに黒い液体を注ぎ、それを飲みながら朝食の準備をする。東の空がだいぶ明るくなり、ランタンの灯りで手元を確認しなくても楽に作業が出来るようになった。空が白み始めると、悟もテントを片づけ始める。僕らは朝食が出来るまで、黙々と己のそれぞれの作業に没頭する。朝食用に、昨日のキムチ鍋の残りにレトルトのご飯を入れ雑炊にする。そしてフライパンでソーセージを炒めていると、ふいに左の目

の奥がずきんと痛んだ。手元の視界がふと一瞬白くなった。その様子に気づいた悟に
「どうかしたのか？」
と、声をかけられた。
「いや。」
（具合が悪くなったらすぐ言えよ。）
初日にそう言われた彼の言葉が頭に浮かんだ。
（二日酔いにしては長いな。風邪をひいたのかなあ。）
そう思ったが、それでも体調の不良を彼に告げることはやめた。悟はちょっとの間、じっとこちらの様子を伺っていたが、僕が何でもないふうに作業を続けていると、それきり何も言わず片づけを続けた。

火にあたりながら朝食を食べていると、徐々に太陽が昇り辺りが明るくなり始めた。雪の平原のはるか向こうに聳える山頂を眺めていると、高い頂きの屋根の向こうから白い朝靄がゆっくりと立ち昇り、そして空へと消えていく。そして山の足元にまとわりつくように覆っていた白い靄も徐々に風に流れて、空の高い所へと吸い込まれていく。朝日に照らされて明るく輝く白い雲が、青空と共に大きく、まるで絵画のようなコントラストを描き出すと、やっと実感として僕らの周りのものすべてが動き出したことを感じる。ぴーんと張りつめたような朝の冷気の中に立っていると、体中の古い細胞がすべて新しいものへと入れ替えられるような、そんな気がした。
「行こうか。」
僕が山の方を見ていると、早々に荷物を片づけた悟が声をかけてきた。
「ああ。」
僕らは大梨平を後にし、歩き始める。僕らがテントを張った大梨平を足元にはべらせるようにして銚子ヶ岳がそびえる。僕らが今日目指すのは、その銚子ヶ岳の登山道を少し上がった所にある水晶平

だ。目的は行く道筋にある樹氷の森を見ることと、水晶平から見る三方連邦だ。本当は違うルートで行く予定だったが、吾郎さんにだいぶ言われたらしい。遭難させる気かって。悟が考えていたのはいつも叔父さんと行くルートで、かなりアップダウンのきつい道筋が続くルート。で、しかも水晶平よりもう少し上の方まで行くつもりだったらしい。

吾郎さんに言われて変更したルートは、初心者でも登れる傾斜のあまりない水晶平に続く道だ。ブナやナラが点在する森林を抜けると、スキー場のような広いなだらかな平原に出る。その三角地点に景観のすばらしい開けたところがあるらしい。時間にすると2時間程。このくらいなら何とか。とは、思ったが、すぐに林道から脇に反れる登山道に入ると、その考えが一気に払拭された。

雪が膝下まであり、ラッセルしながら進む状態だ。雪面にスノーシューの先を蹴りこんで、雪の中にステップを切るようにして登る。ストックでバランスを取り、片足の膝を軸にしてスノーシューを後ろに振り上げてから、雪面にスノーシューの先をしっかりと蹴りこむ。しっかり雪面に入ったのを確認し、踏み込んで体重を乗せて立つ。そして反対の足で次のステップを切って登る。その繰り返しだ。最初はバランスを取りながら蹴りこむことがうまく出来なくてふらふらしていたが、何回か繰り返しているうちにコツがつかめてきた。そうして細い急登を登りきると、少し幅の広い道に出たので、身体を横向きにして登る。

「スキー場で斜面を登る時みたいだな。」

と、声をかけると、

「ああ、でもお前うまいわ。雪山初めてとは思えん。」

息もきらさず悟が答えた。

「運動神経いい方だな。」

「ずっと野球やってたからね。」

「ああ、そうだったな。イメージわかんけどな。」

と、笑った。

それでも数１０分歩いただけで、息が上がった。気温は氷点下マイナス１０度近いはずだが暑くて汗が吹き出る。彼が振り返り、振り返り声をかける。

「大丈夫か。休むか？」

大丈夫だと答えるが、それでも無理しない方がいいからと休憩をすることにした。立ったまま水分を補給し、チョコレートを広げる。やっと余裕を持って周りの景色を眺めることが出来た。まだ林の中で、ブナやミズナラの木々に覆われている。林の隙間から真っ青な空がちらりと顔を覗かせている。　木々の細かい枝の先までが樹氷になって凍りつき、あたり一面は真っ白な雪の林だ。

「天気が良さそうだ。」

悟は満足そうだ。

「この分なら一日大丈夫そうだね。」

と答える。

そして、その場所で5分ほど休憩をし、又歩き始める。さらに少し登って開けた地点まで出ると、辺り一面の林の木に、その枝の先々までが樹氷になっていて、陽の光を受けてきらきら輝いている。風が吹くとその風に乗って氷が当たり一面に飛び散り、まるでダイヤモンドみたいだった。その陽にあたった氷のかけらが目に飛び込んでくるように感じて、ふとめまいがした。目の前を白いものがふっと横切ったように思えた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4512v/

この手のひらで消える雪のように（彼の娘：続編）

2011年11月20日20時26分発行